

漫雨
筆窓

綠

蓑

談

須

藤

南

翠

雨隱漫筆
綠
蓑
談



(原本表紙)



(原本題字)

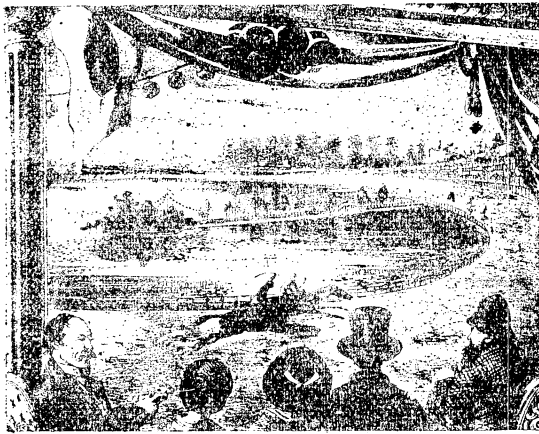
外史未だ教の庭に在りつる頃米人リーバー氏が著はす所の自治論 (Self Government)

一名 (Civil Liberty) を讀みて聊か感ずる所ありつる儘を筆に止め一篇の小説として其が儘簡底に藏めたりしが頃日社會の氣運を觀るに良や目を政治上に注ぐ者多かるを以て政治小説 (Political Novel) の如きも大に密接の關係を有つの傾きあるやに思考せらるゝより偶ま簡裏に探り之を把出しこゝを削りかしこを補ひ骨を留め肉を人情に假て全體を粧ひ見に彼鶏肋愛を割難きと云へる類にや又捨難きの想ひあり依て題號も元の儘に「綠蓑談」と稱へて茲に紙上の餘白を借ることとはなせり其主旨専ら中央集權と地方分權との問題に係れるとは雖も皮相よりして味ひなば通篇總て情史ならざるはなく退いて之が氣骨を味へば滿卷悉とく政論ならざるはなし然はいへ外史學び淺く才薄く分筆最も拙きに而も舊時の起りに成れるものなれば吾身ながらも倦厭の嫌ひなきに非ず此を人に示さんば愧なきの甚だしきに似たれども編輯人の督

促餘りに切なれば纔に端を啓く事となしぬ
看客幸ひに其の拙陋をな咄ひ給ひそ

發端 兩枝の若葉

熱鬧狂顛の桃櫻は梢の雪と下布きて都門の紅塵縁かに治り閑遠幽棲の新緑は兩の旦に色榮て雅客の詩腸切りに騒ぐ首府東臺の新風光昨日までも満山を覆ふと見てし白雲は今日端雲の巔とぞなりぬる一瓢を携へて筇を二本杉に曳くは初郭公の聲またるゝ俳人なるべく愛兒を誘うて歩を日永の原に運ぶは教育博物館の縦覧を終りしなるべし全體より評する時は花洛て人罕に人罕にして趣き靜雅なりと云ふべし根津の舊廓は毀たれて亞細亞大博覽會場の新築は未だ工事の半を竣らず日本鐵道會社の新線路は今や都府の半を通じて汽笛の聲良や盛んなり時に二千五百四十九年四月二十八日は不忍共同競馬會社にて春季競馬會を催すべき第二日目に相當して此日は貴夫人令嬢の一致合力に成立たる婦人財義賞の當日なれば曾て新聞帯の廣告に據りて其の盛況を一覽せばやと在府の貴顯紳士は固より遠近より集ひ來る看客は肥馬に鞭ち



(原本口繪)

馬車を乗り人力車を急して上野公園に走ること宛然一點の中心に巨多の光線の蟬集するに異ならず上野大路の雑沓は實に鼎の沸くに等しく眼界の遶する限りは一塊の土をだも見ることも能はじ遠く不忍の池畔を望めば四圍到る所の彩起風のまに／＼池水に映じて汀頭花を漂はせり中島の長駝亭には天をも凌ぐべき日章の大國旗を翻へし馬見所の樓上には深紫の幔帳をうち張り眞紅の總角もてたゞ中をしぼり揚げ樓

下にも赤紅白の段幕に和風を包ませてうたせたり貴夫人令嬢の正客は今日を嘖々と粉黛を凝し彌が上にも化粧して靚を競ひ綺を門はし肅然として樓上に肩流れたる其の態一様ならずして或ひは異昇絳の妙華なる洋服を纏ひ白鷺のボンネットを戴きたるあり或ひは朱絳の袴を穿ち綾羅の袴を襲へたるあり或ひは小紋縮緬の紋服に白綸子の袴を重ね古金襴の帯ゆたかに結びたるあり染の振袖縫の被布澤田の春深うして百花の色を争ふが如く瀧の川の秋残りを惜みて紅葉の錦を織るが如し此の夫人淑女等が餘財を積みたる錦囊を手づから受くる紳士こそ誠に名譽の至りなれ中原の鹿執れの手に歸すべきにやと萬人の志想こゝに注ぎて勝負如何と待儲けたるは寔に泰平の昌事といふべし此雑沓を厭へるにや果餘に見る所ありけるにや年の頃は二十四五なるべく色黒く鼻隆からず頭髪薄く赤みたるが其の割合には眉秀で口唇は薄くして齒は綺麗に揃ひたり眼光やゝ鋭き方にて思ひを凝す事ある毎に兩眼を閉ぢ眉を擧めて兩手を頭に加ふる癖あり丈は高き方ならねど一體に瘦たるが故に一人にて直立すれば聊か高きに過るの見あり紺羅紗の獨逸背廣に蘇格の古びたるズボンを着ち黒羅紗の低き帽子を戴きて法蘭

西皮の半靴を履き右手に自然木の杖を携へボツケツトに一卷の洋書を入れて徐かに山王臺を遙しつゝ冷笑ひて口の裏に
(京)土氣を舞舞して馬四を慣す爲だといふから競馬も財囊も悪くはないが教育もない「レデー」から貰つた處が名譽でもなからう、大よりやア……、地方の困憊でも救ふ方に注意をすることは出来ないか知らん
ト獨り言て櫻なる新葉光を覆ふまで最と靜逸の地を下し徐かに櫛を拂ひつゝ腰うちかけてボツケツトの書冊を把出し讀居たるが體で思想を費すべき至難の章句のありけるか書物を膝に置たるまゝ兩眼を閉ぢ眉を擧め雙手を首に押當て切りに考へ居る折から第四競馬も勝負を判ち婦人財囊の名譽ある勝賜も既に果けるが紳士と覺しく綾羅紗のイヴニング、コートを纏ひたるとフロック、コートの左の臂へ競馬會社の徽章を懸たる二人に續いて商人なるべし赤毛の入りたる蘇格の背廣を着たる一人の男憚り氣もなくうち語うて側に設けし椅子へ並びて座を占めりチモンドの紙巻煙草を吹しながら
(甲)何です僕の慧眼には恐れ入たらう、此の勝負は何と云ても綠野に極つてのサ都

なんざア名馬でも何でもモウ先が知れてる老馬だから、那なものに懸るのは僕の先見が明かではない。君達が目が見えないのサ、何でもいゝから出し給へ。と恐れ入たヨネエ君仕方がないサ。受渡しをしッちまはうエ、(可私)やア實に馬鹿を見ました。(乙)ナニが(可)何がぢやア有ません。競馬……エーお恥かしい事です。が競馬は實は始めて出ツ會したのですから。(乙)だって夫は仕方がないサ、其代り今度の次は物の美事に向うの鼻ッ柱をボツ挫いて遣るから大丈夫だヨ、緑野……緑野が可笑い、アノ一都は當時日本第一の名馬だから田舎の瘦馬なんぞに負る馬ぢやアないンだけれど出遅れたのが此方の不運サ、ナアニ重量さへ平均なら何して、負やアしないヨ、ウム、ナニ乗人……乗人だツて久保田だとか下村とか林だとか云々名入とは何せ太刀打の出来る人物ぢやア有やアしない、一體那の山田文治といふ人間は民権家の鼻樑で馬なんぞの飼へる人物ぢやアなかつたが、ソレ來年の一件で無闇に法螺吹演説をやらかして田舎の舊家を騒がしちやア體裁よく取込んだので漸と紳士らしい面が出来て來た位な男だサ。偶にやア、財義の一つも恵んで遣るのが都人士の花になつ

て宜らうアハ、いゝ、いゝ、(甲)へん敗れた悔しンばに馬鹿に悪く言ふぜ。夫な諷刺は何でもいゝから約束の金を遣し給へ、ナアニ些と位悪く言れたツて金さへ儲かりやア商賣人の職分は濟ます。(乙)悪く商人根生を出す奴だ。(可)是りやア嚴しいお差合が有ますぜ。(乙)イヤ失敬失敬、併し君のやうな純粹の商人の事ぢやアないヨ、コ、此奴が悪く怒張るからサ。ト自暴が誘ふか悪聲を出して頻りに罵罵つ、裏がくしより夾襖を濡えながら取出し銀貨と紙幣を取交て出すに一個の商人も口の裏にて瞬きながら是も幾千か揃ひたる兌換紙幣を取出し、て共に彼方のイヴニング、コートを着せし男に遇與に莞爾と笑みて額を改め

(甲)隨かに五十圓受取たヨ、其の代りにやア君達に夜食を僕が驕るとしよう、ネ、宜からう。(乙)夫れ位な事はなすツてもネ、エ旦那ぢやア有ませんか。(乙)無論々言なくツても當然の事だ、一體競馬なんぞといふものは國威を輝かす爲めの道具だから一個人の損徳は何でも宜しい、精養軒へでも行て夜食と出かけ身體を肥して日本人種の改良に着手すべしサ。(甲)飛だアリストートル(學士の名)だ、今時國を先にして人を後にする見を立ると書生さん

に參れるぞ。(乙)何でも、宜しい。何せ今日丈は田舎馬に勝れたから都人士は黙つて居るヨ。(甲)ドレ御案内申し上ようか

ト勝利を得たる其の人が先に立てぞ歸りける後を見やりて件の書生苦笑ひして去もせずボツケツトより●煙社の脂拔煙草を掴み出しマツチを探れど何れへか落せしと見え更にあらねば若し此邊に休息して喫煙する人なからずやと回看す向うに一個の淑女妙齡二八可ならんか伊太利絲の華美を極めし最も綺々たる洋服して薔薇の花を飾りたる伯林製の帽を戴き擬製の葡萄酒の鈴飾に淺洲金の環を穿ち左の無名指右の中指にダイヤモンドを彫めたる獨逸美鏤の指環を嵌めし其の服裝の美しきに風致の婀娜たる芙蓉に似たり玉頸拭ふが如くにて形は卵の體を備へ雙眼瑠璃を彫めしに似て蛾眉半輪の月の如し朱唇最も嬌態深く白鼻甚だ愛すべし頗温かに髪厚く久しく人の中に在りて聊か上氣したると思しく眼下の淡紅色良や濃きは却つて愛嬌するに堪へん伶俐の才は兩眼の間の狭きに顯はれたるが人相學士に見せしめば是れ薄命の相なりと判斷するやも計り難し全體よりして評する時は窈窕の語を用ゐんより寧ろ嫵媚なる方なり孰れの令嬢か知らねども品格特に高くして自然

に威儀を供へたるが今此の書生の憩ひたる側の榻に依りひたるは負抱の才の對不對を好く措て外形より虚心に之れを観る時は白哲人の側に亞非利加人の侍するが如く不權衡にぞ見られる

淑女は書生の風體を仔細に諦視し側らなる書物の記名に目を留めて無聊を消さん詞敵になさまく欲き色ありしが書生の片手に紙巻煙草を持たるまゝにて喫みなさぬは全くマツチを失念して溺を覺ゆるものなるべしと敏くも推して懷中より專賣特許附の蠟のマツチを出して微笑を帯ながら

(豊) 貴下、甚だ失禮ですがお煙草を召上るならマツチを御用立ませうか(卓) 夫れは何より難有うございます實はマツチを失念したので困却を極めて居ましたが生憎外に人もなく火を借る譯にも往きませんから其處等まで往て求めて参らうかと存じて居た處でしたが早速是れは難有うございます何も甚だ失禮(豊) 眞個にお煙草を喫あがる方が火のない程お困なさる事は有ませんッてネエ、アノー、エ、つかない事を伺ひますが貴下は何方の學校へ入ッしやるンでございますか(卓) ナアニ私共は修業なんッて中々専門には出来ませんが

田舎に居ちやア見聞も狭し大家の高説を聴くことも出来ませんから何か東京へ参つた上縦合何をしてなりと一修業致したいと出京は致したものの御存じの通り此節は一體地方が疲弊して納租の爲めに勞働してると言たやうな慘狀ですから：何も致し方がございません(豊) サウ仰しやつたものでも有ません天は自ら助る者を助けるとスマイルスの格言もございますから志ざし一で何でも成業致ませう(卓) 根據さへ確かなればナニ少々困難があつても打勝て参りますが生活といふ困難に打勝ては實に何も方が付ませんテ(豊) 貴下は爾仰しやいます但獨逸邊でも依然富有な人の子が學者になつて貧賤の者の子が愚になる云ふ定則は有ませんヨ、モルトケ公でもビスマルク公でも最初から榮爵を持って出といふ譯でもございせんから(卓) ヘエ夫ぢやア貴女は獨逸へ御洋行になりましたか(豊) 洋行といふ程では有ませんが父が彼方へ参つた時伴て行て貰ひまして三年ばかり留學を致しましたノ(卓) 夫は何もお羨ましい私も何か英國邊へ留學といふ程な事しくつても一體の慣例から政治上の運動を實際に見て参つたらと心がけて居りますが不幸にも伴て

行て呉れる人もありません、獨逸は如何でございますナ學術の泉源と云れる國ですから見たばかりでも随分利益が多うございませう(豊) 妾どもは學校にばかり居りまして美術の事にかゝつて居りましたから一體の事は存じませんが何でも父などの申しますのには政治といひ法律といひ陸海軍制定といひ日本には適切な美風があるから日本人の政治家は是非とも獨逸へ往なくつては政治家の眞價が出ないと筒様に申して居りましたが、斯申しては何ですけれど、妾などの思ひますにも帝王が主權を握つて萬機御親裁をなさるのには至尊の御勤めといふもので御國の臣民も德に懷き忠誠の心が起つて自然と上下の間が親しみ宜い鹽梅に國內が無事靜謐に成りませうト說出すを聽居たる書生は少しく冷笑して(卓) 上流社會にやア獨逸風が専ら流行すると聞きましたが成程夫に違ひはない至聖の者として威儀尊榮を有つには揮て政治の責任を宰相に委せるのが第一でせう、私輩は純粹の議院政治を望む者ですから立君獨裁のお話しは承まはらずとも事ですサ今の獨逸は維廉老帝の大偉勳とビスマルク公の戦功とで聯邦を成立したから是非なく民權を縮



(津押本原)

めて居ますが今に御覽なさい二豪傑が斃れた
日にやア今の儘で永く國是を立する事は出来ま
せんぞ、マア貴女のお心では誰がビスマルク
でございませう、ビスマルクが斃れると後に
ビスマルクの出来ない時は忽ち國體が變るやう
では何と困つた話してせう、グラッドスト
ンが斃れてもソールズブリーが退いても國と
政治の動かないのは何と英の名物では有りま
すまいか

ト語氣や、鋭く説破るに淑女も聊か怒りを含
みて論駁せんず氣色なりしが何思ひけん微笑し
て親しく握手の禮を施し元來し方へ立歸る此時
までも木蔭に居て兩人の談話を聽居たる山田文
治といへる紳士の突然書生が肩を敲き

(文)君、愉快だツタヨ、最つとヤツつけりや
ア宜かつたのに(卓)貴下は(文)吾輩が吾輩は
山田文治といつて競馬道樂の一人サ(卓)ア、
爾でしたか夫人なら先刻第四競馬に綠野と
いふ馬に乗て婦人財囊を得られました(文)如
何も如何も、而も今のレデーが選與たのだが
實の處は那のレデーの宅の都といふ馬に遣り
たかつたのを吾輩が勝たからクサ／＼して此
處等へ散歩と氣を替たのだらう(卓)へ、エ爾
でしたか

ト猶も懇話に遷らんとする時競馬の終りしか此
の林蔭まで雜沓して遂に后日を心に約し我が指
す方へ別れ去たり

第一回 螢火の窓

早天續きの三伏に驟雨欲しき庭園には残る方な
くうち水して松栢色や、着みを加へ雪も止め
ず炎陽に我れから萎靡し雜草も自然に苗を起せ
ども戦りともせぬ乾蒸に團扇遣ひもいと猶

懶き盛夏の夕涼親は相見兒は裸體にて二合半
酒に著を攘ひ夕顔棚の下風に半夜を守る者あれ
ば侍婢千人に冊かれ團扇車に風を招ひ水の
屏風雪簾明るを蚤しと恨むあり貧富賢愚の差
多き同じ國內の民艸の榮枯盛衰定めなく赤土を
賦ひ豊饒なる都に集まる千萬の人種々のたゞ
すまひ其の中坂に程近き廻町區飯田町二丁目
に住み官民の間に身を處き代言士を職業とす
る學士あり以前は法科大学にて研究琢磨の業を
遂げ法學士たる學位をも身に戴きて大學院の學
生とまでなりたるが猶吾が心に満足せざるか餘
財を抛ち寶器を沽り海外萬里の波濤を越え大
英國に留學しつ三年にして業を卒へ英國狀師
(バリストル、アト、ロー)の榮位を得て白毛錦
褒賞牌を胸に光らせ獨佛より北亞米利加の法
廷に己れが伎倆を顯はしつゝ輒近漸く歸朝せし
中島博智といふ人なり固より富る身ならねども
亦貧しきといふにもあらず父母は駿州靜岡の故
園に遺せし山水の朝夕親しむ友を慕ひて疾くよ
り都を遠かり我が兒の榮えを灰にも聞て餘生を
樂しめば家には阿今と名を稱びて二九の盛りの
花よりもいや麗はしき妹のみ博智既に三十を遠
くも距らぬ齡なれども未だ僮僮を結びもせで家
には書生を養ふのみ奴婢さへ僅かに二人を雇ひ

吝かならず華奢ならず其の中席を尙ぶは了得に氣高き心なり然とはとても野俗の者ならず都雅の心は自から家屋の構造庭園の形容にても明かなるべし訴訟の事務を専務とする書生二人の其の外に客歳より此に食客して學びの窓に螢雪の勉強を積む書生あり新潟縣下越後國刈羽郡三俣村の農夫にて越山卓一といふ者なるが李密の學び深くして先の年より政治學を攻究せん爲め出京したれど洗ふが如き貧家の子弟學資とすべき餘財なければ或ひは商家に奉公し或ひは牛馬に身を落して車を路頭に轉きなどしつ専ら餘暇を偷みては書物に眼を晒し居つるを圖らず中島博智に值遇してより養はれて衣服を惠まれ書物を興へ家事の暇に勤學を全猶意らざりけるなり今宵も外の兩人は訴訟用にて他出せし孤燈に對して卓一は獨り此頃舶來せしスベンスターの新説を餘念もあらで讀居る處へ隔の硝子戸忽然と開き麥藁帽子に花色の甲斐絹の帶をさせたる前に「大學」といふ徽章を附し緋入羅紗の背廣を着て左に少し古びたるハンカチーフを握みながら右手に帽子を尙上て腮もて禮を施しつゝ、

(考)越山君、君早く歸省し給へ、遅々して居るとモウためだぜ(卓)ハ、ハ、ハ、齋藤君の粗々

ツかしいのにも困りもんだ、君ア何日歸京したノ(考)オ、未だ逢なかつたつけネエ、さうださうだ今日歸つたヨ、ウム三時の汽車で先刻上野へ着たから下宿へ寄て直ぐに君の處へ知らせに來たのだ(卓)ア、那だものヲ困つた人物サネエ(考)君のやうに養落付に落付て居ちやア石の上の住居は出來ねえヤ、何でもないいから主人に暇を貰つて歸り給へ、大變だヨ、言憚けりやア僕が言て遣うか(卓)馬鹿、戸棚を開けて何をするんだ(考)ホイ仕舞た、眼鏡を忘れて來から飛だ戸迷ひをした、君、案内して呉給へヨ(卓)何處へ(考)何處へちやアねえ主人公の居間へヨ(卓)君は氣が違つてゐるナ、マア少し落付て詳しい話しをして呉れ給へ、國は何な鹽梅だよ相變らず苦しんで居るだらう、些とは景氣が直つた様子かト類りに故郷の景況を問かけられるに齋藤孝は粗忽無類の者なれど致つて心の正直にて感情最も深き性にて茲に至つて何事かを思ひ出してや兩眼に涙を浮て差俯しが元來孝は柏崎の船積問屋の長男にて有徳に育ちし者なれど幼稚頃より學問を好みて父母に東京へ遊學したしと請けるが孝は性質柔和にして身體最も虛弱なれば優形にして色白く女にしても見まほ

しき美男子なるゆゑ父母の寵愛とても餘の子に勝れ荒き風にも當ずして固より物に事缺ぬ富豪の家の事なれば心の儘に育てしより遠き旅路に出し送り艱苦をさするが慰らしきに事に託して許さざりしを孝は殊にもどしく我が小造として貰ひたる貯金の聊かあるを旅費となして一封の書を止めし、出京したる其の熱心に兩親も初めて心を顧みされ父が自ら上京して學資を興へ大學へ遂に入校したりしなるが素より知らぬ卓一なれど同縣人が窮途を見るに忍びず幾度も學資を頒つて恵みしより無二の知友となりけるなり

斯く實直の者なれど唯一癖ともいふべきは至つて精神急しく人に勝れし疎忽な性質故往々事を仕損じては後悔する事多けれども然ればとて輕躁浮薄の心は更にあるものならねば聲中休暇に歸省の折にも自ら家苞を購求めて三俣村なる越山が家に到りて卓一の無事に勤學する由を詳さに傳へて卓一より依頼されたるものの如く

に彼の品物を贈りなどしつ歸京の途にも故さらに三俣村へ立越して傳言すべき事を聞き總て越山卓一が有爲の才を懷きながら素志を伸るの機あらぬを哀心よりして愛憐し崇信の意を表するより諸事信實に關旋せるなり登下孝はハンカ

チーフに汗と涙を俱に拭ひて

(孝)越山君、君は未だ知らなからうが、斯う言ては失敬だけれど君の一家は非常な……

(卓)非常なア何んな事でだ(孝)實に君が喫驚するだらうと思つて僕は君の心中を察するヨ、マア聞給へ、君の處の親父は拘引されたヨ、サア夫だから君の心中を察するのサ、マア驚かないで聞給へ、夫んな事ア知らないから例のそくきで飛び込んで見ると驚いたネ

エ、母親は大病で寐てるシ妹君は枕上でメソメソ泣てるだらう、ハテナ此間まで壯健であつた作左衛門(卓一の父の名)さんが何して急に死なれたらう京阪地方や神戸の方にヤア虎列刺病が流行といふから若しや……、だから驚いたのも無理はなからう能く聞て見りやアお氣の毒な嚇しサ(卓)眞個かエ君、欺ぐと承知をしないヨ(孝)馬鹿な事を言ひ給ふな何で僕が君を欺ぐものか、人面白くもない君は僕の心中を知らないか今まで君に計りやア内密の事をさへ打明て云ちやアないか(卓)夫んなに怒ッちやア困るよ、餘まり意外の談話だから夫れでア、言たのだから悪く思つて呉れては困るヨ、エ、君、君は定めて其の仔細を妹に聞たらうネ(孝)ウム聞たヨ、全

く賊の嫌疑ださうだ(卓)親父が賊だとエ、何で夫んな嫌疑が係つたのだらう實に不思議だ實に不思議だ(孝)夫が實に不思議な話しさ、僕も判然分らないが何でも租税の事から公賣處分にも成る處を何處で計算して來たのか作左衛門さんが幾干かの金を上納したさうだが、此が記憶して置く處だヨ、丁度其の時に戸長役場の金が幾干だか紛失したさうだ、ネ、機會が悪かつたものだから何でも……、といふ譯で、ソラ、馬鹿な話しちやアないか(卓)ヘエ

トばかりに答へもなく腕拭きて尋思に呉れ目を閉ち眉を非常に擧めて頻りに吐息を吐居たるが十分間程經過して俄然眼を睜きつ、瞳を膝の上に注ぎ

(卓)齋藤君、能く聞て來て下すツた、書信一つない處から僕は些とも知らず居た、宜しい明日の一番汽車で直に僕は歸省するヨ、君も知つてる通り僕の親父は極正直だから決して夫んな事をする氣遣はない、併し家の先生にも相談して是非とも無罪になるやうない考案を付けて貰はう、君の信義は忘れな

い(孝)夫んなに禮を言ふにヤア及ばない。失敬だが金は(卓)先生に愁訴するより外手段な

しサ(孝)さうく主人の世話にも成れまいから僕が餓別をしよう、ツー、パウンドでは足ないか(卓)拾圓か、夫んなに旅費が入るものかソシテ君に夫れを借りては(孝)馬鹿律儀を言給ふな、是を其方へ納め給へ(卓)實に何とも……、ト少しく涙譯になる(孝)左様なら、明日は一番汽車だネ、上野で逢ふヨ、ア、痛い(卓)何したエ(孝)ナアニ頭が柱と鉢合せをしたのサ、痛エ(卓)氣を付けて往き給へ、ア、また夾襖を忘れて行た、實に疎忽かしい男だ、併し年は往ないが斯んな親切な朋友もないものサ

ト獨り言つゝ齋藤より送り呉れたる拾圓の紙幣を袂へ押入れて孝が忘れし夾襖を手早く革盤の中へ納め浴衣の前を抵合せてランブを少し引込せ縁側傳ひに主人の居間へ到りて見れば博智は妹お今と睦まじく基盤を中にさし對ひ圍居遣ひも他所にして

(博)ソレお今さま當りだよ(今)オヤくお兄いさん、アレいけませんヨ(博)夫れぢやア一手待う、此方のわたりを先におしな(今)鳥渡待て下さいましヨ誰か來たやうでございますから、オヤ誰かお客様かと思つたヨ何か御用ですか、お兄いさま越山さんが(博)オ、越

く賊の嫌疑ださうだ(卓)親父が賊だとエ、何で夫んな嫌疑が係つたのだらう實に不思議だ實に不思議だ(孝)夫が實に不思議な話しさ、僕も判然分らないが何でも租税の事から公賣處分にも成る處を何處で計算して來たのか作左衛門さんが幾干かの金を上納したさうだが、此が記憶して置く處だヨ、丁度其の時に戸長役場の金が幾干だか紛失したさうだ、ネ、機會が悪かつたものだから何でも……、といふ譯で、ソラ、馬鹿な話しちやアないか(卓)ヘエ

山、マア此方へお出で、大層色が悪いが何かしたのかエ時候が悪いから食物に注意せんで成ませんぞ、將來に望のある身は身體の健康を第一に保存しなくツてはいかん、何か内用でもあるのかエ(卓)「エ少々伺ひたい事がございまして(今 妾はお茶を入れて参ませう(卓)「イ、エ、内用ではございません、先生、御眼を願たうございまして(博)眼を呉るツて、雇ひ入れの契約をした者ではなし何も改めて眼を取るの遺るのといふ理窟はない、夫りやア外へ往きたけりやア強て私が干渉する權もなければ君の自由に任せようが信義上から考へると君の方向とか行先とかの善惡に由つては随分止めないとも言れんサ、何か君、口論のでもしたのではないか、腹藏のない處を言て御覽(卓)「ナニ口論などを致した譯ではございませぬ實は至急に歸國をしなくツては濟ない事が出来まして(博)何だツて、歸國をせんでは……、夫りやア何いふ仔細で(卓)「エ、唯今大學に居ります朋友が歸省をしたと申し訪ねて呉れましたのに漠とした話談ではございましてが父が官(金竊取の嫌疑だとやらで拘引をされましたさうでございまして、母も大病で危篤な容子旁々妹一人に家事を任して

置といふ次第にも参りませんから先生には一方ならぬ御高恩を受まして、朝夕御教育も受ましたのに突然お眼を願つて歸國致しますのは如何も遺憾に思ひますれど右の譯ゆゑ惡からず御承引を願ます(博)夫れは飛んだ事だ、定めて御心配だらう、マア兎も角も至急御歸郷が第一だが併し一寸といふ譯にも往くまい、エ、ッ阿今さん彼方の支那革盤を持て來てお呉れナ(今)ハアト阿今の起て行く後に中島博智は仔細に越山卓一の面色動靜情々と打守りて居たりしが膝立直して聲を低め(博)越山、君は東京で得た知識を東京で活用しようといふ精神が夫れとも地方へ輸出して權衡を得ようといふ精神か(卓)未だ中々運用する丈の知識を得ませんうちに斯いふ事が出来まして實に不幸の限りでございまして(博)「ナニサ、得る得ないに構はず全體の精神はサ(卓)目的などと申しては生意氣な言分ですが一體私は都會にばかり學者を集めるのが専制の一原因と信じて居ります(博)ナル程、さういふ君の精神なら及ばずながら向後とも私が御世話をしようから一旦の失敗に挫折せず一層勉強をするがいゝ、必ず屈しち

やアいけませんぞ、ソシテ何日發足のお積りだエ(卓)「エ一時間、を爭ふ事ですから明朝の一番汽車にて(博)確米はまだ鐵道が通るまいから一日はむづかしからう(卓)「イ、エナニ北越鐵道の間にさへ合ますれば何にか角にか一日に参れませうトいふ阿今は支那革盤を下女と二人で持來り(今)お兄いさんは是でございませうネ(博)「ア、夫だ、鐘がついてるなら開てお呉れナ(今)ハア、オヤマア大層な埃だ事(博)越山、甚だ失敬だが少々旅装を遣ぜよう、イヤ辭退は廢すべしだ私は君を憐れんで遣ぜようといふのではない君と密着の關係がある才識に健闘するのサ、是れは米國の友人から送つて來た社會學の高尚な書だから持て行て讀むがいゝ、今まで御用立た書物も衣服も最初から上げる積りであつたから悉皆持て行くがいゝヨ、若し法律上の問題があつたら利益になるやうな考案を付けようから遠慮なしに問合すとし給へ、今夜は一酌くむ筈だけれど君の精神を察するから離杯はモウ廢にしよう、氣が急くだらうから遠慮しないで早く荷造をおし(卓)「一方ならぬ御厚情に預りました上また過分な頂戴ものを……難有うございまして、左

やうなら先生、御嬢さん何も永々御厄介になりましたエー、何れ後程お暇ひに参りますが誠に何も種々と難有うございますト別れ惜氣に兩人は幾回となく挨拶なし恵みの金と書物とを押戴きつ縁側傳ひ小腰に子房へ立歸れど未だ二人の者は歸らず此間にこそと成業を蓄つて鄉關を出し折笈とも見てし古行裏開くも力なげなき世をしかすがに假數つゝ三人が恵みに寒を攪り暑を避たりし洋服と和服の種々盡み換へ收めし上に我が身には千萬金にも換難き書物を列べて荷造も央了りし其の處へ廊下に人の聲音して障子を開き入り来るは餘人にあらぬ阿今なり卓一急き席を拂ひてランプを少しく明るくして

(卓一取散かしましてマア此んな、不潔處へ、少し片付ませう(今ナニ大れにヤア及びませんヨ、アノ一越山さん、貴下は愈々明朝お發足なさいますノ、誠に飛だ御心配が出来ましたッてネエ嘸マアお心懸りで入ッしやいませうと存じましてお留申す譯にも参りませず、眞個にお名残惜うございますヨ(卓一お世話にはッかり成りまして些ともお役に立ないうちに此んな出来事が、先生へ何ぞ宜しう(今兄も左様に申して居りましたヨ何ぞ早

く御心配な事が落着いて直ぐ御出京になればいゝツて、越山さん、妾も何かお餞別を上げたいと存じましたがネ御邪魔になる物を上ましてもと思ひましてアノ一誠にお恥しい物ですが是は此次の慈善會に出しませうと思つて拵へました手製の下着ですが醜うはございますけれどお持なすつて下さいナ、夫から此半襟と簪兒はホまだ一遍も用ゐませんのですから御妹子さんの上で下さいまし眞個に碌なンぢやア有ませんヨト心を籠し贈り物置いて別れを惜みつゝ阿今は奥へ入りけるが思ひの外に卓一は幾多の物を恵まれて最いと厚意をうち悦び其の翌る朝第六時の上野發車にうち乗て越路の家にぞ急ぎ去りぬ

第二回 檻樓の錦

根底の張らざる樹木は必らず枝葉の繁茂することなし農は國の根底なり農富ざれば國を富さんとすも得べからず枝葉のみ徒らに繁茂せしめんとして其の根に培はざる豪駭師は裝飾に意を用ゐて柱礎の崩るゝを顧慮ざる建築師と一般なるべし國の富源と仰がれたる農家の果して富めるや否や細かに眼を止めて觀察れば金を鏤す

炎天に面を炙かれて一介の目を覆ふべきものもなき田畑に鋤を弄そび粒々辛苦に屈せず撓ゆまざ星を戴いて家を出で月を歩んで家に入る長の終日勞働して室に入れども湯を嚥するに醇酒佳釀のあるにあらず飢を凌ぐに滋味香樂のあるにもあらで唯僅かに盞茶を啜り麥を咬み綾羅錦繡は目にだも觸れず手縫の木綿を幾十回洗ひ洒して絳針の及ぶ限りは縫綴り糸のみ強き荒布を纏ひて月渡る格に夜を眠る大れすら近年うち絶て今は草根木實を食み或は蓬を土に和し少しの米を搗交て一家の口を肥すまで約やかに日を送れど調租の代にも足らずして田畑を失ひ家に離れ餓學は路に横はり妻子は溝壑に轉ずるてふ惨況名狀すべからず餓に泣く子の聲を聞く母は餘生の徒らに悲ぬを感むの外はなく潮に堪かね呻吟する良人の狀を見る妻は血を搾りても與へたかるべし良田沃野はなきにあらず五風十雨の順を得て豊登の秋のなきにあねど細民のみぞ多かりける此の憐れむべき細民の中に其の身を算へられたる彼の越山卓一は多年研究の學才を空しく瘠土の下に埋め三俣村の伏家に在りて未耜を把る手の間もなく朝な夕なに粗親しき書物に疎く離れつゝ憂を愛しとも思はずして田畑に月を送り行く果敢なき人の身の上を憐れ



(雲師本原)

む者^{もの}はありながら是れさへ奔走^{ほんそう}勞働^{らうどう}して衣食^{いしょく}するより外^{ほか}あらねば唯^{ただ}其^{その}の心^{こころ}を通^{とほ}はすのみまた詮^{せん}術^{じゆつ}もあらざりけり頃^{ころ}及^{およ}夏^{なつ}も盛りなる八月^{はつげつ}下^{した}洗^{せん}の事^{こと}になん越^こ路^ろは苗^{なへ}の生^は長^{なが}も他^た國^{こく}に比^ひすれば較^{かく}や晚^{おそ}く何^{なん}方^{ほう}にても二^{ふた}番^{ばん}草^{くさ}とる手^ても勞^{ろう}るゝ停^と午^ご過^か小^{せう}書^{しよ}といひて小^{せう}歌^かの^の間^まを偷^{ぬす}む書^{しよ}見^みの眼^めたどり勞^{ろう}れぬ勉^{めん}勵^{りき}は賤^{せん}心^{しん}なき田^{でん}舎^{しゃ}人^{にん}の身^みにも感^{かん}を起^{おこ}しけん鐵^{てつ}を杖^{つゑ}き兩^{りやう}三^{さん}人^{にん}

(甲)アレ見^みさッせえ越^こ山^{さん}の若^わいのは何^{なん}とも魂^{たま}

消^{しょう}た書^{しよ}物^{ぶつ}好^{こう}きぢやアねえか、己^{おの}が處^{ところ}の餓^が鬼^きな
んざア學^{がく}校^{こう}へ上^あげるといつたら聞^{きこ}ッせえマア
斯^かだ、エ、學^{がく}校^{こう}なんぞへ上^ある位^{くらい}なら泥^{どろ}棒^{ぼう}して
懲^{ちやう}役^{やく}にいッた方^{かた}が増^ふしだッて何^{なん}とマア呆^{あは}れ
て口^{くち}も听^きれやしねえ、卓^{たく}一^{いつ}さん^{さん}の爪^{つめ}でも煎^{せん}じ
て飲^のしてえわサ(乙)お前^{まへ}の言^{こと}ッしやる通^{とお}りだ
此^{この}ん人^{ひと}を戸^こ長^{ちやう}さん^{さん}にしたら何^{なん}なにか下^{した}が樂^{がく}
をするだらうによ、考^{かんが}へて見^みりやア卓^{たく}一^{いつ}さん
も誠^{まこと}に薄^{うす}命^{めい}な人^{ひと}ぢやアねえか折^ひ角^{かく}東^{とう}京^{きやう}へ行^い
て學^{がく}問^{もん}をしてごさッしやッたのに作^{さく}左^さ衛^ゑ門^{もん}ど
んが那^{なん}した譯^{わけ}になんなすッたもんだから直^{ちやう}と
歸^{かへ}つて來^きなすッても親^{おや}父^ふさん^{さん}には遭^あれな^いシ
老^{らう}母^ぼどん^{どん}は大病^{だいびやう}だし齋^{さい}祭^{さい}へ行^いたり戸^こ長^{ちやう}役^{やく}場^ば
へ行^いたり苦^く勞^{らう}ばかりさッしやる中^{なかに}に東^{とう}京^{きやう}から
持^もて歸^{かへ}らッしやッたお金^{かね}も皆^{みな}イ^ンな費^ひつて仕^し
舞^{まい}まだ足^{たり}ねえッて衣^い服^{ふく}を賣^うり、イ^ヤハヤ可^か哀^{あい}
さうに何^{なん}も彼^{かれ}も手^てッばらひで今^{いま}ぢやア人^{ひと}に追^お
使^{つか}はれ我^{われ}田^{でん}の事^{こと}も手^て一つに遣^やてごさる彼^{かれ}の子^こ
の了^{りやう}簡^{かん}が己^{おの}らア不^ふ憐^{れん}でならねえヨ(甲)然^{しか}だ然^{ぜん}
だ、高^{たか}い聲^{こゑ}ぢやア言^いれん事^{こと}だが作^{さく}左^さ衛^ゑ門^{もん}どん
の一件^{いっけん}も何^{なん}だが人^{ひと}の噂^{うさ}ぢやア戸^こ長^{ちやう}野^の郎^{らう}の弟^{てい}
どのが遣^や付^{つけ}たのを隠^{かく}さう爲^{ため}めに附^つ會^{かい}けたんだ
といふ事^{こと}だが日^{にっ}頃^{ころ}正^{せい}直^{ちやう}な作^{さく}左^さ衛^ゑ門^{もん}どんに疊^{かさね}
り霞^{かすみ}みのねえ事^{こと}ア己^{おの}ア達^{たち}も知^してるけれど證^{しやう}據^こ

がねえのは一番^{いちばん}困^{こま}る(乙)人^{ひと}事^{こと}よりやア自^じ分^{ぶん}の
上^うだドレ早^{はや}く遣^や付^{つけ}べいか
ト四方^{しやうほう}構^{かま}はぬ高^{たか}嘲^{ちょう}し人^{ひと}の善^{ぜん}惡^{あく}事^{こと}言^{こと}葉^えで我^{われ}が指^さす
方^{かた}へ往^いく後^{あと}に本^{ほん}讀^{よみ}さして卓^{たく}一^{いつ}は逢^あ頭^{あたま}飯^{いひ}餐^{さん}厨^{ちやう}に垂^た
れ顔^{かお}垢^{あか}づきて青^{あお}黒^{くろ}く兩^{りやう}眼^{がん}凹^{くぼ}みて瞳^{ひとま}鋭^{えい}く肉^{にく}落^{おち}た
るや煩^{わづ}骨^{こつ}現^{げん}はれ凄^{せう}然^{ぜん}とせる眼^{がん}を閉^ふて嘆^{なげ}息^{そく}する事^{こと}
良^よや久^{ひさ}しく問^とふ人^{ひと}なれば一^{ひと}語^ごだも發^はしもなさ
で急^{いそ}がはしく書^{しよ}物^{ぶつ}を収^{おさ}め鐵^{てつ}を携^もへ元^{もと}の蒼^{そう}田^{でん}に
飛^と入^いりつゝ昨^{きのう}の破^{やぶ}損^{そん}を繕^{つくろ}ひて稻^いの^の間^まを掻^か分け
ては草^{くさ}を攘^{はら}へる太^ふ股^こに田^{でん}蛙^わの吸^す着^{ちゃく}き然^{しか}でだに蔬^そ
食^{しょく}に瘦^{すく}する血^ちを奪^うふは憎^{にく}みでも亦^{また}餘^{あま}りあり時^{とき}も
五^ご時^じにや近^きづきけん日^{にっ}脚^{かく}の低^ひる頃^{ころ}まで^{まで}に全^{ぜん}く仕^し
事^{こと}の終^はりしか手^て遅^{おそ}く末^{まつ}稻^いを取^と収^{おさ}めて擔^かも傾^{かた}く我^{われ}
が家^{いえ}に歸^{かへ}るを背^せ戸^こに洗^{せん}濯^{たく}せし妹^い阿^あ雪^{せつ}は目^め敏^みく
見て
(甲)兄^{あに}さんお歸^{かへ}りなさいまし、今^{いま}朝^{あさ}貴^{あなた}兄^{あに}がお出^で
ましなすッた後^{あと}では母^{はは}上^{さん}さんも大^{だい}層^{そう}御^ご氣^き分^{ぶん}が
いゝッてお藥^{くすり}も澤^{たくさん}山^{さん}上^ありましたシ、そしてア
ノ一^{いっ}米^{まい}のお粥^{がゆ}が上^ありた^いと仰^{おほし}しやいましたか
らお隣^{とな}の叔^{しやく}父^ふさん^{さん}に頼^{たの}ひつて御^ご無^む心^{しん}した上^う
掲^かへて上^あましたらネ珍^{めづ}しく二^{ふた}杯^{はい}召^め上^ありました
ヨ
ト常^{とこ}に變^{かは}らぬ愛^{あい}々^々しき妹^いが顔^{かお}を見るにつけ大^{だい}志^し
を懷^{いだ}く卓^{たく}一^{いつ}も斯^かる貧^{ひん}窶^{くわ}を愛^{あい}しとせで最^{さい}老^{らう}實^{じつ}に立^た

働く心を酌みて心中に酸鼻めるを押包み鍼を下して汗を拭ひ

(惠爾か、夫れはマア宜い鹽梅だ其の分で漸々と御食氣が付いたならモウ近々に御全快なさるだらうヨ)是といふもお雪さん汝が能く朝晩の御藥から何かに能く氣を着けて御看病を申した效しだ汝も定めし看病の仕業があつて嬉しからうアノ、母さんはお日が覺てるか(雪)イ、エ今能く睡眠て入ツしやい升から(卓)夫ぢやア後でお日に懸らう、其處の着物を申しといてお呉れ私は納屋で一と仕事するから(雪)ハイ畏まりました

ト急しく起て母屋の方上る妹に納屋の方入る卓一に引違へて是も同じく野良歸り貧を知つても當むといふことを圖らぬ小作人御(煙管に銚銚を一荷に肩へあげ泥の門凸路を拾ひつゝ親類うちの甚太兵衛千屋口から莞爾と手ばなかわ手に煙管を持ち替へ上相に腰掛話し

(甚)お雪方いつも能く働くな、何だ母公は些たアいゝか己もチョコ／＼見舞うと思つて居ながらツイ貧乏暇なしで此の四五日はえらい無沙汰をしたツけなう(雪)オヤ／＼叔父さん入ツしやいまし久しくお出なさいませんから何なすつたかと存じましたヨ、マア此方へ

お懸なさいまし(甚)何だ阿母は寝てゐるか、オ、よし／＼起きねえ方が話がしよいサ、而して兄イはモウ歸ツたか(雪)ハア今納屋で仕事を居ますが鳥渡呼んで参りませうか(甚)ナニ／＼夫れにも及ばない兄イは大した學者といふから己のやうな土百姓は何だかドギマギして口が听憎いお前に話しをしとくから後で兄イに話して呉んな(雪)ハイ／＼畏まりました何だか知りませんが妄に言へる事なら(甚)ナアニ六かしい事ぢやアねえ斯いふ譯だヨ聞て呉んな、此方の家の作左衛門どんなウ、何した惡魔がさしたのだから聞ても慥とするやうな戸長役場の官金とやらを盗ましやツたとして嫌な事、巡査さんに警察署へ伴れ往れたのはツイ此間の事のやうだにモウ、エ、ツと、丁度今日で百日餘だが鳥の啼ねえ日はあつても作左衛門どんな何した事やら三度の食事はお賄ひで榮々と食べられても家に居るやうに自駄落ツ返して寐轉んでも居れまい嘸第屈な事だンベエと毎日々々案じて居たが今日鹽澤まで行た人が歸ツて己に話すには作左衛門どんな警察署から縛られて出て行くのを見たから何なつたのかと思つて聞て見たら御略罪科が極つたので長岡の支廳へ

送り成たのといふ事だがマア可哀さうに瘦衰へて見る目はなかつたと知らして呉れたヨ己の考えぢやア萬一すると貧に迫つた出来心で遣かした：イヤ／＼此な事は滅多に言へないが送りに成ると何するものだから何でも兄イに驚くりと話しをした上宜い分別を出して貰はなくツちやア成ぬわエ、ヨ／＼お雪功合點か、夫はさうと病人に斯な事を聞したら一倍病氣が重らうから必ず黙言て居る事だぞ(雪)エー／＼親父さんの事は何にも聞せはしませんヨ、叔父さん夫は眞個ですか(甚)何で諺を吐くものかヨ能く兄イに話して呉んな晩に聞に來ませう

トお雪が出せし狗姑茶の煮出し一と息グウと飲んで突抄さへも勿々に元來し路へ立歸る叔父が談話の安からぬに阿雪は獨り左思右考臂に尋思もくれの空吻とつき出す入相の鏡に驚き取散せし洗ひ布子や切々の戸張の布のおくび形曲り押し板敷を下て手早く取入るゝ納屋の裡には卓一が藁うつ杵を投棄て若む門田を眺めつゝ腦を痛むる感懷は轉熱度を加へ來けん思はず識らず口の裏

(卓)アー／＼考へりやア考へる程世の中の物事程思ひ通りに往かんものはない、エー日本

に新知識を輸入してから人心の變動は一方ならない事だつたが先づ維新の大業が何か斯か緒に就た時大久保が選都の議を上つたのは維新の大業を成就せしめようといふには京都の様に地勢が狭隘で別に一疆をなした處ちやア所詮天下の大權を握つて四方に號令する事が出来ないから大阪へ都を遷して御親裁の實を行はなくツちやア成ないといふ處から先づ東京を帝都と定めて百般の政令を出す中央都府としたのは當時に在ては誠に此上もない上乗の策で我も人も大久保の先見を賞賛した事であつたが荏苒知らずに中央集權の弊が出て來て政權は勿論智權も金權も皆な東京へ集つちまつて少し資本を持たり事業でも興さうといふ見識のある者は一人も地方に居ない事に成たが元々地方が幹で東京が花だから今の様に那なに榮えてるやうでも肝腎の幹が此んなに枯ツちまつては花も永くは榮える譯には往くまい

夫でなくツてさへ此の越後といふ處は貧富の懸隔が甚だしくツて恰好今の東京が榮えて各地方が疲弊していると云た様な形で何の村へ往ても一人づつは必ず富豪家がある代りにやア多數の人民は皆な酷い細民で粒々辛苦の膏血は一人の富豪家を富ます爲めに絞り出す始末とは何者へても敷はしい事だ、ウムー此んな背くと成長した米穀も前のうちから育上げて植付から肥うち一番艸から二番艸三番艸を仕舞た後も蟲を焼たり鳥を追たり夜の目も合さないうで登を待ちソラ秋の收穫と成た段が男女擧つて稻を刈るを穂を干すわヤレ初摺だソレ石造だと目の廻るやうに立働いて漸と苞に造つた揚句が皆な富豪の藏へ收めて偶々自分の物となつても租税の爲めに棄賣同様賣てしまへば一家の口へは一粒たりとも這入ないが夫れも或人の説の通り以前怠惰たり奢侈たりした酬いだといやア夫れまでの事だが、マア何も困るのは折角の富豪家どのが今の分で居て呉れりやア未だしもだけれど萬一とすると富豪家どのまで傾潰れと成た目にやア當路者は何するだらうか、夫丈にはならないまでも斯年々に貧富懸隔の度が甚だしく成ると細民が食ふに困つて一揆でも起しかねない氣象に成た處へ疎暴過激の徒が加はつて煽動でもされた日にやア社會黨を見たやうな事が起つてボーイ、コツチングと言たやうな事でも始まるか一步を進めばドンナ擾亂を起すかも知れない併しマサカに斯るイヤらしき事

をするまでもに至らず其内にはドウかなるだらうと思ふが死者狂ひといふ奴と此んな事を好機會として煽動する奴が折々あるから夫れが何より憂ふべき話しだ先年來から新潟新聞や日々新聞高田新聞などへ東京から來た先生達が筆を走らして論じたり舌を爛らして辯じたり種々に此の點に向つての高説もあつたから及ばずながら一身を犠牲に供して中央集權の弊害を破り地方自治の制度を立ようといふ決心をして東京へ出て見た處幸ひにも中島先生のやうな有志家に世話を受け又齋藤を見たやうに其の身富豪の家に生れながら貧富平境の説を懷いて分權制度に熱心な朋友を得たから必至に素志を遂たいと思つた精神の貫徹かないのみか、父は鐵窓の下に繫れ母は九死の中に在り素志を伸る處か恩賜の物まで食盡して今では腹を食ふに至る、嗚呼天道は是非か非かだ、噫

トばかりに清敷して國を懷ひ師を想ひ父母を思ひ友を念ひまた妹が上を憐れみ我が身を思ふ憂愁に幾多の感慨腔を衝き凄然として頭を擡げ睨視む眼に紅涙を泛べし慷慨悲憤せる情態は他の見る日も悲愴なり時に表に覺然と遽だしげに人音して納屋の戸口の繩簾半ば捲げて妹の

阿雪尋常ならぬ顔色しつ

(雪)兄さん、一寸、アノ一戸長さんがお出な
すツてネ(卓)戸長さんが来た、私に會たいと
言てか(雪)ハア今日は何でも會て談判をしな
くツて土間へ立踰つてサ(卓)母公さんは未
だお目は覺まいネ(雪)モウ先刻からスヤ〜
と(卓)止し〜

ト塵うち拂ひへはしも只一枚なる單物肌に纏
ひて帯引締め起上りしが何事か曾に支ふる事あ
りけん兩眼を閉ぢ眉を蹙めて憂時思想を凝せ
しち漸く母屋に入り來り挨拶なして座敷に上
るを宛も猜惡なる眼光にて睥睨したる此の戸
長は當村第一の富豪家にて名を森村剛藏といひ
本年四十二歳なり心事は未だ知るを得ざれど顔
方にして頭大きく頬骨失りて頬肉薄し鼻は隆
く眼は大に眼光最も鋭き方なり頭髮短く眉
毛薄く唇厚く口廣し色は赤き方にして丈昂く
肥太れり踵を眼の上部に止めて仔細に人を見
るの癖あり吐音調を略すに似て聲甚だ清からず
肩を時て胸を張て眠を時々勤すは病ある人
と見られたり總じて尊大なる方にて人を侮どる
風あるは歩行の姿に著るき
(卓)是は旦那お出なさいまし、此方が風が能く
通りますから(剛)イヤ〜衛倭長にはして

居られんコレ卓一貴様は東京へ行て學問を
して來たといふが生意氣な口ばかり听くのが
學者でもなからう、ヨコレ、地租を納める
のは國民たる者の義務だぞ其の義務を怠つて
も宜いものか、ア何だ未だ、夫ばかりぢや

アない家屋税は何時納めるのだ、貴様の様に
爾遅々して居ちやア役場の事務が上らんワ、
收税屬様の御廻りにならん中早く片を着たい
と思やア貴様の様な邪魔が出て困るぢやない
か、ウン、夫だから書記を催促に遣しても小理
窟を云といふから今日は已が出て來たのだ、
サア公賣處分を受ける氣か租税を立派に納める
か頑固(斷乎なり)とした返答を聞(卓)成
程地租も家屋税も納める積りでは(剛)コレコ
レ、では済さぬぞ夫だからいふのだ、
ばかりの地面家作を持て居ないで己の方へ賣
渡せば宜い様に支配をして遣うとサ、第一少
し位なものを分持にして居るから面倒が起る
のだから己が一手に持て村中總體に己の支配
道理に仕さへすれば些とも不都合が起るもの
ではない公賣處分が否なれば己に人權(全權)
を任せるとし、理窟も條理もあつたものか
ト漸次に募る高聲に阿雪は母の日な覺と案じ
に隔つ破扉風外には戸長が強談に卓一怒り心

頭に發する臂を鎮めても納まりかぬる必迫に唯
懺氣のみ膝に滿ち説破られぬ煩悶は如何苦しき
事なりけん觀人宜しく推測すべし

第三回 歌吹の臺

玉簾深く垂れて風徐ろに薫り瑤臺席清らかに
して涼自ら來る三層の石樓雲背に聳え無數の
樹亭水閣に望む食前方丈侍婢三千出る時は輕
車を駟り入る時は綾羅に臥す門外十步座を止
めず後園十畝花絶えず白雲赤石色鮮けく碧沙
若松相映じて一日富有の家とぞ知れぬる此處
なん麹町區上手三番町なる貴族眷用俊商が新
築なり近日樓閣庭園の新築全く落成したれば公
務の頻繁も足らざる寸暇を偷んで夜會を催し
知己朋友を招待せんとて數週前より京濱間の内
外人へ招待券を發送したりし其の數の夥多し
きにて此の貴族が名譽の門地に久しく在り最も
盛んに交際を結ぶ人とは知られたる該の筵會は
專らに歐米風を旨として招待券も夫人より多く
は發送せられしが中には令嬢麗子の名をもて
招かれたるもありけるに之既に夜會を行ふべ
き九月第三主曜日の午後五時頃となりければ
阡陌を走る車馬の轢り東道を求むる電機(電氣)の響き
轟々響々眠びて休憩所として設けたる溜座敷

の長椅子は全く空脚なまでに至れり招待せられし種類を見るに止ん事なき方様より内閣諸卿は秘書官を伴ひ陸海の諸將は傳令使を屬す顯官貴族外國公使及び御雇外人あり中に就て獨逸人は過半數を占めたる如く佛蘭西人と亞米利加人は交際官の其外には誠に稀に見受らるる京濱間なる紳士の種屬は保守主義を持つ學者著述家新聞記者と商人のみ主人が平素抱持せる政治の主義を知るに足りなん唯其の中に一人の自由家彼の中島博士は主人が獨逸に在し頃偶々知己となりけるより今日の筵に招待せられ妹阿今は貴女艶子と英學會の學友なり且は慈善會の會友にて交際のある中なれば共に招待せられしなり婦客は多く伴侶にして夫人の外は結婚なき紳士の假に誘ひ來し令嬢のみと見られたるが此方の席には春川の夫人と艶子が歡待して來會せられし厚意の程を深く悦び若未だ乾かぬ前夜に粗目の陰るを見定めて幾ヶ所となく設けたる珈琲の茶亭へ誘引し種々の球戯をなし杯しつ男女互みに打混じて最と陸ましく時刻を送れる快樂の中を關旋する艶子は頻りに紳士のうちなる年尙弱きを注目したれど用ある人を認め得ざるか阿今を招きて莞爾に手を握りつゝ四方を見送りて

(艶今日は能く入ツしやられましたネ、意々お招待申しまして未だ普請が漸と出来ましたばかりですから殺風景とやらで困りますワ今何も大層お美事な御普請でございますヨ鹿鳴館や何かは立派は立派ですけれども唯大い計りで間毎の粧飾が中々御邸のやうには参りませんヨ定めて御前が獨逸で御覽になつた建築で御在ませうネエ(艶ナニネ誠に面白い建築ですけれどもあのボクマンが懇意なものですから製圖をして戴いたのを其儘建させたので御在ますが何いふものか日本の建築は訝アしく成て巴黎や白蠟にある格イな商館程にも見られませんかネエ(今爾でございますかネエ兄なんぞは那なに永く歐羅巴や亞米利加へ参つて居まして種々な處を見て参りましたから妾の服などにも氣を着て呉ますが妾なんぞは築地や濱へ行て拜見するばかりですから斯な御立派な御邸を拜見しますると何なにか驚愕致しませうアノ、甚だ自由ケましい事ですが少し御邸の中を拜見させて下さいませんか(艶エー、御案内致しませうとも、眞個に未だ仕方が御在ませんヨ

ト艶子は阿今を誘うて芙蓉の花園を過行くに下萌茂の萩桔梗尾花に交る女郎花艶を問ひ婉を競へど有情の花に蹴辱れて集き初たる松蟲も聲恥かしき風情なり艶子が姿は既に説たり阿今が風采如何といふに斯く並行びたる處を見れば艶子の丈より低けれども肉附誠に相應しく鼻隆くして赤唇は常に笑ひを含める如し半輪の蛾眉柳絲の如く瑠璃色の王眼重輪ならず眼較や短かく頸細く肌膚は最も緻密にして純白の色照を持ち唯頭髮の濃からずして毛際少しく薄らかなるぞ瓊瑛の微瑕ともいふべき才氣の表に發せざるは幼少よりして嚴格なる教を受しと性質の沈靜なるに基くらん人に詞を交ふる時は微笑を帶て下を向き敢て他人の面を見ざるは奥床ししくて優かなり妙齡二八の春濃かにて艶子に比すれば初々しく交際場裏は賑しからねど人に依りなば月旦の先づ第一に置くべきか艶子は頻りに談話を挑みて花を手折蟲を追勤めて阿今の心を得んと種々にして慰さめつ智辯を振つて談笑するを阿今は常に微笑して一步を艶子に譲りつゝ僅かに詞敵となり樹亭泉水芝原など普ねく見巡り樓閣のうちに徐々歩みを運びぬ樓上樓下限もなく艶子の誘引する儘に阿今は室毎の結構美麗瑰麗眼眩むまで見物なして二階なる艶子の爲に設けある書齋に入りて軟か

き椅子に等しく腰うち掛け壁にある扇額の半身像を指さして

(麗)此の寫眞繪はネ、妾が獨逸に居りました時畫學の先生に願つて描て貰ひました。妾の師匠の一人でございますが一寸見ると日本人のやうですネ、此の方はネ永く英國の法學院とかへ留學をしてバリストルに成たお方でございますが未だ三十か其邊で羨ましい程名譽のある先生でございますサ。(今左様でございますかネ何しても彼方の人は立派でございますすネ)(麗)オヤマ貴女は歐羅巴人がお好で入ッしやいますか妾なんぞはオ、嫌な事、唯學問と智慧が慕はしいばかりですワ妾なんぞは日本人が依然宜しい○此の時阿今は眞面目に成て少しく形を正しつゝ(今アラ爾ちやアございませぬ貴女だツて爾ちやアございませぬか近い話しが文明の先進國丈に服裝から建築まで日本より立勝つて居るからこそ斯なに立派な御普請もなすツたし不蘭洋服を召して入ッしやるンでせう夫御覽なさい教育にしろ學問にしろ所詮日本は遠く及びませんぢやア御在ませぬかお政治向から交際法から法律でも兵制でも一から十まで皆んな西洋風を模すのでございすだらうネ、貴女、

妾が立派だと申したのを直に訝アしくお取違さなくツても貴女だツて其邊の事は妾なんぞよりは能く御存じで入ッしやるの……ト顔を赧めて俯向たる儘正面よりして説破るに艶子は意中の齟齬したれど怜悧の才に氣を轉じて故らに笑を粧ひつ

(麗)オホ、……、眞個にお今さんは正直で入ッしやるに申戯ですからお腹をお立たさくなくツても宜う御在ます、エ、貴女の仰しやる通り所詮未だ西洋人と一緒にやア申されませぬから猶更の事日本人の氣象を引立てるやうに妾輩もマア、ネ、旦那様の發明な人を撰んで文明國の女中方程には往なくツても切ては方に成合つて外を勵すやうな事に仕たへもんだと、存じて居りますのサ(今御免下さいましヨ、妾は誠に一徹なものですから人様に失禮を申し上て毎度兄に叱られますが自分でも愛想が盡ますワ、眞個に貴女の仰しやる通り慈善會だの舞踏會だのツて追々男の性質を知るやうな會が御在ますのに未だ干涉結婚とやら計りですから百年の苦樂他人に因るとか申す通りでございますネ(麗併し)貴女は何いふ方にマア其の、ナニサ百年の苦樂を仕せようと思し召す(今)妾で

すか何いふ人だツて夫な事は……(麗夫なにお隠しなさらなくツても宜しう御在ますヨ誰しも斯いふ人とか那いふ人とか思つてる事が御在まさアネ、ネお今さん、妾は法律家が一番男らしくツて面白からうと存じますヨ、アノ一先達て競馬のあつた時に精養軒の前でお目に懸りましたネ、那の時貴女はお兄様と御一緒に何處へ入ッしやいました(今)ア、ラ貴女でございますか、何だかお馬車の中で此とも分りませんもンですから誠に失禮を致しましたヨ(麗)ナアニ夫はお互ひ様ですヨ未だお兄様はお獨身で入ッしやいますか(今)嬢でも出来ますと妾も世話の仕て災人があつて宜うございすけれど少し洋學の出来る女でなくツては子の教育を任せの事が出来んからと申して(麗)エ何でございますテ夫ぢやア歐羅巴風の教育を受けた女が欲いと仰しやるの……眞個に嬉しい事ネ、エ

ト思ひ焦れし我が胸に會うて嬉しき笑ひ顔明て意中は語らねどかけて告げなん傳語機に知せに心も止らずして阿今を敬愛する念慮は此に倍々加はりつゝ肉身分たる姉妹より猶も親しく懐しき誠を袂に運ばしたく(麗)アノ一阿今さん、妾は大變に貴女を信

じて居ますが貴女に心が通じますか（今斯申しちやア上手を遣ふやうで何でございますか）と申します者は妙なもので御在まして貴女とお交際を申しましてから妾の様な至らない者を能く御親切に成つて下さいますので眞個に貴女を實の姉の様に存じまして常々父や母の處へも妾には女の姉妹がなくなつて心細く思つて居ましたに斯いふお方があつて誠に御深切になすつて下さると申して遣るので御在ますヨ夫だもンですから兄も常終春川の艶子さんは了得に洋行まで成つた程あつて感心だお前も能く見習へと申して居ますリ（艶）エー眞個に：夫なに煽動ちやア否でございますヨ夫なら是から姉妹の約束をして下さいナ宜しうございますか

ト語を變ふる其の内に無量の意味ぞ籠れるなるべし折しも遙かの舞踏室にて俄然ビヤナの聲起るに餘談を惜みて相携へ急ぎ階梯を降り行く時しも既に黄昏で無數の銀燭燦爛と鏤彫め飾る金光に映じて虚空に花を織り翠藍更に鮮たる苑には小坪の中央に一千有餘の燭光ある電機燈に千種を照させ雄麗壯觀また更に目を慰さむるに餘りあり三層樓の中心に故ら設けし舞踏場にはビヤナの調節面白く劉朗として澄波り男

女互ひに相携へ賓主交も打混じて手を把り足を踏揃へ諸君が御死の松に栖む。千年の友の田鶴の聲。泉水の淵に龜遊ぶ。今日の團樂ぞ樂しかる。續高かる人の身は。仰がるこそ愛たけれと唱歌に伴れて歩を運び環の端の限なく踊り旋れる其の中に艶子は意中にある人ともにも携へ躍らんと我が手を握る其の人には心も注らで一向に彼方へとのみ身を寄するに又も歌吹の節高く諸花に囀るも鳥の聲にも春の色見え。君に思ひをかけ橋の。渡り遂せる樂しさよ。續高かる人の身は。仰がるこそ愛たけれと聞く身は最切なくて寄らまくすれば生憎に中を隔の父が組み亂れては合ひ會てまた亂るに間遠さかり念ひ纏るゝかた絲のよりも着かれず徒らに燃るは照す花瓦斯の花なき君が心かな那方の玉手に依る人は如何なる果報のある人ぞ妬しきよと目を注て見れば中島博智は妹阿今を敵手に踊り戯れ折々に此方を見やる體なれば艶子の妬心も半去り半嬉しく悦ばしき舞踏の筵も音楽の聲俱に収まりければ是より更に樓上なる斐應室へ誘ひて山野河海の珍産佳穀に舌を鼓して厚意を謝し和英普佛の醇酒美饌に醺を買つゝ愉快を談じ再び舞踏を催すあり又は庭前數十の茶店に渴きを醫する

あり或ひは交友相集り烟を吹て笑語する中にも中島博智は此の日朝より法廷に立盡したる事なれば痛く疲勞を覺えし上銘酩の度を超過したるが主人の未だ放たざるより阿今も久しく相見ざる友垣輩と談笑して歸心の出ぬを促さんも了得に心なき業なりと交際場裏に熟練せる人の心は和かにて最と靜かなる樓上の一室を借受け長方形の椅子に身を凭せ休憩ひ居るを艶子は先の程よりして切ては握手を施して心ゆかせを爲さんずと頻りに中島博智の行方を索め居たるうち侍婢よりして博智の休憩しつゝ在ける由を告るに艶子は悦ばしく珈琲を製して持往きつ左の方に腰うち掛け

（艶）中島さん嘸御迷惑でございませう珈琲を一つ召上りませんか（博）イヤ御嬢さんでしたかお使ひ柄誠に恐れ入ります實に愉快な御盛會で存外頂戴しましたからツイ銘酩致しまして頻に渴を覺えた處へ何よりの珈琲〇ト飲干て舌鼓なし（博）ア、何もお蔭様で凌ぎます（艶）宜しくはモ一つ差上ませうか（博）イエモウ澤山です酒後は何でも飲物に限りまますナ、エ、貴女にはかけ違つて未だ緩々と拜顔を致しませんでしたが誠に妹が種々お世話に成まして、御存じの通り妹は那の通りな人



(書挿本原)

間ですから交際にも慣れませんが、貴女が御引立で何やら斯やら手離して交際の出来るやうに成ました（豊）夫なに仰しやいましては誠に恥かしいでございます。妾だつて何にも存じませんけれど皆さんに教はりまして貴個に何して何して阿今さんの様には行届きませんで困りますワ（博）御申戯を仰しやツちやア否ません貴女なんぞが大な事を仰しやツちやア日本のレディーで歐羅巴風の交際をする方は有

ません（豊）アラマア眞個にお口が悪うござい
ますヨ、アノ一巾烏さん（博）何です（豊）就ん
事を伺ひますが貴君は自由結婚が御好で御在
ますか（博）エーエー同より私は立派に自由結
婚の先覺者となる精神ですサ、何しても干渉
結婚では肉體の樂しみも十分に充る事が出来
ますまい肉體の樂しみは充るにしても無形上
の快樂といふものが薄く一體夫婦の情合も
冷かになり勝だらうと思はれます（豊）夫ぢや
ア歐羅巴風に御交際を願つたら遊歩や何かに
も一緒に……（博）私が申さなくつても御承知
でせうが元來男女の間といふものは男の方
から先方の父に交際の事を頼んで其の親父さ
んが那の者なら娘と交際をさせても大丈夫
だらうといふ所を見極めて一旦之れを許した
以上は最早好悪は娘に任せるといふ風ですか
ら此間に十分男女の好意も通じ互の心術も能
く分るから底で夫婦に成た後の情合も一層
深い譯ですテ、私も實は左様して終生の快
樂が買いたいと思ひます（豊）夫ぢやア若し阿今
さんと心の合た人が貴君に交際を頼みました
ら其通りになさいますの（博）無論（豊）夫から
アノ一妾見たやうな者でも貴君は御交際を
なすツて……（博）此方から願つても父君が

許されますまい（豊）イ、エ……
ト後は口籠りて紅顔色濃く耳熱く顔を背ける艶
子が風情素り才器と容色とを聞くにだに早や慕
はしく見まほしくとぞ思ひける艶子が心情最
と愛たく風致都雅なる夫のみか利發にして且學
才あり千年の友と身を爲して愛兒を之れに託す
るとも夫人の職位を貶すべき者にあらずと思
ひしかば惻惻に過ぎて多辯なる瑕瑜を發見す暇な
く一意に可憐の情起り親しく握手を施したる
を玻璃窓外にて俊裔が認めたりとは知らざりし
ならん

第四回 涙の洪水

人の上には不定の憂ひなきを免かれず天の數に
は不時の災ひなきを保たれざること世にある數
とやいふべけれ憂災併せ來せしは越山卓一が身
の上なり憐れむべし父は鐵窓に繋がれて無聲の
疆に呻吟し母は旦暮を測られざる病ひの蔭に煩
悶せり家に三日の糧を止めず身に贅錢の害へな
し兄妹無事に苦しみて餓死を殃より外ぞなき斧
の下なる枯木風の前なる燈火の效果なき言方
なきをも更に屈する色あらで兄卓一は専らに活
着の爲に奮々し妹阿雪は氣を細かに母が看護
を離職し樂しからざる世を過す伏家の廂雨洩

りて檻樓の袖に受兼ねるを老母は見もし聞もして我が子くが憂苦樂思へば増る難病に疾く死ねかしと思へども思ふに任せぬ命數の未だ生憎に盡ざるか苦惱は募れど死に難て九夏の空も風に過ぎ秋去り冬の初候となりぬ越路は雪の蚤くし時雨に交る玉霞胸も板屋に降しける十一月の頃なるべし都は今ぞ小春とて最とも長閑き折なるに昨日も今日も突して孰れの家も冬籠りの準備に油斷あらぬと越山のみは家居さへ抵當に入れ我が有にあらざる程に貧窮して戸長が切りに垂漚し借金にて買取らんと種々に計畫なし居たる田地も早晚恩借の金の代りに假渡しをなしては猶更作徳の我が手に残る物はなく片手に稼ぐ日儲とて力役者のみ多ければ需用者の數少くて貨錢其の額少なきのみか殆ど使用者なきに至れり此頃村の小學より教員にとて撰擧をなしたる者のありけれども何故なるか戸長より故障をなして事務はす然れども文化の進む度は或る障礙者の力を壓し水の石下を滑り出で發して江河となるが如く今將石下を右に滑り左に流るゝ時にあり寺院の庫裏を借用る少しく餘財のあるべき子弟が三人五人集會して英書を修學せんものと卓一を聘び夜を籠めて勸學するに卓一も阿らず些の金を得て母が藥餌の代

を補ひ三人が口を僅かにも糊する烟を値ひつ聲東なくも生たるのみ寒を凌がん衣とてもあり布を綴る破布子襦袢無慙の疆界はいつ服きんとも見えざりき一日新湯輕罪裁判長岡支廳の命達あり父作左衛門が請求に依り證人として出廷すべしと公判判事の召喚狀に取る物さへも取り敢ず病ふの母を妹に託して急ぎ發足したるが此日は朝より空雲り密雲更に解やらずで今にも雨雪を洩すべき情態なるに地氣暖かく急ぎて道を往く時は肌汗する程なりしに六里有餘も過たる折忽然突の降り來るに彌々熱して家々に積り初めたる薄雪の一時に解くるを見るよりも必定山の雪解て洪水あらん氣候なるべし春の雪解は洪水の難ある事の常なれど雪降り初る頃にして忽る天災當てあらねば若し告ずして止なんには母も妹も波浪に命を沈むる事なるべしと遽然に踵を旋らしつゝ息をも繼かず三俣へ降り着たる頃及は日もはや既に暮盡て四方小闇き夜なれども諸川の水の暴激して堤防崩れ田や畑へ洞々として浸入し見るゝ水の嵩を増し洪水氾濫たる慘狀恐しなれど思かなり越山一家の住居といへるは平野の中に凹形なる處に在るゆゑ他の家より此の被害を被ること非常に激しく速かに卓一の今歸着たる時には既に四

圍八面水に巻れて道もなく床さへ浸りし如くれば上着を脱て其の儘に水へ飛入り半身を浮せて我が家に漕着つゝ見れば阿雪は精悍しく疊を積て其の上に病たる老母をうち臥させ助けを待る如くにて表の火影を目護つめ氣を採焦りてありけるを認めしまゝに卓一は聲を限りに喚はりて

(卓)オ、ーいお雪さん今歸つたから氣を大丈夫に持てお出ヨ大事な物を片着てお前の腰へ着けて置ナ

ト呼かくれども水音と近所の人の口々に罵る聲に隔られ聞えぬものの如くにて答もあらぬに卓一は益々勇氣を勵しつ辛くも我が家に入る兄を見るより阿雪は雀躍なし

(雪)オ、兄さん歸て来て下さったか、モシ阿母さん兄さんが歸てお出だからモウ御茶じなさる事は有ませんヨサア兄さん疚く來て阿母さんを……(卓)いゝとも、サア、阿母さん私が背負て上ますから確りとお手をお掛なさい、ソレお雪さん夫な詰らない物をひろちやくして居ないで襪でも何でも早く、(雪)アレ自然たゝ、是でようございますか、アア兄さん蒲團を一つ(卓)蒲團處の話しちやアないやネ今は命の有無を爭ふ處だお前も此手

に駢りとお揃まり、い、かえ大變に深いヨ
ト母を背中に、妹の手を駢りと掖さみ我が冠
りたる破笠を母に被せる。還もなく遙かの丘に
點したる戸長役場の高張を目當に辛くも脱れ
行く

折しも再び降る雨に伴れて霰の横礫三國風の
颯々と往方を遮る天地の洪水卓一勇氣を鼓動し
て風に門ひ雨を敗り足下知れぬ深水をば彼方へ
運び此方へ辿り涉り苦しき水勢に押流さるゝ阿
雪を扶け老母を水に浸せじと漸くにして丘の上
に昇りて見れば園村の老若男女うち群て我れ
より先に逃たる者は板戸を以て圍ふあり疊を積
んで掩らすあり誰一人として夜具蒲團着替膳梳
何呉れと持出ぬものもあらざるに此の越山が一
類のみは箸さへ持たず其の儘に出来りたる事な
れば恰も乞巧に異ならず然らでだに家貧うして
器具のあらぬに今はしも遺子なきまで家に置き
僅に親子三人が命一つを拾ひ得し危急の折
と餘の事を仔細に顧ふ違なく戸長役場の設け
たる打付小屋の避暑所に母を下して蓆席の上に
自身の上着を脱ぎ夫れを蒲團の代りに敷き靜か
に臥さする其の上に阿雪は己が前垂を外して藁
を押包み枕となして宛行つ唯一枚なる刺綴の布
子を脱て夜着に代へ兄と妹が右左背撫擦り介

抱の手に小敬のあらざりけり母はさしもの難
病を俄かに動かせられたる故苦痛に目さへも見
え分ず卓一阿雪が薄衣にも心着ねば寒熱に勞
れて睡る面影を兩人更みにさし覗き言合さね
ど目に涙

（雪）兄さんは是を御覽なさいマア情ないぢやア
有ませんか昔兄の布子を敷蒲團にして妾の小
さな布子を夜着かなんぞの様に寒いのも御存
じなくスヤ／＼と御寢なるお顔を見ると妾ア
何だか胸が一杯に成りますヨ（兄）夫りやアお
前が言なくつても愚癡ぢやアないが餘りだと
私も心で泣けるヨ、何たる因果か知らないが
親父さんは彼の通りだシ母親さんの御難病に
搦て加へて此の洪水何したら宜んだかモウ方
角が着なくなつた（雪）方に思ふ兄さんまでが
夫なに心細い事を仰しやつては猶々妾は哀
しくなりますワ（兄）是は私が失策だつた今更
夫んなに愚癡を溢してゐる處ぢやアない、お雪
さん、お前私が居なくつてもモウ大丈夫だら
うネ（雪）斯して役場からの小家も出来まし
し皆さんが一緒に居て下さるから妾一人だ
つて夫んなに困る事は有ません（兄）然うお前
が駢りとしてお呉だと私も誠に氣丈夫だか
ら後の事はお前に任して直と是从から往つて來

るよ宜しいかエ（雪）而して今時分から何處へ
入ツしやるノ（兄）何處へ行くものかネ、お前
も知つてゐる通り明日は大事な親父さんの公判
ぢやアないか夜通しにも長岡へ往つて明日の
證人に成なくつては往けまいぢやアないか

（雪）オ、左様でしたツケネエ此の騒ぎで親
父さんの事を悉皆忘れて居ましたヨ眞個にマ
ア勿體ない（兄）何方かといへば向うの方が肝
腎だから夜通しに何でも斯でも斯付けよう此
の様子ぢやア水も大して増しさうはないから
今夜は安心をしてお出何の道明日は沙汰をす
るか直きに飛で歸るとするから母親さんがお
目が覺たら宜やうに：（雪）ア、宜うござい
ますヨ夫んなら御苦勞様でも（兄）頼んだヨ
ト上に纏ひし破布子は母が敷草の蒲團となし身
に着くものは股引と絆纏さへも濡しまゝ乾す間
もあらで一散に堤傳ひに捷徑を長岡さして急
ぎ行く後うち見やりて妹阿雪吹雪を夜ぐ荒席
垂れても四方を照すべき燈火もなき假小屋に難
を避け來し人々の寐る聲すれど我のみは臥すべ
きものもあらずして身に着る衣もあら妙の一重
襦袢に夜を寒み母が邊りに徹宵守り明して翌
る朝施行の粥に母娘腹は肥せど天災の藥劑に
手宛は露粒もあらぬを何とせん行の涙に吐息吻

くのみなる恁る處へ巡視として戸長森村剛藏が書記筆生を随へて肩を峙て胸を張り傲然として入り來り阿雪が老母を勸りつゝ薄衣に裸ふ手を離さず指の龜まり面色の薄紫に變り行く朱唇の蒼く淡黒なる寒威は四大滿身の温度を全く奪ひ去り人事をだにも辨へぬに屈せず挽まぬ孝養を誓一瞥と尻日かけながら通り過んとする裾を押へて阿雪は頭を下げ

(電)モシ旦那さまへお願ひでございます 御覽なされませす通り母が永々の煩ひで一日もお藥を飲しませんと誠に病氣が重りまして困りますから切て合藥丈けでも持て參らうと存じましたがツイ取急ぎまして忘れしましたから困り切て居ります何か何なりとお藥を下さる譯には參りますまいか(剛)何だ、藥が貰ひたいと、貴様は母を何と心得てるコリヤ、母が一命に係はる程の大切な藥なら何故夫んなに粗略に扱ふのだ、第一斯様に水害の中からは金掛をして立退所をして下さるゝのは政府の御慈悲にて且は拙者の注意であるぞ夫れを未だ不足らしく藥を哭るの何のツて不埒な申し分だ左様な事は相成んから藥が買いたくば自費を以て醫師に頼め拙者は夫んな取次はしないぞ、馬鹿な奴だ

ト例の残忍憎惡なる圓な眼を怒して思ひの儘に言懲し得意顔にも往き過るを老母は晦けき目に認め苦惱のうちに子を思ふ心に小撒あらざるか重き頭を半擽けて

(母)コレ、阿雪モウ何にも願つて呉れるな成程戸長様の言ツしやり通り水没しに成つて死んだツて仕方がないのを斯して小屋まで建て下さるのは勿體ない政府のお慈悲に安もマア何やら氣分がよいやうだから卓一の歸るまでお藥は飲ますまい家に居りやこそ汝なり卓一なりが孝行にして些とも粗略にして貰はずにお藥も戴けばお粥も吸つて寒くなく空腹くなく日がな一日寐て居るやうなもの作左衛門どんの事を思へば地獄だといふ牢の中で暑い寒いも言れまいシ何なに難儀をしてござらツしやらうに妾は誠に仕合だ勿體ないと思つてから又御無理な事を願つて叱られない様にして居て呉なア、死にたい(電)ア、アレまた母公さん縁喜でもないモウ、夫んなに死ぬくと言つて下さるなヨ風が當つて冷ませうからドレ此方を圍つて上ませうト阿雪は涙押包み藥の籠を垂籠て喘咳に苦しむ母の背撫る手先に觸るゝのは日に／＼著き骨とみと痺衰へしと見るにつけ口には夫といふ間

漏る涙の間にも物思ふ如何貧乏に迫ればとて須彌芥海の恩高き母の病氣が看護さへ思ふ心の十分一屑かせもせで碌々に上りものとて上はせず醫師も招かず藥師とて縁に憑む買藥夫も三度一度は煮出しの殻を種々に煎じ詰たる赤貧は如何なる星に崇られてか唯さへ弱る玉の緒を此出水に箸片箸持たずに落る乞巧の此の慘狀は何事ぞと了得婦人の愚癡涙返らぬ事を木綿襪かゝる處へ再びまた靴音高く森村が先に立つつ入來るに阿雪は何か我が上を辱るゝが恐ろしやと見向もやらずで老母が背只一心に撫擦るを戸長が東道に巡覽せる新潟縣令何某は昨夜頭城の極東にて水害ありたる電報を得ると其の儘今朝の一番汽車にて出張なし水害地方を實地の序避書場をも一覽せんとて今しも此へ出來りしなり

(剛)コレ、今公の御巡覽だ御拜を致さぬか(令)森村森村其の儘にして置け、コレ森村其の少女は何者だ(剛)ハア、此の者にございませすか(令)エ、何ソレ當郡三俣村千二百十五番地平民越山作左衛門長女ゆきと申す者で(令)此の病人は母か(剛)左様でございませ(令)作左衛門は如何した人足にでも出て居るか(剛)イエ作左衛門儀は官倉盗用の嫌疑

で拘留中の者でございます、夫に卓一と申します。長男が一人御在ますコレ。お雪卓一は何した(雪)ハイ兄さんは公判とやらがあると言つて昨夜ツから長岡へ参りました(雪)ゆき、汝の母は何時から病氣に成た精しく申せ(雪)ハイアノ母でございますか是れは一昨年の二月から加減が悪くツて臥つて居りましたが此の七月に父が御拘引に成りましてからドツと悪く成りまして今では口も碌々听けないやうに成りました(雪)左様か、三ヶ年の間誰れが母の介抱をして遣はしたナ(雪)甚だお恥しう御在ますが家が貧窮でございますから父は年を取ましても家には些とも居られませず兄さんは東京へ参つて留守ですから妾が看病を致して居りました(雪)森村、今聞く所では至つての孝女のやうだが何故服を具して上申せんのだ如何なる事情があるかは知らぬが其方が職務の不注意であらう加へ此の大病人に醫藥の手宛も致してないが縱令衛生主任の者が他に事務の都合で注意の届ぬ事ならば其方が注意を致すのが至當な事だらう然るに斯る患者を見棄て置くのは不都合千萬だぞ急遽の際だから不問には置くが即時手宛をして遣せ(雪)何分お薬をお

願ひ申ます私怨を以て公道を左右したりし森村も長官自ら實狀を探りて之れを責詰られ唯恐れ入るのみにして再び開かん口もなく衛生係の主任者に懈怠を責めて罵りつゝ即時醫藥の手宛を施し猶水害所を巡覽せり此の夕刻に卓一は自ら父を車に乗せ先に進んで馳き歸る後に續いて立派の紳士是も車を急がせて該の避難所に入り来る顔を見るより阿雪は飛出で兄と父とに取縋り涙に曇るおろく(雪)オ、兄さん、お父上さんマ能く御無事で歸つて下さいました眞個にマ何成つたかと……(作)お雪お前が婚しより已らは丸で蘇生つたやうだ(雪)父上さん貴父は辛勞れがございませうマ其處で御休息をなさいますし、先生此の通りな水書で誠に困極りました(文)實に驚いたものですネ僕は洪水の實地を始めて見たが慘憺目を掩ふと評するも中々及ばない(卓)マア此へお掛なさい、お雪さん此の方は東京の毎朝新聞の記者で山田文治と仰しやる先生だが先刻鹽澤の停車場でお目にかゝつたからお伴申したんだが施行の茶も何にもあるまいネエ(文)ナアニ夫よりヤア早く此所置を付なくツちヤア仕方がない、

公判の事も種々聞たい事もあるシ中島君の傳言もあるが夫等は先づ後にして寺院か何かに一先づ移轉し給へ、ナアニ宜しい一切僕が承知だヨ宜しい

第五回 言葉の巷

芝公園地の一隅なる紅葉が丘に設けある紅葉館の樓上には帝國大學の得業生自費洋行の送別會とて各自思想を口に發し祝文を誦し演説をなし拍手喝采の音のうちには庭前の紅葉錦を散し主賓が滿腔を盡したる慷慨悲壯の答詞には欄間に掲げる黄金の紅葉風を含んで落るが如し絃聲歌調妙にして梁の塵耳欲つれば歐洲風の詩歌の節此音譯々として玉響躍る正午よりの議會も甲去り乙散り席靜かに杯盤廚に退くまで猶席上に睨り轉て前後を知らぬ一書生あり服装を見制辭を見るに大學校の生徒なるが満面朱を瀝ぎし如く十二分の醉を貪り酣睡幾ど人事を絶ゆるに同窓の友一人として之れを扶け誘はざるは平素の交誼の厚からざるかに思る、癖あるか或ひは酒癖の馴しきなるべし若し平日にてあらんには然とて棄は置まじきに今日日曜日の休日なれば歸校の時刻を急がぬより斯は放擲する者ならん中に就て齋藤孝は親き疎きの差

別なく一意に實義を施す質として外の生徒と伴侶に切通しまで用往きたる後の方を顧視れども未だ睡の覺さるか歸り來ざるに齋藤は彼の心事の如何しても不惑なるより同窓の學友們を慰めて其の儘後へ取返し元の座敷へ來て見れば一個の藝妓が持餘し搖覺せども起ざるを見るより孝は側へ行き背中を敲けば起直り吹く息鼻を劈くばかりに跡は再び高聲聲容易に覺る氣色なきにぞ孝は性急なる例の持病萌して聲高やかに

(孝) オイ起給へ〜大變だよ火事だ〜早く起ないと焼死んちまふぞオイ起給へといふ事ヨ、姉さん宜しいヨ僕が估と起して伴て行くから眞個に厄介ものだネエ、起るとツてば起ないか方の付ない酔どれのだ、ヤウムートコシヨ、サア〜お目をお覺し遊ばせト右の手を持ち引起すに此方は睨かに目を睜き片手に臉を擦りながら頻りに四方を看過しつ

(生) 齋藤君か、ア、アーアー睡いモウ少し寐かして呉れ給へ(孝) 馬鹿を言ひ給ふ皆なモウ歸つちやツたヨ、君が餘り能く寐てるから寄て集つて置去りにしたらうちやアないか、睡たくば飽まで睡れ棺の中サ、サア往き給へ

ヨ、君(生) コリヤア驚いた誰れも居ないぢやアないか(孝) オイ〜又麻痺のか困らせるぜ、サア往き給へ、ネエ君(生) ア、往くヨ、夫んなに性急な事を言ひ給ふな、姉さん濟ないが水をお呉ナ(孝) ア、自然たい僕の氣が短ツかいのは知つてるぢやアないか早くし給へ早くし給へ(生) 相替らずの火急が始まつた互生だから水だけ飲して呉れ給へ(孝) 能く種々な熱を吹男だナ、ソラ水が來たヨ酔覺の水だサツサと飲んで早く〜(生) 君のやうに爾急いぢやア水も碌に飲めやアしないア、いム心持だ夫ぢやア往かう、姉さん大きに御厄介様(孝) 忘れ物はなないか、サア早く〜(孝) モシ貴君おハンケチが(生) ソレ見給へ人の氣を着けるより自分を能く注意し給へ(孝) 一番反詰がへしか、難有う

ト孝は書生を誘ひて紅葉館を立出れば未だ酔覺ぬ一人の書生は孝の肩に手をかけて亂るゝ足元踏々と中心さへも礎々に定まらねども目を据て頻りに口を尖らしつ

仲間、三人か四人幹事を拵へて夫れに全權を任せて入費の徴收から席上の規律を立たら他は皆な其の中央集點に依頼するから規畫が立て宜きさうなものだに何だ馬鹿々々しい、各科から幹事を撰出して一科毎の自由に任じるツて、マア人数が揃つたからこそ宜い様なもの、缺席員が多數であつた時は第一主賓に失敬だらうぢやアないか、君は何と思ふヨ一科に出費の額まで違つて其の科の出入金を合算した上若しも勘定が立たなかつたら可笑なものだらう、演説だツて其の通りサ自分々々の専門で送辭を作るもんだから肝腎な主賓が専門と持説とを擧て別意を表したものは皆々ぢやアなかつた之れといふのも主宰者を置いて其の人に悉皆全權を集めて會衆には各自之れに服従すべき義務を負せるがいゝのサ、何でも一人のビスマークがなくなつちやア此な大勢を支配して嚴然たる規律を立る事は出来ないヨ、僕はモウ最初ツから癪に障つたから無性に飲んで遣ツた、酔て言んぢやアないけれども彼れの洋行からして僕は不同意だヨ、ムウ、未だ學位さへ取らないうちに何だ生意氣な來年は國會が開けるから英國へ行て憲法上の慣習を實地に視察して夫から

瑞西國を遊歴して有名な地方自治制度の完
美な處を取調べ之れを應用して故郷の人氣
を勸奨すると、那な奴の言柄は極つてらア
僕なんざア彼奴位の金があるなら獨逸へ行
なア、ネエ君

ト酒を力に満身の不平を切りに訴ふるを唯々
諸々と受ながら思はず路を踏誤り

(孝) オヤ、君が餘り饒舌るもんだから大門へ
出ツちまツたぢやないか(生) ウム、なア程
(孝) なア程もないもんだ此方へ來ちやア皆
なと一緒歸る事が出來やアしない君が餘
り饒舌るからサ(生) 恐れ入たヨ、ネエ君酔て
るから許して呉れ給へ其の代り僕が鐵道馬車
を騙らう(孝) ナアに君に騙らしちやア氣の毒
だ夫んなら些と早く歩き給へ、僕は氣が短か
いから遅々すると打違つて往ちまふぜ(生) 宜
しいがネ君未だ時間が早いから此まで來たも
のだ神明を一番冷却して往き給へ○齋藤はチト
怒りたる聲にて(孝) 否々(生) 君の様に働一
刻な事はかり言ちやア困るヨ些たア僕に交際
給へ(孝) 否々(生) ヨー君、いゝぢやアないか
(孝) 否だツたら夫なに言なくツてもいゝぢや
アないか僕が君に交際して矢場を冷却するのは極
譯のない話しだけれど君は其の帽章に對して

恥かしくないか、書物を讀むばかりが學問ぢ
やアなからう品行を方正にして大學の名を漬
きないやうに注意するのは學生の義務だ、元
來僕は君のやうに酔ばらツた人物と一緒に歩
くのさへ面白くない、だから見給へ君が餘り
泥酔したから皆なが君を同行したくないツて
先へ歸ツちまツたんだらうぢやアないか併し
ながら夫では君が後で迷惑するだらうと思つ
たから僕が後へ引返して君を起したのだに
未だ夫んな贅澤を言ふなら僕もモウ同行は謝
絶しよう、左様なら(生) オイ○齋藤君謝罪
謝罪待て呉れ給へ○オイ君モウ何にも言な
いよ此んなに酔てる者を獨り残して往くと
は夫りやア君餘りだぜ恐れ入たから同行して呉
れ給へ(孝) 夫んなら決して神明へは往かない
か、夫ぢやア早く來給へ(生) 難有い(孝)
サア、遅いなア

ト孝が火急の性質に泥酔した一生徒は苦しき
ながらも手を見れ瞞脚として定めなき足を引摺
り新橋まで來りて見るに鐵道馬車は三輛ばかり
出車する趣きなるより齋藤は一層足の度を早
め抜へし腕に力の籠れば

(生) 痛い(孝) 君痛いヨ夫なに引張たツて歩け
やしない未だ馬車は出ないから、ア、苦しい

(孝) 苦しけりやア馬車の中で綴り休み給へ君
は足が遅いから途中の飛乗は中々險難だから
(生) 何ぞと言ふと君は壓制主義を出すから困
る(孝) ビスマルク精神は君の特有だ、僕は人
も壓さなけりやア人にも壓せられない積りだ
が夫とも君が壓せられると思つて嫌ならば宜
しいから君は君の自由に任じよう僕も亦君と
分離して馬車に乗るから、却つて其の方が僕
の希望する處だ(生) アまた御機嫌を害れたか
決して左様いふ譯ぢやアないから彼の車に乗
ますヨ(孝) イヤ故らに思想を枉て御同車では
恐縮致します(生) 左様仰しやらずに是非御
同車を……

ト上野行と認めたる第何號かの馬車に乗り三橋
に達する切符を購ひ孝は件と並び坐しボツケツ
トより烟草を取り出し手づから巻いて喫しながら
(孝) 君、些たア酔が醒たか(生) 醒處か君が無
性に引張て歩かしたもんだから此へ還入ると
一時にクワツとして來た此んなに酔ばらツた
ので思ひ出したが君とソレ日外富士見軒で一
酌した時に君が誘引して來た、エー何ツツツ
ケー、越山、越山君サ彼の人にやア久しく會
ないが何したヨ(孝) 人の上程障礙の多いも
のではないヨ君も一過會たから知てるだらう越

山君は學識といひ才智といひ實に僕なんぞと同日の論ではないが幾干素志は厚くツても金匱のない人は仕方ないもんでマア那して東京に居るうちも僕の學資を割て遣たり何かして少しづつ書見もしたシ中島先生に庇護せられて永く食客もしたが天彼の學才を嫉むともいふ譯が僕が暑中に歸縣して往復ともに同家を訪れてヤツた處何した事だか親父が拘引されて行たといひ親母は大病といふので少々妹が一人で困つてゐるから其の次第を越山君に話説をしたのサ夫だから越山君も中々修業處の話しちやアなく直に翌日の一番汽車で歸郷したが今以て何とも書信がないから大變に案じて居るのサ(生)夫なやうな事を聞たツけネエ、爾だ君が來囊をなくした時に歸國しただらう(考)ア、能く君は知つてゐるネエ、僕もあの朝停車場まで見送りに往かうと思つたが旅勞れでスツカリ寐忘れツちやツたから實は約束をして置ながら不徳義な事をしたと後悔して居るのサ、夫だから越山君も怒つて書信をして呉ないのぢやアあるまいか中島先生の處へ聞に往たら委細の事も知れるだらうと思ふけれど那家の貴女が美人丈に何だ氣が咎めて往き憎いから渴を忍んで扣へ

て居るのだ(生)エヘン出ましたナ、越山君は附たりで實は貴女さんの顔が見たいけれども豈夫にネエ、ソラ人目があるから渴を忍んで居給ふのだらう(考)馬鹿馬鹿、馬鹿な事を言給ふな何で僕が夫んな事を、君は實に驚いた事を言ふ人だ○眞實に成りて忿懣するに(生)アハ、ハ、ハ、串刺だヨ怒り給ふな、併し越山君は幾干鐵面皮でも君の處へ書信はし憎からう(考)何故々々何いふ譯で書信が出來ないのか(生)君は夫だから困るマア能く前後を考へて見給へ越山君を君は切りに信じて居るが越山君は必ず君を信じて居ないだらう(考)君は奇怪な説を吐くが何いふ理由で越山君が僕に不徳義であるといふ事を斷定したヨ縱令越山君は信じないにした處が僕は十分越山君を信用するサ(生)夫だから君は正直に失して權謀術策に乏しいといふのだ君怒り給ふな決して腹を立ては否ないヨいゝカエ、怒らなけりやア話さうか、君、越山は賊をしたヨ、驚かないでマア聞給へ君の深切を無にして君に害を加へたヨ(考)何だとエ君夫りやア實説か實に奇怪千萬な事だ諱だらう(君)また夫な事を言て僕を遊ぶのだらう越山君は夫な人物ぢやアない諱だ(決)して僕は信じないネエ、

ウム夫は何か君の誤解に違ひない(生)アそんな事を言てらア困つた人だナア何で僕が君に向つて諱言を構へるものか、君と越山とを離間して何ぞ僕が漁夫の利を逞しうする事があるヨ、鰲蚌の闘ひを望む譯があるなら夫りやア随分離間を試みるかは知らないけれど斯言ぢやア悪いが越山君なり君なりに交際を斷たが爲めに僕に大變な利益があるといふ譯ぢやアなしッマル處一人でも二人でも親友を棄るだけ僕の不利益ぢやアないか畢竟僕の精神は君を重んずる、ウム君の爲を思ふから面を侵して面白くもない話説をするのサ、ネエ君、君は何と思ふよ元來越山は決して不正な事をする精神のある男ぢやアないけれど所謂貧の出來心でした事だらうと思はれるが併し一旦破廉恥をした者には往々之れを再びする病を生ずる者だから君も耐いふ者と交際イヤ、親友と言れるのは畢世の不得策と考へるから忠告するのだが夫とも立て僕と言ふ事は諱で飽までも越山を信じるといふなら夫れまでの事サエ、君何と考へるヨ、君オイ君斯く再三も繰返して説付けらるゝに齋藤も其の性、神にあらざれば半信半疑に迷ひ初め恍惚と

して判斷を下し難るに一生徒は猶傍らより辯を
研ぎ

(生)君は餘程疑心が深いネエ 現在自分の爽囊
を奪はれながら未だ其の人を信じて同窓の僕
を疑るのか、いや君は愈よ僕を仮奸な精神
だと思ふんだな、君が其の精神なら僕は是よ
り自分の潔白を立なくつては成ないから……
宜しい歸校次第宣誓をして諸君に此の判決を
訴へよう君も法學を修める生徒ぢやアないか
是ンばかりの事に斷定力を活用する事が出
來ないか(孝)怪しからん、僕は君を信じない
事はないけれども越山は何考へても夫んな人
物ではないから實は判斷に苦しんで居るのサ
(生)君未だ夫な事を言てるのか大ぢやア爽囊
は何したと思つてるのだ(孝)ナアに僕は粗々
ツかしいから何も……(生)那の晩現在君の口
から越山の處へ忘れて來たと言たちやアない
か(孝)ウム實に何も變だよ(生)三諫して聴か
ざれば死すだ、僕はモウ寐ツちまはう(孝)君、
君は何處までも夫れを確めるンだネ甚だ失敬
だけれど君がまさかに僕を欺きもしまいシ
申候なら兩向になつても言ふまいから……成
程前後を照合して見ると爽囊を肩けて哭ない
といひ書信をしないといひ何も君の言ふ所が

實説だらうダガネ越山君も全く惡意でした
事ぢやアあるまいと思ふヨ 斷金の間柄だか
ら濟ないが借て置く位な處だらうと思ふが
君の判斷は何だネ併し幾干親友の中でも至つ
て宜しくない所爲だ夫んな男たア思はなかつ
たが如何も君の言ふ通り交際を遠ざかるやう
にししようヨ 爾して居るうちには越山の精神が
實際腐敗したかしないかも分るだらうからネ
エ君、ネエ爾ぢやアないか、オヤ／＼今まで
饒舌て居たのにモウ寐入たか酒といふものは
奇體な魔睡劑だイヤ／＼酒よりやア金の方が
餘程精神を魔睡させる、人を見たら賊と思へ
か皮相には分らないものだ

ト信憑生ち地を換へて吾が友愛なる越山の心事
を疑ひ訝しむと同時に渠が有爲なる知識を持つ
つ道徳を全うせざるを哀惜し併せて之が原素
たる渠の生來貧賤なるを憐れむ心の生じたる
齋藤孝が正面には萬世橋より乗車せし下婢
を伴ふ淑女あり二人が談話を注意して今まで
仔細に聴居たるが孝の始めて正面するを見るよ
り會釋を施すに孝は之を見ると均しく最も倉皇
し顔色にて
(孝)オ、中島先生の妹君是は何も實に失敬失
敬、エ、一軌方へ上野……夫りやア何も如何

も失敬、飛た事を……(今)オホ、い、齋藤
さん些とも入ツしやいませんネ唯今のお話し
は眞實ですか(孝)實に恐縮實に驚き入つた
お嬢さん何も私は困ましたネエ(今)貴郎
毎朝新聞を御覽に成ましたか(孝)イ、エ今日
はまだ
此時馬車は上野へ着して車掌が告る止車の鈴
チーン

第六回 戀積る雪

初雪として詩にも作り歌にも詠じて其の風致を愛
歡ぶは都人の上にぞある我が北越にては初雪
の降れりと聞て人々の恐れを懷くこと蛇蝎も害
ならず彌が上に降積りて家居を潰されまじと人
あるも人なきも皆屋の上の雪を掃ひ之れを道に
積むなり其のあさましきこと實に名狀すべか
らずと鈴木牧之が北越雪譜に記し付しは去る天
保の往昔ながら代は變はるとも天時は變らず本
年も時を違へずして霽々と降る雪掃へども漸次
漸次に氷詰め満地陰湿なき白銀を以て賑
詰たる世界となりて家々の烟のみこそ色はあり
けれ三俣村なる越山は彼の洪水に家を洗れ壁落
ち疊の流失しを顧みるべき暇もなく兄卓一は公
判の期に後れじとて長岡へ走り行きたる後とて

は妹阿雪が手一つに母の看護を怠らで我が身は寒に凍ゆれど厭へる色もなよ竹の節を籠たる孝養は權家まで貫ぬきて母が醫藥も役場より手厚く受つる其の折しも兄卓一は人力車に父作左衛門を乗せながら東京毎朝新聞社の主筆記者たる山田文治とともに等しく避難所へ歸り來りて父母父子の爰に再會せしのみならず山田が厚き恵みにて一先づ寺院に居を轉じ水の減ずる時を待ち元の家居に歸りて見れば家といへるは名のみにて膝を容るべき場所さへなきを之れをも山田が修理を加へて更に數月の食料を恵み遣はし袂を分ちて漫遊の途に就きたりけり畢竟ずるに山田文治は競馬を好み馬西を飼ひ文壇の餘暇馬に鞭を尙武の遺風を尋ぎて居たるに此の二年打續きて競馬に多くの勝利を得つ既に本年春期の馬場には初日に優賞三百金を獲第二日目には春川伯の都といへる駿足と競奔なしに名譽ある婦人財義賞を獲たり第三日目には百五十金を獲番外競馬に尙勝て若干金を手に入れしかば忽ち地方を漫遊して我が主説たる地方自治の制度を建つべき原料を求めんとし決心して當越後路へ來りしに圖らずも上野公園地にて一面したる越山卓一が父を乗せたる車を轆きて歸る途中に往曾たれば其の何故に洪水あ

る郷地を棄て此の邊に車を轆くかと尋ねしに父作左衛門が公判廷の證人として召喚あり即ち夜一夜路を走りて長岡支廳に出延したるに證恵如何にも分明ならず遂に免訴し放還の判決下りたりしに依り片時も早く歸郷して案じ煩ふ母妹に安心させんと車を借り自ら轆いて歸途に就たる趣きなるに山田文治は本心義俠を好む癖あり且卓一が同主義を持し有爲の氣象言外に顯はれたるより哀憐の仁心切りに止め難く義財を擲ち斯くまでに救助を施したりけるなり是に依りて越山一家は人の情に身を容るゝ家さへ出來て其の上に數月の糧すら時へつ母の治療も手を盡して愁ひは全く家内より除却したるにあらねども聊か憂の度を減じて笑ひを顯はす事さへありき斯く引續きて積年の貧窶を水に洗ひ去られて身心俱に聊かは餘裕の爰に生ぜしかば卓一も較や己が得し力を伸ぶる機來りしに戸長森村剛藏の秘愛の二子權一郎は此の程よりして卓一を村會議員に推擡せばやと陰然力を盡し居たるを卓一夙く傳へ聞き今村民の代議士となり土地の利益を料ることは最も易き事ながら現に仇敵視せられたる森村一家の推擡に應ずる事は好ましからず聊か日々の炊烟に辛苦を凌ぐ如くなれども皆是れ山田其人の慈愛

に基く所なれば中々心を安んずべき所にあらねば是よりして田地も屋敷も受戻さんと心を勞する其のうちにも雪は晝夜を廢すして一しきり毎降秋り今は空より降歇めども地氣の溫熱稍や薄らぎ雪洞中の穴籠り耕作すべき術あらねば卓一は唯一室に燈を剔て中島より授けられたる社會學を翻譯すれば妹阿雪は雪に酒せし繡箔傘を機にかけつゝ織出すに父も安居の氣もあらねば折々鮎を獲ふに時期漸く熟せしかば晝夜漁業を始めたなり此の頃よりして權一郎は時々深切に訪來り富有の身とて病ひに在る老母が許へ珍しき滋味を贈りて一向に一家の者に歎みを通じ閑話を燭に乗るさへありけり一日雪氣の空合なるに父は雨雪を凌ぐべき道具を持て往きたるに其の青澤へは程遠ければ助獵がてらに往きて見んと留主を阿雪に託しつゝ卓一獨り獵靴に品を欺むく積雪を踏しだきてぞ出往きける後姿を見送りたる阿雪が前に權一郎突然出て柔和なる口に幾多の笑を顯はし

(權)お雪さん卓一さんは(雪)オヤ森村の若旦那様ですか兄は唯今チヨイト其處まで(權)やア一足遅かつたか知らん(雪)今に歸つて参りませうからマアお遣入なさいまし

ト誘はるゝ儘權一郎は足駄に積る雪塊を傘の柄

をもて碎き棄て板戸を手づから引閉つ、圍爐裏の側へ座を占むる其の容貌より形容を此に詳さに寫し出さんに年齢二十三四なるべし色白くして皮膚細かに髪飽まで黒くして毛の剛きこと櫻相の如し面は長きに過る方に口元自然に愛を含めり目涼しく黒點勝にて鼻は著るく隆き方なり長短肥瘠中庸を得て音聲靜かに辯密なり大體よりして評する時は品格高き美男子なれども然ればとて驕弱ならず寧ろ男らしき風采にして所謂苦み走りたる好男子とは此の事なるべし態度頗る溫藉なる權一郎の側らに意を約やかにして款待せる阿雪は抑も如何なる婦女ぞ顔圓く尖着て色は白きといふを得ず頭髮薄く柔かにして頸脚誠に美事なり鼻は隆き方にあらず柳の眉は稍や細し其の最も愛らしきは生際の富士形にて軟毛豐麗と之れを眼取り明眸鮮かに大なる方にて畫くが如き重險に睫毛の長く珠子を覆ふは嬌態最も深く見ゆべく半月の口色愛たく未開紅の匂ひあり軀幹小さく粧極薄きを惜める人のあるべきか額の狭きは才を表せど人に依りなば短命なる人相なりと評しやせん兄草一の面貌と誠に恰好したれども幼少よりして貧窶に育ち心を小さく氣を約やかに唯翼々と屈折せる習ひが今は性となり口數とでは能くも听得ず諸

事控へ目に柔直を主として氣象をすること多ければ天より興ふる活潑の氣象を活用すること能はず姉齡既に十九なれども風致も舉動も漸くに十四五歳の小女なり美女の部内に數ふべき阿雪ならねど精神の美しきには人をして其の顔色まで美しく佩服せしむる事あるものに乃ち森村權一郎も孝養厚く柔順なる心を愛して此の日頃親しく出入なすうちに坐作進退の優美なるより今まで終までの感情なかりし阿雪が容貌さへ村醜の人を醉しめ野末の花の目に麗はしく戀慕の情の發せしかば其の孝養なる誠心に感ぜしめんと心を碎き老母を厚く勸はりて善といふなる善物を恵みなどしつ宛然に生の親をば養ふ如く實義を盡し一向に阿雪が心を動かす日を意中にして今日とても斯くは故來りしなりけり阿雪は煮出せし茶を薦め母が寐覺の徒然にと手製へなる小麦の餅の甘み薄きを取添へて數の珍味と恥かし氣に俯め榮なき缺茶碗日光盆も縁破れて木地を隠すの術もなし阿雪は手持無沙汰にて少しく顔を赧らめつ

(雪)折角貴郎入ッしやいましたのに生憎兄が留主でございましてお談話敵手がございませうから御退屈で入ッしやいませう(權)なアに何せ風來々々遊んで居るから別段退屈を覺え

ないのサ、お雪さん母公さんは何だエ今日は空から落ないけれど大變寒氣が厳しいから出來のよくない方ぢやないかエ(雪)イ、エお蔭様で良いお薬を頂きましたので今日はモウ熱もズツと減まして大層氣分が宜さうに先刻からスヤ／＼寐んで居りますヨ(權)爾かエ夫はマア私もお薬の進め榮があつて嬉しいヨ、お雪さんお前お機嫌にかゝつてるぢやアないか遠慮しないでサツサとお繰ヨ(雪)ハイ難有うございますモウ少うしでございますから夫ぢやア御免下さいませ

ト阿雪は會釋勿々に起て勝手の鹽竈より取出す鹽に身内を淨め燧石もて切火をかけ機を上げたる別間を掃ひ心に神を念じつゝ髮に縋地を漉せじと色氣もあらぬ染手拭自暴に結びし頬冠りの端も短か／＼莞爾と笑つて上る機のうちへ結ひ廻したる注連繩を搖り動かして織出す投杼と櫻の調子能く小千谷の市には露がねども抑て越後の縮緬機其の織女の習慣は今の代までも變らざりけり

(權)何時來て見ても／＼お前のやうに精を出す人は今時減多に有りやアしないヨ眞個に感心なもんだ(雪)また若旦那が、、幾干精を出したくツても出來ないから仕方有りませ

んワ、(樵)夫丈け出来りやア澤山だ其の上何か
が出来た日にやア村中の壯客は皆な氣違ひに
なツちまふだらう(雪)何故ですエ(樵)逆上て
サ(雪)オ、さうく氣が違ふと言へば此縮細
機を上げてゐる時に男と出會をして氣違ひにな
つた女が有りましてツてネエ(樵)夫れは大方
婦女子の教誡だらうが私やア何だか氣違ひ
になりかゝつたヨ(雪)眞個に面白い若旦那
事、何故貴郎が氣違ひにお成んなさるんです
エ訝しいぢやアありませんか(樵)人といふも
のはネ、此方で、エ、何だか何も氣が變だ
ネエ(雪)妾にやア更ばり分りませんよ(樵)分
らないから困るのヨ、一體お雪さんは何んな
人が一番好だネ(雪)何んなたア何なノ(樵)サ
ア先づ御亭主に持にはお金のある人を持つと
思ふか夫とも立派な男がいゝか此んな人なら
と思ふ人があるだらう何だエ、エ何んががい
いネ

(雪)妾の好きな人ですか妾の好きなのは内の兄さ
んばかりですけれども兄さんには他所からお
嫁さんが来るから仕方が有りませんワ(樵)大
笑ひだ兄弟で夫婦に成る奴があるものか、
眞個に罪のない可愛い事をいふ子だヨ實に此
の初な處が價値だ(雪)若旦那は何んな内儀さ
んをお賞ひなさるノ(樵)私か、私やア此の近
在で貰はうと思ふ人は只た一人しかないけれ
ど先で思つて呉れないからダメだヨ(雪)又那
んな事はッかり若旦那を見たやうに御標致が
美くツてお心立が善く誠にお優しくツて入
ツしやるものを誰が嫌ふ人があるものですか
(樵)煽動たツて何も驕りやアしないヨ(雪)イ
イエサ眞個によ(樵)夫ならお前も嫌やアしな
いか、マア私が大變にお前の事を思つて居て
是非女房に仕たいと言たら其時お前は私の内
儀さんに成て呉るのだネ、屹と爾かエ(雪)オ
ヤ、否な若旦那だ、妾やア夫んな事は知りま
せんヨ

ト此の時初めて時ならぬ紅葉を散ら散ら秋
波を轉じ一心に縮細繻の手の小歇なき後姿を
倩々と見れば思へば愛らしき娘盛りを愛とい
ふ愛に思ひを勞らせつ可憎深山に朽すは不
便の者よと戀情の彌加はりて權一郎は精神宛然
恍惚と迷ひ入りては猶更に咄念ひをうちつ
けに言説ん術もならの葉の廣き世界に數多き婦
女の中に是のみと凝結んだる一心に今は恥をも
うち忘れ思ひの丈けを口づから寫して何か胸に
積む愛慕の情を遂なんと分別さへもなかくに
膝立直して一室の口身を倚凭て眞面目になり
(樵)お雪さん否な若旦那だたア餘り酷いぜ外
の人は何だか知れないが私は親父の片意地を
張つて無理な事を言出すのを蔭になり陽に
なり出来る丈の力を盡して何かお前の家の爲
に成るやうと心配をして居るのを悉たア察し
て呉たツていゝぢやアないか、恩に被せるや
うぢやアあるが爾言ちやア何だけれど母公さ
んは永々の難病だシ阿父さんはそんな厄難
にお遭だシ卓一さんとお前さんが必至と困つ
てお出だから餘計なお世話のやうではあるが
及ばずながら何やら彼やらと氣をつけて上げ
るのがお前の心にやア通じないかエ(雪)アレ
勿體ない通じるの通じないといふがあるもん
ですかネお若いにお似合なされない御深切な
方だと家中皆なで何なにか難有がツて居ませ
う斯して先づ樂に致して居ますもの皆な
貴郎のお庇護様でございます(樵)爾お禮を言
れちやア困り切るがネエお雪さん、人を思へ

ば思はるゝといふぢやアないか程までにマアその私の方で思ふのを察してネニ、ソレ私の内儀さんに成て下さる氣はないかエト思ひ切てぞ述べる阿雪は今の一語を聴き満面朱を漲が如く怒氣心を衝き平常の口の重きに似もやらず唯一言に言破り恥を興へて此の後とも再び淫猥言の葉の萌るを止めんと口までは已に出しを斯までに前後を顧み暇なき折にも性は之れを制めて彼の控へ目なる心より情々慮ひ運せば日頃よりして恩恵を被る人に親邊り恥辱を興へ仇々しく思ひを貽すは屑よからず恩と義理とのなからずば思ひの儘に言懲さんに心を曲るも世の中の人の務めぞ是非もなきと僅かに胸を擦りつゝ怒と怒りを押包み苦しき笑を耕ひて

(雪)何を仰しやるかと存じましたら 又若旦那の御串戯はッかり妾のやうな至らない者を御串戯にも爾仰しやッて下さるのには誠に難有ございませうが縁邊の事は當人同志の納得づくでも出来ませんから若し夫んな事なら何ぞ親共へ仰しやッて下さいまし〇半言さし笑ひを含んで(雪)眞面目な顔をしてお冷却なすッちやア否ませんヨ

ト愛嬌多き目元にてジロリと見やり其の儘に顔

を反向て取合ねば權一郎も今はしも押といふべき詞もなく心中怒りを含みつゝ暮なんとする空を幸ひ挨拶さへも勿々に歸途に就たる權一郎は何か再び尋思をなし遽だし氣にまた元の越山方へ歸り來つゝ如何欺き誘ひしか阿雪を伴ひ雪道を二町餘り往く向うへ明松照して歸り來る父作左衛門が往會ひさま火影に透して認しかば合點往かじと呼止むる聲聞き着けて駭寄る阿雪を然はさせじとて權一郎は支て持たる傘に明松うち消し往かんとするを遣じと止むる作左衛門面倒なりとうち据て後をも見ずに阿雪を引立て何處と先はしら雪の凍道傳ひ逃去りたり

第七回 思ひ出草

逝なんとする歳月を止めんと思ふは常に人の情慾ながら明るを待し今茲のみぞ短かき冬の日脚ながら残んの日子的疾く去れかしと一刻をだも待るゝなるべし道理なるかや新なる曆とともに開け初むるものは一つ二つのみにあらず亞細亞洲の大博覽會は踴躍たる忍ヶ岡の百花とともに開かるべく千古未曾有の國會議員は一敷詔の出づるとともに開會の典を仰がるべき建國二千六百載無比の新禧を迎ふる歳暮の餘日を逝しと感ずるは寔にさもあるべき事に

なん其の年既に師走中流東洋諸國の事務官は更なり印度西貢澳洲諸國及び太平洋群島なる殖民地の名を借りて歐米諸國の各政府より出品人の管理として委員を漸次に派遣なし出品人も日を追て京濱間に到着するより常なる歳暮と異にして金融誠に圓滑に商業社會の繁昌は古今に例もあらざるべし殊に愛國愛民の士は一日三秋の思ひにて國會議場の容子を見ばやと夜に日に東京するものありて府下無數の旅籠舎は内外客の宿泊にて早や春來ぬと思ふべし取分け麹町芝京橋の三區は旅客の充滿せる其の中心と見受らる 然はいへ外櫻田の大建築は未だ全く功を奏せず永田町に序を追て建設けたる官宅のみ白壁の色閃々たり此れを視彼れを想像るに明年第一期の開會は先年以來新聞紙の屢々報道なせるが如く元の工部大學校なる中堂を以て假議場に充らるゝ方正説なるべし斯く愛國の志士が焦思と其の趣きは異なれども其の本心を解部せんにには猶幾層の熱心を加へて慮ひを焦せる人あり并は殊人にあらずして貴族春川俊裔が最愛の貴女驪子なりけり逢見ぬ前より風采を慕ひてゝとたび輕咬に接せんものと思ひつゝ未だ見ぬ人を戀わたり心を空に葛城や久米ちの橋の中絶し曾に絶せぬ假數草根ざしの

堅く張りてにや青葉若葉の上野にて圖らず他に
見そめたる狀師中島博智の聞しに増して温雅
なる容姿にいと猶堪ぬ戀慕に面瘦てうちも
煩ふ程なれど世に勝れたる嚴格に家政を統る父
の大臣が常に眼を配り居て我が儘とは聊かも
行はれぬに檢束され心の悲哀を詠ふ術さへな
きに唯獨り憂を吞つ居たりしが幸ひなるかな
新築の落成したる祝ひにとて去る頃夜會を催
せし其の折中島博智と一室にまで同席して我が
海外に遊びたる見聞を擧げ此の夜思ひ寐にま
で結びたる夢が現か幻の後の先なる物語りに
彼方も心なきにしもあらぬ言の葉聞得たる大の
みならで眞實より出たる握手を施して後日を約
し別れしが其の折父の俊翁が硝子を隔て認めし
とて未だ緻密なる戀情の其の一點をも疎々に語
り盡さぬものをさへ怪しき契を籠めたる如く嚴
しき譴責にかくと言解かんと口重く後は外出
も自由を得ず翼を伸ぶる甲斐もなき身は籠禽の
餌を食むも今は懶く覺えつゝ憂が中にも憂とい
ふ秋を過しつ冬籠り木々の紅葉見るにつけ早晩
赤き我が簪を彼方に運ぶ機やある味氣なの世と
いへばえに岩うつ波の砕けては落る涙も玉霞
年さへ残り少なくなりける一日父なる春川伯は
横濱表へ出張して今宵は一宿すべしといひ母

なる夫人宴會に召されて尊きわたり何候し
留主には家令の嚴重に締りて居るを様々に賤し
拵へ親族に急用のある體になし唯車夫一人に腹
心なる侍婢のみを伴ひて間も然まで遠からぬ飯
田町なる中島が住居の前に車を駐め阿今に逢ふ
を名目に門を窺ふ出會頭佛蘭西革の靴音ゆか
しく革囊を片手に出來たる主人中島博智と面を
合せて互ひに會釋し
(博)何方かと存じましたら艶子さんでござい
ますか能うこそ入ッしやいました恰好お今
も宅に居りますマア此方へお這入なさい
(艶)オヤ誠ににお久しう……今日は何方へかお
出ましに成りますので御在ますか、鳥渡御近
所まで参りましたからお初にお尋ね申しまし
た(博)夫はマア能くお出で下さいました別に
差急ぐ用でも御在ませんから御遠慮には及び
ませんサアお這入なさいお伴の衆も此方へ何
か
ト世辭に碎けし中島が解たる詞を聴くにつけ思
ひは胸に彌増しつ交際場裏に事馴たる艶子も
今は般顔みて抄々しうは返答も得せず唯面はゆ
げに會釋して誘はるゝ儘うち通る茶の室の口よ
り妹阿今が立出で來つゝ夫れと見て俄かに奥
の客の房を掃ひ清めて柵を布き自ら此に東道

する饗應けも正首しく菓子を薦め茶を點し満面
笑を傾けて
(今)マア何もお珍しい御客様だこと眞個に能
く入ッしやいましたネエ、モウく狭い處で
仕方がございませぬヨ(艶)お今さん決してお
構ひ下さいませぬヨ、夫なたと又度々上る事
が出来ませんから(今)ナニ貴女お構ひ申した
くつても御口に合ふやうなものはいございませ
ん、是にお懲なすつては否ませんが例時は此
んなぢやア有ませぬヨオホ、ハ、(博)お今
さん其の茶は餘りひどいから釜が沸つてゐるだ
らう一服點てお出な(艶)イ、エモウ御無用に
なさいまし爾しては居られませんか(今)だ
つて貴女お初に入ッて下さつたんでござい
ますものマア御緩りなさいまし夫ぢやア御兄
いさん湯加減を見て参りませう
ト阿今は起て茶室の通ひ裙捌きさへ尋常に機
を開て出て往く後には二人對向ひ艶子は辭のあ
やさへも別々難たる戀慕の闇何れの道より説く
べきか初の山がみ迷ふより外に渠もなかりけり
元此の艶子は累世の塊門武侯の後園に養はれ
たる者にあらず父にて在する俊胤伯は中國邊の
國主の臣にて身分も輕き者なるが勤王黨の巨魁
となりて大いに維新の革命に力を盡せしのみな

らず数年の功績あるものとて天龍も亦一方ならず去る年貴族に列せられ榮爵をさへ賜はりけるなり艶子は新橋の狹斜なる愛妓の腹に孕りし者にて未だ胎内に在りける頃母俱に若干の黄金に其の身を贖はれ金春屋敷の新道より初めて瑤臺玉樓に産所を移して生れしなるが生育の期は儼然たる權門紳士の手に養はれ普通に通じれば高等なる教育をさへ受たる上父に隨ひ獨逸に赴き白雲の一女學校へ留學したる者なるゆゑ日本女流の上に比すれば教育の度は進歩したれど媚を顯じ色を衒ひ浮薄を常なる紅裙の母が意想を感ぜしにや性質多情に走り易く德行も亦高からず尙小學にある時より衣裳を評し男子を品し輕躁の風ありけるに歐洲文明諸國を見て専ら自由結婚の行はるゝを羨やみ思ひ我が邦男子と女子との間の懸隔殊に甚だしく男女七歳不同席の支那教育の行はるゝを痛く心に歎きつゝ男女の中を密接せば樂しき事の多かるべしと意に之れを念ひけるは即ち深意のある事にて彼の同権を主張しつ清探美德を有ちたる歐米女子が男子より尊信せらるゝ長を撰まず皮相を以て其の心事も男女の中の親しくて喃喃の語を公然と漏す者よと思へるなるべし否我が心の隠微なるより彼れをも斯くと認めしなるべし己れを以

て人を測るは特り此の貴女のみならねど互ひの心を印刷して世に刊行すると雖も唯一點の淫字てふものなき自由結婚も東洋女子の惡徳なる心に型を製造されなば忽ち自由の二好字は放恣となり淫逸と化し春書を露店に公賣すると同一般の結果を得べきか斯る不徳の分子より成立にける女子とも知らねば主人中島博智は夜會の折に同席して聊か意中を探り見るに歐洲風の教育ありて思想も日本女流には得難き價值のありと見え切りに自由結婚を唱道するは我が持説と符を合したる如くにて殊に風致の竒麗たる其の才智だも慧敏なる一生涯の伴侶となし僧老同穴を契るとも愧ぢなきよりは無量なる快樂あらんと思ひ居たれば歐洲風の交際を結びて若しも結婚の媒介を得ば畢生の苦樂を與に共にせんと心を計せし折柄とて仔細に舉動に注目しつ尊信の意を顯はして

(傳)其後は意外の御無沙汰を致しましたが大臣には定めて御慰忙で入ッしやいませう來年は實に日本の歴史に於て一大記念となるべき年となりましたから萬端何も御心痛と想像されますテ(豊)左様でございますヨ、妾輩は女の事で何にも存じませんけれど何だか内閣の御用だと申して毎晩十二時過までも祕書

官と二人で何か調物をして居りますが愈々國會でも開けましたら貴君なんざア定めて名譽のある事でございませうと存じまして妾輩までが待遠しいやうでございますヨ(傳)所詮私などは何をすることも出来ずまいが何にしる地方自治の制度を起して其の地方々々で一政務を所理して往くやうになれば自然に利益が上るやうに成て久しい間の不景氣も些たア救済の方が付きませう(豊)心持の合た人同志が銘々に何かをする様になりますと都合が好んでございませうネエ(傳)夫りやア爾ですとも何しても事の運びが早くなるから萬事に手が往届いて好結果を得る道理ですサ(豊)マア是が夫婦の中にしても親が干渉をしないで常人同志の好合た者を添して思通にさせると何しても家が圓く新ると言たやうなものでございますか(傳)左様々々、實に大なものです話頭漸く竿歩を進めて艶子が意中を徐ろに漏さんとする折も折下手に設けし瓦燈口を靜かに開きて恭やく阿今は抹茶を捧げ來つ艶子の前に薦むるに央口まで派出せし喃喃は空しく胸に下りて泡と消え行く樂燒の茶碗取り上げ啜干しつゝ

(豊) 誠に結好なお服加減でございます (今) 何だか解りはしませんが宜しければ今一服着上ませう (豊) 夫ぢやア濟ませんが (今) お安い事でございます (豊) 後で私にも一服たてゝ貰はうか (今) ハア畏まりました

何とか此の場を霎時なり遠ざけたさに好みもせぬ薄茶を獲て阿今をば思ふが儘に退けても一旦詞の納りては再び説くも新にて艶子は情味を呈すべき媒介もがなと見廻せど話頭を誘ひ出すべき器も容易見當ず兎角するうち先の程啜残したる煎茶茶碗の底に藏みし色を見て俄かに緒を發見しけん心嬉しく遽だしく今まで表を粧ひたる温藉都雅の優美を剥ぎ我が不質なる輕躁の色を乍ら顯はして

(豊) ア、爾々、珈琲、鋪々々々 (豊) 珈琲、鋪が何かしたんですか (豊) イ、エ、ホラ貴君も御存じでせう、アノー〇と言さして稍心着き俄かに顔を打振めて (豊) エー西洋で那の親達の許しを受けた男子の御友達と遊歩や何かに参ります時ネー、ソレアノー公園地の遠い處や何かでは能く市街の珈琲、鋪へ行て休息しながら種々なお話を何つたり申し上げたりして大勢のお友達衆と一緒に打解て遊ぶんでございますッてネエ (豊) 左様サ、一帯珈琲、鋪は

日本でいへば上野邊の茶店の高尙で便利に出て来るんですから言はば手輕なクラブ、ハウスといった様な形ですのサ (豊) 日本には無いものが求めぬのでマアソノ貴君が交したを見たやうな者でも互ひに親密な交際をして見て心に満足したら結婚の誓ひをして遣うと思召ししても世間體はあり便利を與へる媒介もなくツてチョイと困るぢやアございませんか (豊) 凡て物事は人に先んじて仕遂ようといふには何れ其の當時の多數から非難されて笑はれたり譏られたりするのは當然の事ですから卒先して自由結婚を行はうとすれば多少の譏譽は甘じて受なくツては成りますまい、私の精神は世評に頓着しない積りで

すから若し貴女も心に許し大臣もお許しなさる事なら折々靖國神社へ散歩に御同行を願ひませうし又夜會其の他へも歐羅巴の慣例通りに御同伴申して縱令人が鼻ツ垂しと申さうが鶏と申さうが夫んな事は更に顧みまいと思ひます

我が意に同じ戀人の意の中を聽よりも艶子は胸も蕨の橋を渡りて今はしも思ひの岸に着したる嬉しき情を細かに尙聞えんと語尾を續ぎ語を既に口頭まで運る折に又再び阿今に舌を押られ渴きは薄茶に醫すれども靴を隔て痒きを搔く思ひの最ど堪やらずで從來愛慕の切なりし阿今も此に中島と親く詞を交る度の昇騰するに隨ひて漸く妬き想ひに變じ斯再度まで價值ある談路を遮り隔られ遂には憎惡の心を生じつ彼方の最も柔順なるは却て奸佞讒諂の手段と見らるる迄に化し餘談を全く後會に譲り艶子は無形の身體を止て有形肉體のみ邸を指して還り往きぬ阿今は下婢と侶俱に客の去たる席上を取片付けて淨んと艶子が坐したる柵を上げれば下より出る一葉の洋紙のあるを訝しく手に把上て披きて觀ば英文を以て譯したるヴェキクトル・ヒュゴーの戀詩にして筆の尾りに二回と略記したるは言ずして其頭字に其人を知ては若も書生等の目に觸たらば駭かしく兄の榮譽を毀くる事のあらんも測られずと八重にも十重にも折たる儘帯の間へ腕と納め素知ぬ體に掃除を終りて兄の居室へと行て見ば火鉢の前に柱に凭れ髪を捻つて何事かを頻りに思ひ居る體なるに阿今は前に座を占めて

(今) お兄いさん貴兄は何いふお心持で入つてやいますか (豊) 何いふ心持とは (今) 妾が此んな事を申しましては生意氣だとお叱りなさいませうが歐羅巴人の皮を冠つた日本の下等

處女に貴兄は生涯を託さうといふ御了簡でございませうのか(傳)何故(今)何故ぢやアございませんやネ、皮相には優ない顔をして居ながら心のうちの卑劣い位見ツトモない者はございませまい、爾申しぢやア惡うございますけれども眞實其の人の知識とか徳行とかといふものに思ひを懸たのなら生涯を託しても宜ございませうが、少し日端が利く丈けに訝う先を見て彼の人なら人品もよし職業も望みがあるしいまでも立派な紳士だから身分も慕しいと云ふ處で一途に生涯の快樂を得ようと一つは鼻元思案一つは情慾一つは心慾此の三ツから成立た戀慕は誠に價値がないぢやアございませんか夫に自由結婚自由結婚と言て居ながら何かして自分の淫慾を遂ようと日本でもレヂーとか何とか言れるものが仕方に似合ない古風な手段をするやうでは面白くないだらうと妾は思ひますワ(傳)何だかきつぱり私にやア解せない(今)分るやうに申しませうか

ト平素無口が一心に辯ずる實證を博智の頭腦へ十分押印せぬ時書生が此へ入り來り機此方に手を突て

(書先生、唯今猿樂町の角田眞平さんから御

使てございます、先刻から御待申して居りますから御手透次第早速お出下さるやうに増島さんもお待なさつてお出なさるからと申して參りました(傳)左様かエ、ア、直に往くヨ、車夫に支度をさして呉んナ

第八回 梅一輪

一と昔といへる十年前の十月より日本全國の志士論客が指折撲へ足を蹠て頭を延いて待倦れつる二千五百五十年の曆をこくに啓き初めたる一月としも成にけり年毎の常として萎靡減せる人の氣も一夜を境に一回は活潑爽快を感ずるものにて都鄙遠近の差別なく門外堂裏に鮮衣を纏ひ喜悅を面に現して遊戲に奔走する士女等と俱に新しき笑を含みて語を語へる新年なるに今年とは同じ空ながら瑞氣洋洋々として滿地に瀾り祥雲幾々として中天を覆ふかと恠またれ祝賀の聲も歡呼の如く贈答の音物も佳色に富めり解知らぬ賤の身にも一新天地の今日始めて開闢されたる想ひを感じて瀕年うち續く不景氣も一時に脱却したるが如く愛たしと述る言の葉に枝を交へ萌芽を加へて俄かに繁茂せるものに似たりき東京の春や如何ならん此谷の松竹如何ならん都人士の氣は宛然に視官の感觸

迷かなれば滿腔の思想一洗して今や掌裏に寶玉を握りたる思ひやすべき將聽官の迅速なる爲め破鏡を擲つる感はあらずや分子は何れの點に向つて最も多くの物體を造るや將此の集點の物體が如何なる作用を爲さんとするや新聞紙の報道こそ斯る時の憑みなれ毎朝新聞の主筆記者たる山田文治先生には非常の眷顧を蒙けなうして日毎に新紙を恵まれるれども人工を以て排除しがたき雪に通路を遮られ彼のワット氏の賜のなる蒸氣の力も打勝難きかステベンソン氏が遺澤を仰ぐ汽車の通路はありながら月の中には幾回も運轉せざる事もあり現に舊臘三十日には雪漬に軌條を埋められ未だに通路の開かぬ由にて去年より絶て新聞を讀得ぬ身こそ愛たてけれ中島先生の許よりも久しく書信の達せぬに我が身を疎んじられけるか齋藤よりも一介の雁信なきは何事か意に隔る事あるにや婦女子なれども阿今どのは沈靜にして道理を看破る事の鋭敏なる貴女にて在せば屑ならぬ我れをも同窓友愛なる友の如くに思はれつるが今は如何に起臥し給ふ天の産たる國色あり玉を研げる顔才ありて清操淑徳水の如く得難き佳人の事なれば既に仇儂の約ありしか將合意を遂られしか京の便りの聞えぬさへ公情私情二つながら斷腸せざるこ

となきに妹阿雪は去年の冬森村權一郎と相通じて病たる老母を無情にも獨り残して亡命せる不孝不徳は忿るると心の遠くにあらねども常に婦道を守るべき教訓を垂れて和漢歐米樂ゆる貞節義烈女の傳記を詳さに讀んじさせ側ら淫逸赤愚なる婦女が終りの全からぬを説て膺懲おきつるに讀んじたるを打忘れて膺懲たりし害惡に心酔したるぞ情けなき孝女と言れて閨門にまで旌表されたる身でありながら身を過ししは如何ぞや一家の私事まで我が臂に合ねば胡てや公道の意を貫かぬも道理より自治の制度は緒を啓けど名のみ聞えて其の物の實に面接せざるこそ誠に遺憾の極みなれ嗚呼三千年に一遇せる此の新年に際會しながら我れのみ獨り憂愁に心緒の多事には紊れたる、噫我れにのみ天帝の此の快樂を吝み給ふぞと心裏切りに快々たる越山卓一が家宅を叩きて忽ち書柬の飛來したるを手速く把て披き見れば是も憂苦の材料なるべし戸長森村剛藏より至急の來車を待つとある唯簡單なる書箋なりけり卓一は唯端然と書箋を膝の上に敷伸べ首を垂れて片手を加へ忽ち例の持癖を出して太き眉を密接せしめうち擧めつゝ兩眼を堅く閉して口を締め沈黙したるは簡單なる此の一書箋の與へたる至大至重の問題を熟考すると

思はれたり三十分が程を経て漸く眼を開けども口も開かず眉も開かず最と不愉快なる顔色にて徐ら其の身を起したるが書箋を其の儘端の側に廣げて茶碗を押に置きしは父が歸宅の後に於て往きたる場所を知る爲めならん老母の方をうち見やれば能く熟睡してある體ゆゑ土間に下立ち藁靴を穿ちて笠を手に携へ出入の締を堅くして隣家といへど隔りたる家に赴き斯々と詞短かに仔細を告げ戸長役場へ赴きたるが役場の方へは用なき事か同じ家なる森村の勝手口より來意を通じ下婢を案内に藁靴を脱て足なる塵を拂ひ廊下傳ひに奥二階の梯の外まで往きたれば廳で二階の段階に音をさせつゝ下來たる女房が此方へ立出來つ常に變りし笑顔にて

(女)卓一どのか寒いのにと遠々の處へ御苦勞様サア、此方へお這人なさいアノ昨晚から東京の御客様がお泊りになりましてネ今日那も其の御方とお對話中だから暫時此處で溫つて居て下さいヨ、コレ、お茶を持て來ナ

前回の下覽子及び博智の言語中珈琲鋪の英語に鋪の字に對して shop なる假名を施したるは鋪なる字義に拘泥し虚心に記せし誤りにして這是 Coffee-house なる熟語あれば宜しく鋪と正すべし猶此外

にも如此誤謬のなきにあらねば看官宜しく御推讀を仰ぐになん

ト女房が世辭も耳差しく唯宜き程に應答をして火桶の上りに膝行寄り手を温むる卓一の聲を聞より二階にて主人森村剛藏が鳴す呼鈴二三點應と答へて炊婢は階梯の央を昇りしが乍ちにし降り來り主人が面會する旨を傳へも敢ず先に立ち東道する儘卓一は二階に昇りて一室に入れれば年の頃四十有餘の紳士姿たる客ありて傲然として上座なる柵の上に坐し居たり遙かに下つて森村は敬意を表する體なりしが今卓一の入來るを見るより例の獐惡なる眼光中に笑を交へて少しく席の上に進み

(剛)卓一、イヤ早速の入來で難有い其處では談話が出來ないから障子を締めてツツと此方へ寄たがい、火桶は己と相持にしよう年が明ても寒い事でモウ老人は大閉口だ病人は何ぢやな些とは宜い方か寒さが劇しいから定めて抗る事だらうのー(患)ヘイ難有うございませ

ナ例時何も同邊でございまして、エ、ー今日お招きに成ましたのは如何な事でございませしかども病人一人で御在ますから御用辨次第早速歸つて遣はしませんと藁餌にも差支ますが甚だ自由ケ間しくは御在ますれど何か御

ですから御明答を願ひませう大に應じて私も御確答を致すでせう、如何ですか如何ですか

ト鋭き語氣にて卓一が詰問するに昌好剛蔵當座の咎へに往き迫り今若し衆を怒らせては是まで心を小くして詰較したる事柄を擧て書辭に屬すべし可及的言語を卓うし其の甘心を得るには及じと口には大を謀合さねど日に通信の自由を得るより忽ち無聲の傳語機を架け心と心に契約を結びけるまゝ昌好は溫和の眉を動かして

(昌)成程御道理の御質問ですが同より一個人の契約上に職權を以て左右する理由も有ませんから唯春川俊翁が越山君に對して同等の御示談を遂るので有ませう(卓)夫れは然もあるべきことで詳細了解致しましたが然らば何ゆゑに直接の御談じはなさいませんぞ戸長の係はるべき筋もないのに故ら戸長を媒介人として威力の行はれ易いものに部理を委任なすつたのは私の最も不愉快を感ずる所です(昌)獨意を遂ての御詰論では甚だ辯明に苦しむが凡て物は便利に就くのが常態であるから一面譲らない人に突然話をするよりは一村内の事に與る戸長其人に託せば事の運びも速かでせうと想像して勿論是が

例のない事ならば嫌疑を犯して何も爲はしないけれど從來東京の大臣が土地を買ふに戸長を依頼する事は慣例であるから則ち是なる森村氏に委託したのですが(卓)夫は至つて宜しくない慣例ですな、元來戸長といふ者は何が職掌でありますか森村さん(剛)何がたア何だ戸長はその一足先の事をソレ詰り昔日の名主だ(卓)名主とはエ(剛)庄屋サ(卓)庄屋とはエ(剛)分らんぢやアないか村の世話役だ世話役だから何事に依らず世話をするのサ(卓)誰が世話をして呉れると頼んだのですネ(剛)困るなアお主には、斯ういふ職掌を設けて令公が命じたのだ(卓)夫なら斯いふ事まで世話をしろといふ御命令がありませんか(剛)ナニく何だツて(卓)イ、エサ土地賣買の公證をするのは御職掌でもありませんが相互ひの間に賣う買うといふ豫備の契約に立入る御職權は有ますまい今體戸長などといふ者は人民の公撰に依て村中の税金を取次たり戸籍帳を預つて出入の世話をしたり地券狀や家屋を公けに證明したりして村内の利益を保護し公邊の庶務を便じて縣廳へ對するまでの總代人の外は有ません官撰戸長でも元々此性質に相違はあるまいと思ひます

から土地所有の自由權利といふ者は貴君が十分に保護をして下さるのが至當でせう然るに人の權利内に立入て夫は不都合の是は成らぬと職權を利用して自由を妨げられるのは如何な御精神であるか春川伯の御委託があつて森村剛蔵といふ一個人が此のお世話をなさるのなら買方即ち貴君が客にて賣方の我々が主であつて見れば買たいといふ願望心を以て賣うと賣るまいと十分の權利のある我々へ下手から出て示談をすべきが至當でせう夫に何ぞや榮々しく役場へ呼付て彼の地面を貴様が持て居ちやア向うの田地が困るから是非賣て仕舞とか何とかと求めて此方が妨害でもしたやうに命令を下されるのは取も直さず土地所有の權利を奪ふといふ者でせう法律の境を踏ない以上は自由の消滅する者では有ませんから良民として貴君に夫な強奪を受ける理由には有ません法律を犯した罪人すらも公判以前には保釋の自由もなり公延に於る言論の自由も持て居るのは既に今日に始まつた事で有りませんから貴君方も御存じの事でせう然れば此の賣買の御談話は改めて承まはる事として今日はお暇を戴いた方が宜しからうと存じます(剛)お主のやうに爾理窟ばツかり言ち

やア困るだらうぢやアないかマア怒らないで
拜借物もあるものだから慈愛な話しをネエ
水野様（昌誠に御道理の事のみで實に恐縮
千萬併し森村氏を一個人として拝者は中人に
立てたのだから先生、其お積りで願ひたいも
のです（昌）又申すやうでございすが其の拜
借金は其有の村債も同様な譯で何も地所に
關係を及ぼすものではありますまい效力の
ないものを以て賣買の機關に利用させては困
ります夫は貴君も御存じの通り小川の鮭漁を
盛んにしようといふので村内共同して拜借
したものですから返償の途も別に立て居るぢ
やア有ませんか（剛）オ、爾だノー（昌）イヤ
決して利用する譯ぢやアないのサ
此の談判の結局如何を未だ窺ひ知り得ざるう
ち俄かに門外騷がしければ剛藏速くも南表の
硝子障子の内よりして見れば此程賣買の示談を
概略遂置たる農民們的何事をか罵り狂うて押來
るに心に怖るゝ事のありけん顔色宛然土の如
く俄かに阿諛の色を粧ひ言を卑し卓一に説諭
を難むに背きもならず是を立端に卓一は暇を告
げて立出る門の外には農民が今にも闖入なさん
と見るより卓一大手を擴げ無理に一先づ
引上げさせぬ

第九回 花に啼鳥

寒霜利風に破られて香雪影疎なる時花の幽芳
を遠く誘ひて金衣公子は遠船を離れ枝に衣笠を
縋んとす 苔石衣鮮やかにして下萌出づる若草
も纖手に摘るゝを待ち顔に見ゆめり窓外の呉竹
綠更に深うして猗々として銀色に映じ檐頭の
古松翠藍を新しうして亭々として紅葉を照ら
す後園の春色觀良や完からんとするに三五
の素蛾光を研ぎて淡霞の羅衣に娟を洩し色を
も香をも細かに寫せり造化が密作の丹青には魏
武の子孫も生面を覆はん文彩風流の秀逸なる誰
か此を能く描き出さん天筆の畫圖斯の如き春川
伯が園に臨める三層閣の中樓に美善を盡せる一
室あり暖爐の火は暖温を呈して適度の熱を斷え
ず造くり米國製の委見鏡は一點として曇りな
く常に嬌面を寫すが如し龍動製の競馬時機は古
將軍の立像に模し暖爐の上邊に勇威を顯はす
唐木彫の卓子は刀痕無數の雅致を存して昂昂絨
の天鵝絨に浮出したる薔薇の花も卓距となる
匂ひなし黒檀の椅子に足眞翁が伎倆を吝まず毫
畫したるは品位の最も高尚にして露西亞革の
滑かなる座臺の覆も直なからん大小三個の窓
の内には瑞典國の淑女が手に成る白紗を普ね

く掲波し印度木の書架の上には獨逸製の金工花
瓶に室咲なる機花を活けたり羅馬美術の石工像
は亞非利加礦石の上に坐し土佐繪の軸は脂煙
畫の額と對して壁に懸れり大凡我が地球上に
此の書齋の横の方には方圓間ばかりなる縁の如
きものありて花籃を一體に敷詰たるは雨の爲に
妨げられて庭を逍遙し能はぬ時運動すべき場所
なるべし斯く壯麗なる玉樓に居て常に愉快に
讀書する主は誰かと尋ねるに伯が最愛の令嬢
なる艶子が身を處く房にぞありける 常住坐臥
に斯ばかり愉快を與へられながら心の慾は是
を以て未だ飽べき度に達せぬにや獨り房に在る
時は氣の凝結れたる者の如く鬱々として娛しま
ず總ての事に傾きか當には好みて繕きたる書
物も篋に投入れて塵をも拂へることあらで時々
詩を書し歌を詠み僅に心を行りながら夫れさ
へ多くは引裂て故紙簞底に埋めるのみ今宵も夜
食の終ると其の儘此の一室に垂籠て景色愛た
き月下の梅の影をも眺むる氣色なく斜めに椅子
に倚りたるのみ筆をも探らず書をも啓かず目眩
きまでに燦爛たる瓦斯の火影に壁上なる半身
像の額を睨めて屢々吐息をつき出す其の吐く息
を分析して仔細に原素を調見んに戀情といふ

令密の作用に成立ちたるより外はあらじ艶子は獨り脂烟畫の顔をつく／＼打目成てあゝ我ながら斯ばかり迷ふは宿世の因縁か忘れんと思へば生僧に思ひの最どます鏡うつして見たわ我が胸を彼方は知のやしら眞弓はる來る毎に梅が香を慕ひて遠く谷の戸を出て訪ふ鳥もあるものを偶には東風の音信をし給ふとて身に高き香をりを散す事はあるまじ誰が詠じけん「見染すてあらまし物をから衣たつ名のみして着る夜なきかな」歌の心も身にぞ知る斯く難而らば始めより難面くなしもし給はゞ思ひ斷つべきものなるを愁じひ物を思はする優しき言の葉を添へて獨り枯れよとし給へる君が心をいく度かい田の浦に立かへるなみだの間に汲分けて見れども見えぬ山の井の底の心を腕にも告げ給ひなば人知れぬ愛を去る夜やありけんを難面もあらず然ればとて優しくもなく身を責て髻兒の弄ぶ蛇の活も得やらず死にもせで憂を見よとは何事ぞ身は守る人に隔られ通ひの關の閉つるとも心は常に君が側離るゝ時のあらなくに君は夢にも醒はさずや我が思ひ寐の夢にだも解けて語らせ給はざる情の剛きに釣舟のこがれ渡るぞ切なかる名のみは世にもたち花の香を占む節のなからずば君がならびの池にこそ身を投つとも聞せめと亂

れ苦しき愛思ひの早晩口の外に出で(騷)マア何したら中鳥さんの様に人を苦しませる事が出来るだらう御自分も自由結婚の先鞭者になるから貴女さへ御承知なら折々靖國神社へでも遊歩に御同道申しませうと仰しやつて置ながら唯の一度も誘ひに来て下すつた事はないし餘りだからお尋ね申して見ると御留守だと云て阿今さんとばツかり遊んで來るのは眞個にお嫌ひなさるのやら何だやら些とも譯が分りやアしないワ、男らしくもないお方だと恨む程猶忘られないからイヤ／＼爾でもない御商賣のお忙しい方だから此方でも思ふ通りにヤア往かないだらう萬一すると今晩邊りはお出なさるかも知れないと思つては毎晩々々お化粧をしたり種々として待て居るのに影さへ見えないのは眞個に餘りだよ、事に寄ると那なに體裁のいゝ事は言て居てもお今さんの口からヤアおてんばだとか氣が多いとか陰口をして否がらしたのぢやアないか知らん考へりやア考へる程何だか心細くなるばかりだワ「玉の緒のたえて短かき命もてとし月長き戀もする哉」と紀の貫之が詠んだのも斯んな事だか知らん、エ、何だかじれツたく成た

ト轉思ひの加はりて恨みにからむ獨り言聽く人としては扁額と薨馬時辰の裝飾なる立像とまた大理石の置物の他にあらざして是等三人の人と雖も形は生るが如くなるも元人工に成れるを以て精神魂魄ともにあらねば五官の働きあるにもあらず聽くべき鼓膜も備へねば言ふべき舌をも持ざるより傳へて漏るゝ事あらじと思ひの外に密閉して聲の通路を遮斷せる硝子の窓の隙を趨りつ一秒時間に千九百九十尺の速きに到達したりけり斯ても窓外餘地多く石を疊みし疊壁ありて聲の通路を打返すべき備へ十分堅固なるより傳へて人の耳に入る間道とてあらざりしが時なる哉俊風は食後の運動を試みばやとて今しも此なる運動場を徐かに散歩なし居たる虚心の耳に感ずる獨語は呷暗の聲とも殊にして怨氣を含める音吐なるゆる思はず耳を欲てゝ窓に片眩凭れつゝ彼の菅公が詩を追懷し月輝を眺め暗雪を観て聽くとはなしに聽く父の咫尺の間にあるぞとは心も着かず見えやらぬ透明體の玻璃窓ながら夜は内部のみ光力劇しく外部よりして透入すべき光線極めて微弱なるより形をさへも見る能はず人なき事よと自ら信じてまた繰返す芋環のはしく出る唧ぐさ(騷)人の迷ひといふものは考へりやア考へる

程段々種々な事が疊まつて来るものだ、眞個に此の脂燭畫を見ても腹が立り忘れもしない去年此の家の新築が出来た祝ひに夜會を開いて日頃交際のある人を招だ折だつたがおきさんと一緒に内を歩行て此の書齋で休息しながら浮世話の序に中島さんの事を聴て見るとお世辭だか何だか知らないけれど中島さんも妾の事を何だかと思つてお出なさるとお言であつたから誰にも何なにか嬉しかつたらう夫から中島さんと見懸たから直と珈琲を持て行て言憎いのを我慢してお話しをして見るとお今さんの仰しやつた通り種々な英國の自由結婚のお話しをなすつて交際をしようの何のと體裁のいゝ事ばツかり仰しやつたけれど今と成ちやア夫も依然當座のお世辭だツたか知らん彼の時は何ういふもんかお今が可愛くつて眞個の妹でも此んなに可愛いものぢやアなからうと思つて居たのに今ぢやア思ひ出してモウ／＼憎らしくつて腹が立て仕やうが有りやアしないヨ人の心といふものは何して此んなに迷ひ易いものか自分ながら何考へても分らなくなつた

と言も終らず歎息する風情を逐一認めたる俊胤伯は赫然と怒氣滿面に顯はれしも何をか尋思し

替けん再び色を改めて故さら笑を含みつゝ戸を叩き開きて室内に入り来る父を見るよりも艶子は椅子を離れしまゝ傍の隅にかい遣りたゝ椅子の上覆ひ取りて應打拂ひ適宜の場所へ据うるを取て腰うち掛け常に變らぬ面色にて

(俊何ぢやナ何か文章でも出来たか此の節は一向學校へも往かないやうだが何が調物でも始めたかエ(艶イ、エ此節は何だか勝れませんで唯風來々とはばかりして居ります、御父様貴君は未だお召替もなさいませんが何方へかまたお越に成りますので御在ますか(俊何アに過刻永田町まで行て歸つたばかりだから着替もせなんだのサ、時に艶子其方に内密話しをして置んでは成らぬ事があるが夫れとも節(夫人の名なり(こでも聞いたか(艶イ、エ未だ御母様は何とも仰しやいません(俊左様か、ナニ外の話してもないが實は其方もモウ年輪が年輪だが何時までもお嬢さんでも置れまいから良縁を見て結婚させなくては成らんがさて何も世間には多いけれども孰れも吟味をして見ると長し知しには困り切るマア己の精神を安んじる其方も一生を託して苦しくないと思ふ者でなくつては到底結果を見ることは出来ないものであるぢやに依て己

も此の點には種々に心痛をして一昨年以來逢ふ人毎に死て注意をして居つたが漸く是ならばと思ふ人を採り得たヨ、ウムマア何やら斯やら適當な人物を發見した、アト儼々として喜色を顯はし得意顔なる父が詞に艶子は驚き一と方ならず縱令父君母上の御心にしも適へりてと狭布の細布胸合ぬ人に我が身が百年の苦樂を背で記すべき人は不孝といはゞ云へ淫婦と誹謗を爲さばなせ一たび心に誓ひたる自由の婚儀を先んじて結ばず空しく己むべきと既に抗拒なさんと半口まで出たるが又素々と考ふるに斯くまで慕ひ斯まで恨む中島氏の精神は愈よ我を厭へるか又愛憐の情あるか仔細に未だ心腹を洞觀すべき顯微鏡を持たざる上は一概に爭ひし後其の人に非難られなば如何せん今まで經驗なしたりし事實に照して彼の心は此方に思ひ居る其の誠心の一分子だも腦裏に寫りてあらざるものと假定めんには面當にも父が許せし其人と契りて彼方を辱しめんか如何せまじと岐多き戀の山路に踏迷ひ指南を發見すに苦慮したり俊胤伯は臍を定めて艶子の色の變動を仔細に觀察なし居たるが直ちに語を繼ぎ語りも出ず該の室内の片隅へ設け付けたる傳話器の側に立寄り何事かを音信しつゝ又元の椅子にう

ち掛け和かき面に少しく忿怒を帯びて

(後)親の撰んだ舞は其方の心に落ちないか否

とも應とも返辭をしないで唯もじ／＼として

居るのは恥かしいのかは知らんが、マア能く

心に分別をして聴とした答へをしナ(豊大は

モウ御父様の仰しやる事でございませうから背

くの何のと言ふ事はございませうけれど未だ

モ少し修業を致したうございませうから(後)馬

鹿ア言ふナ縦令二年でも三年でも洋行までさ

せたからモウ婦人には澤山だよし又嫁した上

にても志ざしさへあるならば幾干でも修業は

出来るリ大概程といふものが有つたものだ

ト稍尊長の権力にて壓倒せんとする折から今

傳話機にて呼ばれたる夫人節子は此時に始めて

茲へ入来り二人の談話の客子に依て了得に粹の

果なれば大概夫れと推測しつ 艶子の側に香匣を

乗せたる丸き椅子を取り二人の中に座を占つ

(節 何のお話しかと存ましたらアノ此娘の御

縁談でございませうか誰しも若い時には此んな

お話を聞くと嬉しいのが二分怖いのが三分

恥かしいのが五分で胸はツカリどき／＼する

ものですか貴夫のやうに仰しやつちやアお

答へが出来やアしませぬ最少と穆りと言て

聴せなさいヨ(後)イハ夫は慶應年代の娘の

子の事だ今時の娘が何で恥かしいの何のとい

ふ事を知るものか餘り歐羅巴思想にばかり趨

つて居るから些と謹慎の情が發するやうに支

那傳來の婦道を演説して聞せよう第一婦人に

は三從、五不取七去、三不去、四德といふもの

がある大載禮に之れを解説して三從とは家に

在ては父に従ひ人に適ては夫に従ひ夫死して

は子に従ふをいひ五不取とは逆家の子は取

らず亂家の子は取らず世に刑人あるは取らず

世に惡疾あるは取らず父を喪ふの長子は取

らずをいふなり七去とは父母に順ならざるは

去る子なきは去る淫なるは去る妬なるは去る

惡疾あるは去る多言なるは去る竊盜なるは去

るをいふとあるが曲禮全經といふ本に何尙

遷といふ人が説をなして曰ふに夫れ不順淫

妬多言竊盜の五者は自ら之れを爲す出すべき

や疑ひなし子なきと惡疾とは命なり義として

去る處在るも禮として宜く處するあるべし

故に禮に四十にして子なきは出て居る異にす

之と居を専らにせず以て嗣續を廣むるなり惡

疾も亦出して獨居せしめ更に娶つて以て宗廟

を承く故に皆去と云ふ也と記してあるが此ん

な窮屈な教育を受けた事がなければ宜い氣に成

て夫んな我が儘をいふのだらう又三不去とは

取る所あつて歸する所なきは去らず與に三年

の喪を更ふるは去らず前に貧賤にして後に富

貴なるは去らずといふ三つにて四德とは周禮

禮記等に所謂言は辭今德は貞順、功は絲麻、

容は婉婉なるを言つたものだ是は婦人の美德

を言つたもので前の三從五不取七去とは全く反

對のものだが西洋風の婦道でも少し自由があ

るのと窮屈なのとの相違許りで大した齟齬が

して居る氣遣はあるまい全權左様な我儘をい

ふのは教育が嚴格でなかつたからだ是からは

其方の精神を父母に順なるやう貞順の德を供

へるやうに教育をし直して造らう、節も左様

心得る不埒千萬な娘ぢやアないか

ト常に變りて支那風の説を頻りに採用なし不平

の色を顯はして最と長々と説附ける父が詞を聞

くよりも内部の煩悶一と方ならず外の刺激は鼓

膜の外にて残らず之れを打卻て一部要句も引

入れざれば父の言語を咀嚼せる間も更にあら

して心緒最も多岐に彷徨ひ然るにても亦彼の君

は眞實如何なる精神を持てるゝものに戰とだに風

の音づれし給はゞ今親あたり父上の尋ねに逢ふ

も右とでも左となりとも答へんに答へもならぬ

我が身こそ電氣に四肢を蘿まれし人と異なるこ

となけれ孰れの岸に寄らんとも定め難たる棚な

し小舟漕ぐ權絶て漂泊る身とはなしつる彼の君の難面心ぞ憂てかる思ひに死ねとや斯くまで身を窘しむる彼の人に逢うて恨みも聞え上げ愈々始めの言の葉の偽りならば佛蘭西に得て行はるゝ決闘をも試みばやと一向に閉がる胸を知る父は益々怒りの度を増して忽ち忿氣色に出て言語の速度を非常に加へつ

(後)艶々、其の即答が出来ないか成程夫れは出来ないうだらう中島如き輕薄男子に執心する根性では所詮先の認めがない明日からは唯今申した支那教育を斷行するから、簡も甘い心を出すな(節)夫も人の噂ですから(後)慥かな證左は上げて置た慈愛の道が夫れぢやア造はア(豊)證據と仰しやるのは(節)何した譯でございますユ、眞個に此の娘には困らせるヨト母の語よりも意中の人を指名したりし父が心を測量しかねて艶子の憂慮は猶一層の憂慮を増して坐に怨みを進める時も幸ひ本夜宿直の家扶が此の室へ入り來りて小腰を屈め慇懃に(家)御前、唯今新潟から電報が參りました

第十回 思ひの沫雪

土地賣買の委任を帶て新潟縣下に出張中なる家従水野昌好より春川伯に送りたる電報文の如

何なるかは識者の知らんと欲する所また本篇の大切な最要點と之れを爲して其の實況を寫し出さんは必的の談條なるべし抑も春川が買んとて百方力を盡し居る三俣村の田地といへるは當村一の沃土にして字を神田といふ土地なるが小川の流れ中を流れて水利極めて宜きのみならず如何なる旱魃の年と雖も常に水の潤るゝ事なく如何なる洪水の時と雖も苗を洗ひ流さるゝことなく土質の肥饒なる爲めにも登は他に三倍して穗に穂を舉ねる事もなし天然自然の良田なれば誰いふとなく神田と稱へて竟に字となりけるなり此の良田は幸ひにして豪農の手に握られず其の往昔より細民の僅に分ちて持傳へしかば年頃重なる悪年を學難き奇貨とし豪族なる彼の森村剛藏は種々の手段を運して此の利を壟斷せんものをとを試みたれども細民等は死力を盡して之れを守り繼令家をば失ふとも此の良田に離れては生て露命を繋ぐの術なく死して祖先に合する面なしと固く信じて動かさるより森村も亦此の良田を所有すること能はざれば是のみ他人の物となせるを遺憾に思ひ居たりけり殊に客歲洪水の氾濫たりし其の折にも月長が所有の田地は悉皆水に洗はれけれども神田に限りて肥料をさへ更に減することあらぬより益々溼を

こゝに垂れ頻りに我が手に落すべき奇策もがなと考ふるうち水害地方の視察として巡回ありし春川伯が此の良田を見ると均しく所望の念の萌しけれども容易に手放し賣却すべき氣色なければ森村が近來開きし新田の神田に接續したる高地を求めて家産とせられたり此の折三俣一村の人民中より森村の紹介を以て春川伯の私金若干を拜借なし小川の鮭獲の備へとしたるが則ち這般相互ひの間に一の葛藤を興へる其礎とはなりけるなり斯く森村は最初より自己の手中に握らんと計りし慾を遂得ざりし其の遺憾こそ忽ちに變じて今は細民に彼の沃田を分持するゝを如く口惜く思ひ立ち遂に春川伯の爲めに力を盡す心となり先づ智慧淺きものよりして大臣の威を假用る權力をもて榮ねは訓印すべき運びとなり是より水野と同席にて彼の卓一を説諭さば如何に思慮あり學問ある卓一なりとも高貴の所望遺賢をすべき通辭に窮して必ず成就致すべし卓一既に承諾したれば自餘の愚民は求めずして賣んと競ひ來るべしと我が精神に比較べて其の談判に着手しに却て彼を激さしめ再度の策の浮はざる折先に概略承諾せる農民の押寄來るを莫越機會と卓一に鎮撫を託して自らは額を鳩め頭を疾しめ最後の策を講じ居たり此

の時より四月を経たる四月中旬の頃にぞある
 今年は雪の深くして未だ消んとも爲し初めぬ越
 山方に村中の口听と呼ぶ十四五人居座裏の中に
 圍坐して

(甲)何でもはア己が心にヤアお役人様の爲ッ
 しやる事が落ねえヨ、マア考へても見さッせ
 え此の正月の事だツたが此の卓一様の理窟
 ウ言て居さッしやる間に己達の田地へはア無
 闇と標杭を打ッしやるから其の書記様に聞て
 見ると未だ地券の書替はしねえが約定書に
 調印したからにヤアモウ賣買の約束は出来た
 もんだ、夫だアから木杭イ立て測量するだア
 と言ッしヤツたからの一(乙)如何にも爾だア
 よ、其の譯聞べエと思つて押掛て往く處へ卓
 一様が來て止さッしやるから外の人なら知ン
 ねえ事お前様の言ッしやる事だに依て一と先
 はア引上げやしたヨ(丙)お前様にも種々マ
 ア御苦勞の一掛申して聞て貰へば那んちふ事
 だ承知をするやうに規定に判の一捺と言ッし
 やるから戸長どのの仰しやる事を背いちやア
 悪かんべエと思ひやして名前の下へ判の一捺
 たを約定したア餘りの事だ(丁)其處では何で
 も是やア戸長どんが騙しなされたのに違えね
 えと思つて日頃は御恩のねえでもねえが背に

腹は代られねえとお前さんにお願ひ申して手
 筈を着て貰ひ申しましたがイヤア呆れた向
 うの強談是ちやア中々明ねえからと長岡まで
 出向て裁判沙汰にも成た處で十のものなら九
 分九厘まで此方の勝利と思ひの外に(己)何し
 てはア間違つたやら卓一様の言立は通らずに
 此方の負公事に成たのは申作どのの言ふ通り
 己が胸にも符にも落ねえのよ(庚)モウ斯成ち
 やア仕方がねえから戸長野郎を擲き殺して
 己達も死んぢまやア夫で市が榮えるといふも
 のだ(辛)一同揃つてモウ一度戸長さんが處へ
 押かけべエか(壬)卓一様お前様の考へちやア
 何なものだネ、吾彼處の田地がなくなつちや
 ア何せ生ても居られねえ是より外に分別はね
 えの一皆の衆(癸)爾だともく
 ト詞を揃へて一同に然るべしとぞ賛成なしける
 卓一は唯默然と腕拱きも居たりしが客氣に逸る
 農夫們的平素の優柔不斷なる懦弱の氣象に引
 替へし憤怒の氣激烈にて大事を起し策まじき
 血相なるに卓一は若し急躁過激の徒の煽動した
 るものにはあらずや果して先祖傳來の神田を人
 に奪はれたる怨恨の今は堪難く勢ひ爰に迫りし
 ものにや我れとても亦許低手段に陥りたるを他
 に見て重きを逃るゝ心はあらじ一村落の全土を

舉げ全權を委し森村に任ずる害は疾にも知れる
 を何とて躊躇なすべきぞ次第に依らば詮やうあ
 りと心に尋思を一決して滿座の人を一々に見渡
 しながら咳一咳しつ

(辛)始審の訴訟で敗たからモウ何する事も出
 來まいと思はれるのも無理はなけれどマア
 篤り私の智も開分て貰はねば成りません、治
 安裁判で不調に成た時にも一同へ申し上げて
 置たと思つたが私は一體政治學を學んだので
 法律の方は専門でないから込入た法理は分ら
 ないけれど條理には二つあらう筈がないから
 此の訴訟に敗を取る氣遣ひはなからうと信じ
 た處が何した譯だか始審廷で原告の請求相立
 ずといふ裁判を下されたのは實に失當の裁判
 だらうと不服に思はれるから御一同の御存意
 を承まつた上で東京へ行て控訴をしよう
 と私は考へて居るのです今もお談話申し上げ
 る通り私は畑が違ふから今日日本でも幾人とい
 ふ指折株の代言士で中島博士といふ先生には
 先年御世話を受けた事もあるから此の先生にお
 願ひ申して見たらば必ず此方の勝利と成るは
 知れた事だし又此の柏崎の豪家の息子で齋
 藤孝といふ人は法科大学の生徒で至つて熱意
 にして居るから能く之れにも縋つて見ようと

思つて居ますが併し是をするには入費も係る事だから篤りと分別をして貰はなくツちやア否ん、縱令マア何いふ事があらうとも爾暴な事をしちやア正理があらうとも非分に落るは當然ゆゑ一撥がましく押駆て往くの殺して此方も死ぬのと大んな過激な事を必ず言ないやうに……是から控訴院で敗ようとも大審院といふものがあるから此方の權利を恢復するまでは不屈不撓の精神を奮起して正々堂々と道理を楯に取つて戦つて貰はなくツでは困ります何な事があらうとも一旦私に委任をしたものだから自分達は一切知らない面をさへして居て下されば宜しい忘れても和暴な事をしない様に呉々も頼みましたぞや、夫さへ委細御承知なら直に控訴の手續に着手モウ明日だらうが今たらうが談話が纏まり次第に満足致しませう篤り一考へして下さい(甲)イヤ成程騒ぐのは悪かんべえ是りやア何でも卓一様にお委せ申すより外はねえの(乙)乗かゝつた船だから入費は幾千かゝらうとも控訴とやらをして貰ひ土地を取るより外はねえ(丙)已達も同意だから今夜のうちに入費を集めて總代人にお願ひ申す事にするのが何よりだらうよ(乙)御承知をして下されば私が所望があ

るといふものです(普)夫ぢやア已達は村を廻つて入費を集めて來ますべえ(乙)爾極つたら私も直と支度をして置きませうト物利かなる卓一が説諭に服せし農民們は挨拶さへも勿々に暇乞ひして立歸りしかば卓一も亦東京へ旅行をなすべく準備を整へ書類を調べなどする程に雪消も近き時候にも異變は免かれ得ざるものにや昨日も今日も中天に結んで解けぬ寒雲を渡れて降來る沫雪は泡とし消て氷りたる深雪が上に積れるを拂はで置かば家潰れんと稍怪かゝる空うち隙め卓一は先づ納屋に行き雪掻取り出し屋根に昇りて積れる雪を集めては拂ひ下せど霏々として小歇もあらぬ大雪の拂ひし上にまた積りて果しなき間に日も暮れつ遠く望めば家々の燈火雪に映するより何時まで屋根にや立盡さん明日の朝こそ復搔めと思ひ止まり下來れば早總代の甲乙が集めし金と總代の連署をしたる委任狀とを携へ來りて手廻與するを受納め然らば明朝拂曉に發足なさんと誓言するに然らば村より甲乙が轎車を備へて迎へんと談條のこゝに一結して別れ行く後見送りつ卓一はまた年老し父と病ひに猶臥せる母に概略仔細を語りて夜餉の膳を告別の盃に替へ俱侶に食畢りて臥床を設け夜を種々に語り明せば生憎に夜

は明易く背戸屋の鶏鳴を告れば遠く香華院に寐覺を訪へる鐘の音が枕を兎角に安からしめず父母の目覺ぬ其の先に起て結束をせんものと會を離れ廊の方へ徐かに起て往きたりし

南翠まをす予不幸にして天性の痼疾なるに頃日又た宿病發して精神甚だ不快なれば隨つて筆も滯滯勝にて我ながら倦厭の思ひあるに嘸かに看客の讀苦しう思し給はん然ればとて休筆もなり難ければ爰時が程を忍ばせ給はんことを乞ふ老母は病ひに寐られぬ儘はや卓一が起出て廁に往きしを夫れと覺れど身體自由ならざれば自ら起て朝餉の準備何となくして遣りたきも氣のみ焦躁で起臥さへ從意ならぬ身はいと心細く敦圀のせらるゝなるべし漸くにして作左衛門を呼覺しつゝ卓一が廁に行きたる事を告るに作左衛門は忙はしく衾を離れてかい搔る熾熾はあだに折るゝのみ火の發さぬも氣の焦れて竈の下を探らんと出會頭に廁より歸る伴の卓一に鉢合せして目と鼻の間よりこそ彼らに無形の火光を放ちけれ軀て火を點け湯をも沸して朝餉も全く果たれば旅装ひもせんものをと昨日よりして洗ひ置たる股引脚半の足擦へして書類と金子をひと纏めに肌へ貼と結び着け母の臥したる破屏風

の外に形を正しつゝ

(母) 母さん、御病人の貴母をお老年の親父さん獨りにお委せ申して東京へ参りますのは何だか不孝をする様で心には安じませんけれども是は私事といふではなし言は村中の大事に係はつた事ですから聽て私が望みを達して歸村するのを楽しみに何ぞマア御氣永に御養生をなすつて下さいまし是が縣下で済む事なら惡々東京まで参りはしませんけれど此の新潟は東京控訴訟院第二局の管轄ですから何でも出京を要する事に立至つたので殊にまた大審院へ上告する様な事にでも成ると是非とも東京でなければ辨じませんから少々この處の御不自由を御免なすつて下さいまし親父さんには何とも恐れ入りましたけれど村の衆も彼の通り申して居りますから悪いやうにも致しますまい永い事もあるまいと思ひますから家の事も母公さんの事も恐れ入りますが宜しうお願い申します(作) 夫れに心配は入らない事だ言は村中の大事件だからお前が此でひと奮發して物の見事に勝て見ろ夫れこそ大した評判にならうヨ己は夫れを楽しみにして居るから内の事や母親の事には氣を置かないで一心に盡力をしな、ア、物議と言れりやア

矢張夫れ丈の心配をせにやアなるまい此の寒いのに御苦勞千萬だ能く煩はないやうに氣を付けなヨ(卓) 難有うございます東京へさへ参りますれば困る事は有りませんモシ母親さんマア御大事になさいまし(母) オ、卓一モウ往くのか日頃からお前は孝行が過ると言れる様だから親父さんの事も苦勞であらうしました業病で死切れない迄の事も案じるだらうが今も親父さんの言ツしやる通りナアに村の衆の爲だから親を棄ても立派なものだ、ヨ一合點かエ、併しマア他國へ出たら村に居る格には往くまいから何でも物事を控へ目にして人に憎まれたり酷められない様に身を謹むのが肝要だ(作) コレ(卓) 婆阿どん何を言ツしやるのだ初旅でもしやアしましし東京へは永らく行て居て此の節柄の事は何も彼も辨へて居る物議だ、なアんの己達が言つて聞せる事があるものか夫な事は案じなんなよ(母) オ、爾であつたネエ、年を取ても子供の様に學者へ無學の母が講釋はコリヤお釋迦に説法だ、夫はさうと卓一ヤお前東京へ行たならアノソレお雪が事をのーマア道々も氣をつけて……(作) 大事な前途に何をいふのだ親を棄て逃るやうな不孝者は子とは思はぬ先でも親とは思

ふまいに夫れを承ねて何にするのだ(母) お前さんは一徹だから爾言ツしやるのは無理はなけれど那の權一郎どのに勾引された娘は定めて苦勞をして居るだらうと……(卓) 不孝な奴ではございますが只た一人しかない妹ですから私もマア氣を着けて成行き丈でも認めたいものでございます、夫なに御苦勞をなすつては御身體の毒に成ますから氣を樂に持てお出なさいまし

ト須臾の間も思めつ破れ毛布を絲櫛の代りに纏ひ菅笠の紐の切しを小糸にて繕ふ間もなく表の方(農) 結束が宜ければ参りませう轎車を轎て迎ひに参りました、村の衆もお寺の前で見送りをすると言て待て居ますぞ、雪も些とは降休んだから此の間に早くト言ふ聲に惜し別れを裂れつゝ挨拶さへも勿々に毛織子の傘を杖代り草鞋の紐を結びもあへず急ぎ表へ立出れば来れよと供へし轎車の上を拂うて乗移り輓れ行く人見送る人また一しきり降る雪に互ひの面を隔られはや遠さがる山抱に往違うたる一人の男が卓一なりと見るよりも直ちに道を引返して宿ある方に到りしが是ぞ則ち水野にして控訴の爲めに卓一が上京した

るを親たり認めて電報したるなりけり

第十一回 馬酔樹の陰

野艸暖かに萌出て百花漸く春を報じ緑陽の塘に烟り立迷ひ紅桃の原に飄の底を顛にする豊陽の霽氣都門に充滿して士女の遊心稍繁忙ならんとす東京首府は市區改正の工を全く奏するに至らねば公園の地勢にはあらねども芝といひ愛宕といひ星ヶ岡といひ忍ヶ岡といひ飛鳥山といひ浅草といひ富ヶ岡といへるも皆中央の市街を離れ其他勞働の骨を休め逍遙の清を弄せばんとする八景園の小丘は數里の外にあり龜ヶ岡赤城牛天神は山の手に在りて路遠く靖國神社の神苑は稍中心に近しと雖も市區よりは歩を向るに慚し神田明神湯島天神高樓閣の觀あるも僅かに神田下谷の客に筈を曳くに便なるのみ根岸の里橋場の洋隅田堤の勝區あるも故らに風光を採るべし木下川といひ龜戸といひ皆往復の時間を消費す晚餐の箸を投じて新鮮の清氣を呼吸し過度の運動に終日の勞苦を醫して健康を保全するに格當せるは獨り濱町三丁目の地先なる大川中流の中洲町なり此の遊園は三箇に分れて北南中央の三區あり中央に在るは廣くして南北はかな卵形をなせり今を距る四年前則ち二

千五百四十七年(明治二十年)に築造全く落成せるにて昔の花は最も薄けれども松籟の聲は琴を弾するが如く潺湲は歌を唄ふに似たり日本流の豪麗術と歐洲流の造園術とを折衷して築きたれば雅に拘んで歩行を妨ることなく俗に流れて眺望を失ふことなし殊に中流の小天地自然に汚塵を拂ひ去りて最も精神を爽快ならしむ桃に櫻に咲初めて草花蒲公英種々に地を彩ると聞しより日曜日の休暇を幸ひ狀師中島博智は龍動留學以來の學友增島六一郎氏を濱町に訪ひ其の歸るさに唯だ一人中洲町に散步して先づ中央の遊園を彼方此方と逍遙なし巍然と建たる記念碑を眺めて文を讀了り其の盤片手を鐵柵に凭せて景色を觀望しつゝ氣を養ひてありける處に向うの方より毛織の絹に小鳥の細毛を彩りたる美々しき洋服を着飾りて周圍の花にて纏ひたる帽子を戴き來る貴女あり風俗格好を見るよりも中島急に色動きて襟の飾りを改めなどし頻りに形を繕ふは意中の人の來りしなるべし疑て彼の貴女近づき來るを先づ此方より帽子を脱して敬禮するを認め得にけん貴女は満面笑を含み少しく顔に紅を注ぎて足を非常に疾め愛嬌最も匂やかに纖手を出し中島の出す手と堅く握り合ひ二三度動かし手を解きて

(豊) オヤマアお珍しい、眞個に久しくお目に懸りませんでございましたネ(博智) 其の後は意外の御無音を致しました過日島波承まはれば何だか御病氣ださうでしたがモウ判然と御快復ですか、ハ、ア成程、併しマア夫は何より結構でした、而して今日は何方へ、お伴も連ずにお一人の御散歩ですか(豊エ、實は少々用事がございまして貴君のお宅へ伺ひました處濱町の方へお出になつて今日は殊に寄るとお今さんが小學校の生徒を連れて中洲の遊園へお出になつたから其處へ行て御一緒に御歸んなさるかも知れないといふ事でしたから私も未だ一度も參つた事がございせんから見物がたってお今さんをお尋ね申してお話を致して置かうと存じまして夫れ故參つたので御在ましたが宜い都合にお目に懸りまして此んな(博) ア、爾でしたか夫は失禮を致しました何か妹に御用ですか(豊イ、エ貴君に(博) 夫れぢやア是から歸宅して伺ひませうか(豊) なアに夫んなに今が今といふ程の事でございませんが實は父が少々貴君に御鑑定を願ひたいと申して居りましたが愈々お呼立申すのも未だ事の極りもしないうちに餘まり廉立て宜しくないから其内にはお出な

さるだらうと心待にお待申して居りましたから入らざる事の様ではございますが、アノ妾も少々お目に懸つて伺ひたい事もあります。鳥渡上つて御都合を窺つたらと存じまして幸ひ築地の教會まで参りますので夫れ故上つたんでございましたヨ(博鑑定と仰しやるのは訴訟上の事でございませう、夫んなら素より職業上の事ですから御通知さへ下すつたら参堂しましたものを遽々貴女のお出向では實に恐縮致しました(豊夫人な事は何でも宜うございませうが未だ直に御歸宅ではございませう。若し御散歩をなさいますなら御同行は願はれませんか(博)エー、何せモウ少々散歩をしたいと存じますから御同行を致しませうとも、併し貴女が御否でせう(豊)またそんなお人の悪い北の方なる遊園には中島阿今が小學校の幼年生徒を引率れて運動の爲め園内を生徒と俱に遊戯なしつゝ他日は無心に見ゆれども肉を割き心肝を出して之を寫眞せんには森羅万象限りなき妄想中の多数を制すは情慾といふ物なるべし謹慎の性業くして軌く外より誘導する刺戟に心を動かさざれども人の知識を慕の念慮は幼少よりの薰陶と兄博智が海外より歸り來て歐

米の貴女が所行を詳に聞き常に英米貴婦人の側に在て一般の志想を意中に映し來りしかば先づ良縁を得るまでに我が一身を生涯まで保つに足るべき財産を造らるものと學校の聘に應じて教師となり宅に在りても毛絲を網みレースを綴りなどしては貯蓄に心を用ゆるは全く架空の準備にあらず我れのみ疾く心に許す良人あるが所以なりき开を誰れるやと尋ねるに曩に父母の災厄に能く素志を貫くを得て中道にして學を棄て故郷へ空しく歸りたる彼の越山卓一なり骨高く色黒く鼻低くして眼鋭き美男子部類の外にある彼れ卓一を如何なれば常に念の園に置かを撰擇せんには彼の知識の穎敏にして自から意氣の投合するあると性質最も老實にて規約を守るに銳ければ彼れに因て百年の苦樂を託すは父母を安んじ兄にも心を勞せず最も一家の和親を得て心に樂き事あるを自ら期したるものにして彼の皮相を見て心を動かす淫聲卑褻の少女とは同日の論にあらず阿今は袂を分ちてより忘るゝ暇のあらざれば思ひ出さん術もなく四六時中に心のみ彼方の側に付らして貞操美節を呈すれども同身同體ならぬ以上は彼方の心も亦常に來りて阿今を保護するや否やは容易斷定し難し斯く淑徳ある貴女なれ

ば生徒の尊信非常に厚く野に咲く花を摘みては生徒に之れを分ち與へて其の問答をさせるなど遊戯のうちにも自から植物學を講究させ傍ら修身道徳を教へて餘念もあらざりしに突然後の方よりして
(考)お嬢さん、中島先生の御令妹、御存じですか
ト詞をかくる人あるに阿今は驚き、回顧れば是ぞ例の粗忽者なる齋藤孝が此に來りて阿今を見よるより我れ獨り承知をなして問かけたるなり阿今は少しく笑ひを含みて
(今)オヤ誰殿かと存じましたら齋藤さんで御在ましたか不意にお聲をおかけなすつたもんですから眞個に喫驚致しましたよ、些とも存じませんで失禮を御免下さいまし(孝)イヤ、僕の方が大失敬相替らずですからマア平に御海容を……、エーモウ御宅へ上りましたか(今)誰殿でございませうエ(考)誰殿ぢやアないソレ例の惡徳野郎、ウムー賊だ、アノ泥棒先生です(今)オホ、ハ、何ぞを仰しやると存じましたら何ぞ兄に依頼された賊の辯護の事でございませう(考)アにサ何も困つた○ト少しく考へて眞面目になり(考)恐縮、恐縮實に濟ません恐れ入た決して御立腹な

すツちヤア石ませんヨ實に何も：（今）何でございますネエ其様にお誤んなさる事がありませんものか（考）マア貴女周章ないで仔細を御聴下さい

ト「ボツケット」より取り出せしハンカチーフに汗を拭ひ小さき洋紙を把り出して時計の飾に附屬しある鉛筆を以て何をか認ため阿今に示して少しく落付き

（考）コゝ、此の人物がお宅へ窺ひましたか

（今）イ、エ那の夫んなら越山さんは御上京に成たんでございますか、些とも夫んな事は存じませんでしたが而して何方へお出なさるんでございますエ（考）上りませんか、愈々怪しい（今）何故エ（考）何處は何でも先生の御宅へは直と上らなくツちやす成らないのに、耐いふ奴ですからモウだめだ、愈々モウ腐敗して仕舞た、到底彼奴は否ませんヨ必ず欺かれちやア否ませんから御忠告を申します（今）何いふ譯だか存じませんが貴君の處へは何日お出になりましたエ（考）彼ン畜生が何で僕ン處へ

來られるのですか幾干面の皮が千枚張でも夫りやア出來ますまい若し酒徒々々と遁て來りやア猶以て仕方が有ません實に殘念だ何も口惜い（今）夫れちやア貴君は日外アノ鐵道馬車の中で窺つた事を眞實だと思召して爾仰しやるんでございますネ（考）固より僕は深く信じないけれども彼れが之れを確信せしめるから何も仕方が有ません、彼れの所行が愈々夫れに對つて信實であるといふ證明をする以上は何も夫と此方にも信ぜざるを得ずでせう（今）妾は越山さんの辯護に立たうございますネエ（考）否々、夫な馬鹿な事ト我れを忘れて高聲にて打消しながらも心着きけん苟にも日本帝國の大學生徒が貴女に對つて禮儀も盡さず相互ひに談話をするか何ぞの如く餘りといへば輕忽なりきと思ひ返して形容を遠だしくも繕ひつ聊か威儀を改ためて

（考）實に失敬を申し上げました貴女が幾干辯護をして遣らうと思召しても渠は必ず報酬を致さんで有ませう、イヤ致さぬばかりなら未だしも宜けれ貴女の辯護を恐らくは破壊するであらう、實に僕は一女を失ひました（今）一體マア何いふ譯でございませうネエ、日外も申し上ました通り毎朝新聞などでは山田さんの周遊紀のうちに「北越の避村にて驚くべき美玉を發見せり誰れか野に遺棄なし」と云ふものぞ余は今日にして實に其の言の妄誕なるを知得するの幸福を得たりき頸城郡三俣

村は二國峠の山麓に在りて恰も別に天地を造せるが如く土民を叩いて事を問へば其の史學上に於て著るしき實驗を與ふべしと雖も進んで文明の談を爲さんには木石に對して道を踏ぬると相距の遠きにあらざるなり斯の如き僻邑にして斯の如き美玉あり余豈一驚を喫せざるを得んや」とて大變に越山さんの事を賞て書て有りましたが妾やア何考へても那の方が何ばお困なすツたからと云て夫んな不正な事をなさりはしないだらうと存じますヨ（考）成アる程爾ですかなア、何も不思議だ……

ト兩人未だ疑心を散ぜず越山卓一が精神を善惡二説の間に置き孰れの方に最も多き重量あるかを測り得ざるに時しも中島博智は艶々とも中央の遊園よりして北國に來りて阿今と藤藤が談話を概略聞取りつ側へに餘念もあらずして戯ぶれ遊ぶ子供の手を把り後の方より阿今の裾を引せば阿今は驚いて首を速くも背後に向け（今）何をおしだヨ、オヤお兄いさんでございますか眞個に惡戯だ事、オヤ〱艶子さんお珍しく御散歩でございますか（艶）久しくお目に懸りませんでしたネエ妾も此の節些とも英語會へ参りませんが慈善會の事は何とか

お話でも出ますか (今イ、エ未だ (豊さう
(今) 齋藤さん 兄にも判斷をして貰ひませうか
ネエ (孝然ればサ、先づ先生戦近は充分御缺
割勝で久しく人権論の講義が打絶て居ります
が此節は餘程御繁忙でございますか (博) 中心
會へ力を盡さんと云て穂積君や鳩山君が頻りに
逢ふと責るけれど私だつても一個の商賈
がある身體だから學者やお役人様のやうには
往かないサ 併し首唱者の一人であつて見れば
不深切にしようといふ譯ではないヨ (孝切て
隔月にヤア御出席を願ひます夫でないとい切
角の會を誠に氣乗が薄くなつて困りますすか
ら (博) 來月は勤めて出席しよう (今) お兄い
さん 越山さんが御出京に成つたさうでござ
いますヨ (博) ナニ越山が來た、何處でお逢だ
つたネ (孝) 妾も今齋藤さんに其のお話しを
伺つて居る處ですよ

小談話のうちに何事やらん 豊子は越山卓一の
名を同座が親し氣に呼べるを聴て不審に堪へ獨
り無言の境に居て子供の方を表となし聴くとは
なしに聞居れば今我が父の敵手となし訴訟中
なる越山に疑ふ節もあらざるのみか其人こそは
去年の四月共同競馬の二日目に山田文治へ財
囊を與へて心の不平なるまゝ去て上野を散歩す
る折櫻臺にて樹を一つに物語りをせし書生な
らんと想像したるを一語交句に慥め來たれば彼
の人こそ貴族の繁榮中央の權力強きを心に憂
ひて地方分権の自治制度を渴望なせる人物なれ
ば斯る異主義を懷ける者に近かせては我が爲な
らずと爰に一個の慾情が懸慕と怨意に加はりて
離間をなさんと試みる念慮を少しく張たりし
が此の一群と俱に南の園を逍遙すべしと促さ
るゝに否みもならず中島兄妹に孝を加へ四人に
後は生徒にて外部を廻り南園をうち連立ちて遊
歩なしつゝ小高き丘に設けたる六角堂の茶亭に
至りて暫らく足を休めんと子供に菓子を與へな
どして珈琲を命じ四方八方の雑話に笑ひを催し
たるも豊子は獨り娛しまず離間なすべき術策
を心に脚色すると覺えて他人の話しをしかゝ
る毎に生返事して居たりしに手段の心に成就
したるか突然撲地と膝を拍たる響きに孝が片手
に持居し珈琲の器の手を離れて膝に墜せば
(孝) ア大變々々大變を造ちやつた (豊) オヤ何
致しませう濟ません御免遊ばして……
時に三時の休憩が製煉場の汽笛の音ビュー

第十二回

北に行雁

貧富の懸隔の著明なるは獨り地方と中央首府と

のみにあらず齊しく帝都のうちにして少しく市
區を遠ざければ忽ち貧民群をなして一枚の食に
一月五人の寒を凌ぎ一椀の飯に三日の餓を喫ぐ
なる無慾の疆界を見ることがあり彼の全世界に
比類なき英の首都龍動の如きすら夕陽斜にかゝ
る時去つて小巷に足を容るれば忽ち一種名狀
すべからざる臭氣來つて鼻を駭かし眼を放つて
之れを望めば矮小不潔の陋屋に棲み眼四み髭
に光澤なく顔に垢つきて瘦たる男の長方形の
柱に凭りて卷煙を喫しながら瞳を險の上部に
着けて往來人を諦視するあり家屋は一室に過ず
して窓高く室内暗く粗造の棚を設けたる外寢臺
と覺しき物もなく衾に代ふるものもなし妻は惡
聲を出して良夫を罵れば唇を齧へて之れを
責め兒は餓に泣き母は寒を訴ふること月々相連
なりて鯨波を擧るが如く誤つて歩を容るゝさへ
身體の健康を害するに常に斯る陋巷に住居たら
んには所謂天命を全うすること能はざるべしと
思はるゝに猶龍動橋の下に到れば穴居する貧民
ありて常に市街の下水を採り遺財を集めて糊口
を送る者あり此の輩には陰然巨萬の富を重る
者ありと雖も斯る者は實に萬中の一なりと合衆
國の博士が實見して書述したるに見たれば別て
東京の如き都府の幅員こそ世界第三の都府なれ

繁昌の點に至りては龍動の千分一に達しかぬる
京なれば中央市區にすら貧民の雜居する場所あ
るに去て芝の新網若くは下谷山崎町萬年町な
どいへる處に至りて見れば邊陲僻土にも多くあ
るまじき慘憺の状を見るを得べし下谷萬年町と
聞えしは前に述たる如くにて府下の著明の貧市
なるに又此の裏屋に歩を容るれば棟割長屋左右
に分れて九尺二間を一户となし干破たる上總戸
は半朽たる閣に在りて開閉最も難澁を極めり
九尺三尺の落間には下流の板橋に遺りて蟲を
生ずるに便なるべく手の折たる手桶はあれども
水瓶と覺しきも見えねば米炊桶と見ゆるもなく
唯手づくねの土竈に缺たる土鍋一個あるのみ
上櫃に障子はあれども風を凌ぐべき紙とても
なし四疊半の破畳は全く座敷を覆ふに足らず
床の藁の馴れたるが僅かに三疊餘りあり戸棚と
いふものもあらねば怪しき夜の物などは皆割板
の棚を吊て樂ゆる物を之れに乗せたり米櫃とい
ふ物あらざして古藁簍と小箱あるのみ今戸焼の
寧丸火鉢とかいふものに口の缺たる土瓶をかけ
たるが是とても亦満足ならず火鉢は荒縄もて鉢
巻をなし土瓶は寒飯の背薬を貼りたり其の外
器といへるは茶碗と箸と缺碗に足の取れたる膳
あると燗りたる手ランプとのみ行く家として總

て皆斯の如くならぬはあらず此の境界に住め
る者は多く家に在ることなく辻講釋に出るもあ
り説教祭文に法螺を吹くありチヨボクレ坊主に
カツボレ踊門附を嚮くあり假色を買ふあり或
は立場に至りて鐵棒米を借り紙屑を買ふ者あり
或ひは賣捌所に至りて半纏と鈴とを借り今日
新聞を賣歩くあり又は香具師となりて流行を追
ふ者あり又は行者に變じて癡人を逐はすあり
ランプの毀れホヤの毀れフラスコ徳利のお拂ひ
を買ふあれば其字や煙管のすげ替と呼ぶくあり
男は男に相應しき業を爲なみ女は力に堪得る
だけけの事をなす子供と雖も容易く手を休むる者
はあらず此のうち一個の親分ありて之を貸元と
稱し商賣の道具衣類を貸與へて其損料に口を糊
す這是多く表店に住て見せかけの稼業をなせ
るが下谷にては山崎町に一軒と此萬年町に一
軒あるのみ其次にて自分に道具を所持する者を
自前と稱へて此の群の長者たり日暮きあり夜
稼あり甲乙の月行事を定め十戸に一個の釜を
備へて交番に飯を炊ぐ此の預りより釣瓶の元締
にて皆月行事の務めなり中には炊ぐべき飯な
くして燒芋に飯を液ぎ温飽蕎麥に腹を肥すもあ
り汁も賣り茶を販ぐ家ありて者實は總て三厘よ
りあり飯の如きも一握五厘一兩八厘と皆少し

づつ商ひて貧民の需用には充るなり人界にして
確も大都會の市内なるに斯の如き處あらんと
は思ひもかけぬ事なべし此の裏店の井の側に
畫稼して歸りたる女房二人に井戸脇の主人を
併せて三人が世間話しの聲高く

(甲)チヨイとお前聞てお哭か内の宿破位方の
付ねえブン太郎はありやアしないヨ妾は知ら
ねえ事だが昨日の料銀が拂へねえッて貸元の
旦那が今日は何にも貸て呉ないのサ呆れ返る
ぢやアねえか夫でサ平氣だといふ事ヨ(乙)だ
ッてお前ン處のは男がいゝから我慢をおしよ
(甲)オヤ否だ事お前宜きやア上ようヨ(乙)イ
イエサお前は宜い御亭主を持てるから傳倅だ
那れぢやア稼き榮があるだらうッて皆なで
評判をして居るのヨ此の小兒せえねえなら
眞個に妾はお前ン處のを泥棒するにヨ(甲)オ
ヤ否だマア、お前夫人に欲きやア勝手に盗
みねえ(乙)ト口ぢやア言ても可愛い證據は離
離稼いだ身銀を出してソレ見ねえ清酒を買
て來るぢやアねえか(甲)お前の口にやア恐れる
ヨ妾なんざア夫なでもねえがアノ自前のお雪
さんを見ねえ毎日々々一緒に歩行て歸つて來
るとお前をしたり肩腰を揉だりして何なにか
享主孝行だらうヨ(丙)獨身の居るめえで人

面白くもねえ亭主の噂がモウ宜い加減に宜し
て貰ひてえ。(乙)オヤ願人の丙六さんお前さ
んにア濟なかつたネエ。(甲)夫れでも斑犬がお
傍に居るから夫れでお前一對にならアネ。(丙)
畜生阿魔め酷い事を言やアがあるア併しマ
ア聴きねえアノ奥の自前は己が田舎を廻つて
るうち儘かに逢た旦那衆だヨ、ニ、旦那衆が乞
食に成たが可笑いと、マア聞ねえ斯いふ譯だ、
那れは越後の頸城郡三俣村といふ處の大金
持で、エー何てたツけー、オ、爾だ爾だ森村
森村其の森村の長男の権一郎といふ人に違
えなし、エ、能く知たか振をすると、己ア諸國
を大概廻つてるだらうちやアねえか、何いふ
譯で那んなお大盡の息が此んな乞食の境
界へ落たのかと思つて聞て見たのヨ、エ、餘計
なお世話だ、イヤ爾でねえサ斯して井戸番を
して居りやア長屋中の人の身元位を知つて居
なくツちやア成ねえ、夫からマア段々と聞て
見ると實に色戀様恐えものはねえヨ、ウム、那
の内儀さんのお雪坊のー、那の嬢に大層惚込
だ處から種々とマア金に明して張込んだと思
ひなせえ處が向うが大の孝行者と来て居るか
ら何してソウ楞呂ツかには出来ねえので病
人の母公に餘計な實義を盡したり生物讖の兄

貴に上手を使つたり出来る丈の方便も廻し
たが餘つ程馬鹿堅い娘と見えて訝な目元もし
て見せねえから底で今度はずを答て引提ひと
宗旨を替へ親父と兄貴が鯉取りに行た留守
を幸えと何だか甘く欺らかして表へ那の嬢を
件出したまゝ宅へも歸らず夜棧車を雇つて三
國峠を一步飛び直ぐに汽車にて一笛の音をば
後にぞ見棄つて東京投て來たりけりだ。〇ト
祭文の調子にて言ふ。(甲)お手許へは廻りませ
んか。(乙)マア冷却さずに聴てお出ヨ。(丙)處
げ片々は田舎にはかり煩つて居たゴッゴツの
頑固娘だらう夫れに肝腎な本尊様も村に居
ちやア生意氣な口も聞たらうが一天萬乗の君
の筆轡下へ來ちやア何は月長の作でも依然様
鳥は椋鳥だから元々旅費の澤山あるんちやア
なし懷中に在つた小遣だけを杖とも杖とも
して來た事だから何する事も出来なく成たが
夫かと言て目指す女が打説たといふではなし
鳥渡でも隙があつたら手紙を書て田舎へ出さ
う夫も成らざア駈出て警察署なり派出所な
りへ駈込うといふ權幕だから勤めや雇に出よ
うといふ都合にも往かず夫かと言て脱走して
來た者が國へ無心を言て造るといふ譯にも往
ないから友達を頼んで少しばかりの金を借出

して貰つた上宿屋住居で那の嬢の番人サ、エ、
何に、鼻の下の長さ加減が知れないと、大き
に爾だが夫れ程辛抱したからにやア旅の空の
事ぢやアあるシ女も外に便がないから定めし
甘く出来さうなもんだのに何しても娘の心
が金石よりも堅いと來ちやア眞逆に強姦も出
來めえだらうシ常時お雪さんの尻の番をし
て風來々々遊んで暮して居たが代も殆ど危
く成たので三四年前にジャツパン木村屋の勉
強のパンくんと夫婦連の洋服パン屋の請しを
聞て越後名物の越の雪の製造を知てるので夫
に文明パンといふパンを交てお雪さんに三
絃を弾せ越後の通分を躍ては市中を賣歩行た
のが元で到々此の島へ落て來たのだとヨ、だ
からアノ亭主孝行は些とも難有い事はないの
サ。(甲)オヤ那の人がキエ。(乙)オヤ、願人の
親父さんの仕方話しを聞てるうちに日がタツ
ブリと暮て仕舞たヨ宿帳が歸つてまたお權突
頂戴かクサくするヨ。(甲)ドレ妾も早く歸
らう。(丙)ドリヤ癖色の夜稼と出懸ようか。
ト長家の女房は我が家へ己が勝手に歸り行く
後に願人丙六も夜食の膳をかい造て閉閉苦し
き上總戸を毀すが如く引閉て裏道俵ひに貸元の
臺所より銅鑪をかり受け出行く路次にて往合ふ

人と影

(雪) オヤ丙六さんモウ夜稼ですか大層御精が
出ますネエ (丙) イヤ麵包屋さんの内儀さん唯
今お仕舞でございますか (權親父) さん夜晝
稼いちやア金の置場が有ますまい (丙) 何んな
預つて上げませうかアハ、ハ、ハ、
ト世辭を土産に裏表別れてこそは往にけれ
お雪は先に我が家の戸口かけ銀外して内と外
心を籠し世辭愛嬌も慣るれば忤れて兩隣家向
う三軒一様に
(雪) お隣のお内儀さん難有うございますとお向
うの御隣居さん唯今歸りました留主に誰か参
りはしませんでしたか、オヤさう、誠に毎度
お世話様難有う……
トいふは心に憑むなる若しや田舎の人なりと尋
ねて來なば覺悟の爪にかゝりし我が身の上を語
りもしたし告もして故郷に還る雁にだも言傳
遣らん所存ぞと邪推ながらに量り知り權一郎は
苦々しく面膨らして睨つけつゝ
(權) 非人小家を見たやうな此んな宅へ誰が参
ねて來るものか餘計な世辭やア入らねえや早
く明りでも着やアがれ (雪) 夫なにッ、慥食に
仰しやらなくッても宜いちやアございません
か (權) 何！ 許々言ねえで早くしろエ、お饒舌

何魔め(ま)ハイ／＼畏まりました
 ト身を脱れ得る夫までは寄らず障らず身體を
 全うするに及ことあらじと伶俐(れいれい)心に思ひ諦
 め帶の間に所持したる燐燐(れんれん)を出して手ランプの
 灯を點し家のうちを掃ひ清めて夕膳(ゆふぜん)の支度(しだ)をす
 れば權一郎は衣服を脱ぎ簀を拂ひ前かき合せて
 座に直るをお雪は心得(こころえ)徳利を振試むるに今朝
 買し酒にはあれど何故か僅に一杯二杯より外に
 なければ不審立ち何故なるを知るに由なく我れ
 誤つて齷せしか但しは鼠の悪戯なるか何にても
 あれ此の事の知れなばまたも喧しからんに聊
 か今日の時へあれば一趨りして買來らんと袖に
 徳利を打握ひは戸の外に立出るを權一郎は逸
 くも認めて直ちに心頭何れの時も去ることあら
 ん疑惑(ぎわく)心に這は郵便を投ぜん爲めに人の氣息を
 伺ひて出往く者と覺えたり憎さも憎しと咄嗟(とつさ)の
 間に始めは慕ひ次には迷ひ中途にして恨みに
 生じ今は却て憎惡を生ぜし卑見(ひけん)の腦裏に貪絲
 れば大いに怒つて聲鋭く

(權)ヤイ拓 雪人にも隔らずに何處へ往く料だ
ナニ、酒を^あ買^いに往く、酒を^あ買^いなら酒を^あ買^いふで
何故^{なんぜ}判^はん^だと斷^つ言^うて往^いか^ねえ^んだ、第一^{だいいち}近^き所^{ところ}へ
買^あ掛^かりを^かね^られ^ちやア後^{あと}で造^{つく}ち^や着^つか^ねえ^んだ
らうぢやねえか、酒がな^きやア己^{おれ}が買^あつて來^きら

ア徳利を渡しやアがれ(等)夫んなに酷い事を
なさらなくツても宜いぢやア有ませんか何も
買がかりをすると言やアしませんシ妾に少し
お錢があるから夫れで調へて參らうと思つた
のできやね、惡きやアモウく誤りますから
外聞の悪い高聲大けを廢て下さい(權)コ
リヤア己の地解だエ誰が大きな聲をしちやア
悪いと言たんだ何だ妾にお錢があるから調
へようと思ひましたお錢があるならあるやう
に何で已に出さねえんだ貯蓄錢をしやアがる
なア何か丁簡があるンだナ、よし今に歸
つて糺明して遣るから其所を一すでも動きや
アがるナ

言葉の寫眞はありとし、聞ど心のうちを寫眞して三國の山の彼方まで照せるものあらんには我が潔白を見すべきに愁ひ皮膚に覆はれて見えぬ心の甲斐もなき此の薄命を如何せんと思ひの涙に案じさへ綾なき折しも歸り來る權一郎が荒々しく戸を引開けて内に入り

(權) サア烟をしる早くしう遅々すると打擲るぞ

ト何が心に障りしか邪慳の詞も柳に流し命ずるまゝに調理して烟の加減を試みつゝむる酒を一口飲み干し

(權) お雪手前は酒を飲むナ(雪)何で妾が……

(權) 飲ねえ事があるものか一體此の烟のしツぶりが氣に食ねえ酒を飲もしねえものに此の鹽梅が分るものケエ、夫が證據にやア今朝買た酒のなく成たのが何より明白だ飲なら飲とぶちまける酒を呑みやアしやアしねえ(雪)だツても妾は(權)飲み隠しをするにやア及ばぬサア茶碗で一杯遣れ、ナニ、否だと此ん畜生夫まで人を馬鹿にするか

ト持たる筆を投打にお雪は除んと身を揺るを直ちに髻を取て押へ拳を堅め殿つ手に絶るを突飛し非難の噪ぎの折しもあれ密行巡査の斯く聞き表を叩いて

(選) オイ御用だ此を明ろくエ、何したんだ

第十三回 雲の架橋

取刷局の汽笛長く聲を洩らして柱上の時辰機午下四點を報ず庭前の紅緑色稍深うして庭腐の炊烟一層熾んに昇る頃麹町區土手三番町なる伯爵春川大臣が玄關口に軋音を傳へて忽ち取次の電信を報ず内玄關の受付に控へし家從見習は遠だしく扉を開いて出迎ふれば儼然たる一個の紳士「ボツケット」より名刺を出して主公に面謁を請ひたしとあり春川伯爵は先日より政治上の累ひに腦部の病ひを惹起せしとて内閣へも出る事なく人に面談も謝絶して百事を擧て祕書官に委ね閑散病ひを養へども一種の病ひは醫するに由なく常に身體を圍繞して腦部を刺戟すると見えたり家從見習の其の人は刺を見るよりも謝絶をなすべき顔色少しく顯れたるが急に何をか點頭つゝ最と鄭重に會釋をして中にも美麗の椅子を携み這を其の人に薦めし儘奥の方へと這入りけるが三分時間が程にして再び來りて東道をするに紳士は導く方に至りて庭に向たる廊下に出るに此には旨を受たるにや艶子が美々しき被布を纏ひて嬌面一體笑を領みつ腮を屈め

て迎ふるにぞ紳士は進んで握手を施し(傳)今日は誠に結構なお天氣で……過日は存外の失敬を致しました妹からも宜しく(傳)先日は何も失敬ばかり致しまして……今日はまたお繁忙い處を悪くお呼立申しまして恐れ入りました能くマア早速に入しつて下さいましたナエ(傳)主人も御事務の事ですから今夜にも上らうと質は存じて居ましたが生憎夜分は種々取調物があるので御約束の時刻とは少々違ひましたけれど歸宅をしては些と出かねるかも知れんと存じましたから控訴院の用を仕舞と直に參邸致しましたが御主人は未だ御退閣に成ませんですか(傳)イ、エ父は此間から少し勝れませんが引籠つて居りますから丁度宜い都合でございました(傳)オヤ、御病氣で……夫は何も……併し大してお悪いのでは御在ませんか(傳)イ、エ大した事でも御在ませんが相替らず腦病でございまして誠に氣むづかしう困りますヨ(傳)併し御休みに成て居るといふ程でもございませぬか(傳)ハイ唯だ風來々々と致して居りますので……夫ゆゑ甚だ失禮ではございますが唯今鳥渡面丈洗つてお目に掛ると申して居ますから暫時此で御休息を願ひます、夫は爾と

中島さんアノー此の頃に貴君方の御組合で夜會があると申す噂が新聞に出て居りましたが、その御催しは新聞の通でございませうか（博）アに立派なソワレでも有ませんけれど追々國會の開期も近寄て参りますから大分地方から人も出ましたので歐米風といふ程でも有りませんがマア男女打混じて極陸しい會合をして見よう先づ都會の人と地方の人が入交つて互ひに種々の話しをし合たら第一目下の輿論となつて居る中央集權と地方分權との可否善惡に就ても大いに得る所がありませうし夫れにまた私共の商賣上に就ても目に見えぬ利益があるに違ひないといふ發企の精神で近日廣告をしようといふ運びにまで纏りました（豊）夫ぢやア御當日はお今さんをお同伴なさるンでせうネエ、大ともまた外に「Lover」がございまして其の方をお連なさるンでございませうかト笑ひの中より洩したる一語のうちに皮相より量り知られぬ眞情の籠れる意味の通せぬが但しは外に思慮ありてや（博）何致しまして私などは……ト極淡白なる挨拶に豐子は話頭の方へ違ひて手持無沙汰に見えたるが透さず談路を直接に運

せんとや媚を呈して（豊）夫なら貴君はお獨歩で入ッしやる御積りですか餘りお獨身でお出なさる方でもございませうまいネエ中島さん、エ、切て爾いふ宴會にでもお伴なさるのを心待ちに待てる人がございませう、貴君餘り夫ぢやア酷うございませう男の性質は浮薄な者かは存じませんけれど女は一體身體の構造からして軟弱な者ですから自然に此の愛嬌といふ者を興へて男に愛させ夫で腕力のある男の庇愛を受けて世に立つ變りに貞節を盡して男に酬いるのが女の持前、ネエ、男は強壯であるから軟體の女を勵つて之れに深切を盡し剛柔相倚て一生を全うしようといふのが男女の原質でございませうネエ、貴君、最初の口約をお忘れなさりもしますまい、未だ契約の證書がないと仰しやるかは存じませんが口頭の契約も證券に寫すまでの豫備契約だと申すぢやアございませんか、人の心情を知らない顔をしてお出なさるの如何何だッて餘り……ト豐子が久しく相見ざる戀慕の情の度を過て今までの極點にまで沸騰したる想像力の鋭き語氣を耳には聞ど愛憐の情中島が四肢五官にまで充塞したれば却つて淑女が斯くまでに打

明して言出るは非常の心に忍びたる非常の豐子と我よりして價值を興へ最も愛味を聲に含めて

（博）爾お恨みなすつちやア辯解に苦しみませうが全く左様な譯では有ません唯今氣のないお返辭を申したのは實は心中に少々混雜た問題があつたので飛だ失敬な語を吐きました、私の精神は全く過般から屢々申し上る通りで貴女の清淑な御氣質よりも豐麗な御姿よりも最も千金の知識と歐洲教育に薰陶されてお出なさるのを愛敬する次第ですから貴君の眞情は既に私の腦髓に附着して居りますのサ恐くは唯私眞情を貴女がお知りなさらないだらう、私の外形は中島家の遺傳で極無骨に製作されて居て内部の喜愛を映傳する事が甚だ鈍い、至つて形體を以て人を敬愛する作用に當て居ませんから毎度足では失禮を致しますテ（豊）イ、エ夫れは貴郎の通辭とやらでございませう夫んな御容子のいゝ事はツかし仰しやらないでお否ならお否のやうに男らしく仰しやいますしナ、何も是が無理押に何斯と申すのぢやアございません互ひの合意を要さなけりやア成立しないものでございませう（博）剛義に理窟を仰しやるぢやア有ませんか決し



(畫 本 原)

て左様な精神でない、素より生涯の伴侶と精神に誓つてある、併し御親父の御許諾を得るのが一大難事でせう（豊中島さん大れは貴君眞個の事でございませうか、夫なら精しくお話し申しますが父も最初は貴君を大變に忌で居りました、斯申しちやア失敬でございませうけれど父は一體黨派心に制される癖があつて「コンニングスビー」(小説の名)を見たやうな譯で妾を貴君に許すまいと種々干渉を試み

ましたが妾も大變に我が儘を言張り母も貴君の事を種々と替けて呉ましたので夫ちやア誰に嫁がせるのも同じ事ゆゑ中島の性質が何んなであるか篤り己らが吟味をした上で若しも望みに適中したら己らの方で意を枉て汝の自治に任ぜようとして申しまして幸ひ此に訴訟があるから實は外の人に依託する積りであつたが之れを中島に頼むとしようといふ丈にマア話しが運びましたから先日島渡教會へ参ります序にお尋ね申した譯でしたが：「貴君の方こそお今さんが何とか、妾の事を仰しやいましたらうネ（豊）エ、お今か、那が何を申すものですかね、爾いふ譯だと今日は花婿さんの試験と言ふ形ですネ、宜しうござア：：：折から奥にて呼鈴の音二三點漏れ聞えて五分時隙が程を經過し小間遣の女中なるべし侍婢一人走り出て兩人が前に手を突て主人が結束の整ひたる旨報じ来るに中島は一禮なして艶子が東道の後に續て奥まりたる三層樓の應接所へ通つて適宜の椅子に憑り艶子を還せし其後へは侍婢一人が持出し、珈琲を飲んで器を返し獨り室を見渡すに旋轉體の圓テーブルには印度緞子の美しき掛け紫檀の面に露西亞製の紙巻簾を入れ上置きに置たり其の側らには支那製のプラチナ燈を供

へ着けて煙草を喫むべき火に充つ佛蘭西製の喘吐器を三個適宜の位置に据たり正面には長方形の椅子を置き安居に便にし今また一個の通常椅子あり別に裝飾としてはなけれど甚だ美麗に見受る折から側の戸を開きて入り来るは春川伯なり續いて家従水野昌好喜麴の箱を携へつゝ主人の後に扈從して立たる儘に三人が親しく握手の禮を施し春川伯は椅子にも凭らず病中なる故脱着せるかナイト、クロスの袴のみ折て（後中島君、甚だ失敬ぢやが御覽の通り不快ぢやけにマア許して呉れ給へ、簾卷の儘紳士に接する法はあるまいが病ぢう奴には何も勝手ぢや）ト一禮なして長方形の椅子に凭れて髀がい撫で乃公こそは東洋の新ビスマルク其の人なれと言ねばかりに雲時が程は對ひ坐したる中島の面を目成て何事をか心のうちに尋思を凝し瞳を下瞼に注がせつゝ漸くにして咳一咳なし（豊）早速ぢやが中島さんチト地所に關する訴訟の事で足下に代言をお頼み申したいぢやテ私がマア自身の鑑定ぢやア民法上何しても正當の理由が存しちやると思量するが餅屋は餅屋ぢやに依て十分鑑定をした上で承諾をして貰ひたい失敬ぢやが成功謝金は君の最

も好む者を進せる精神ぢや、コリヤ水野手前が關係ぢやけに能く明瞭にして説明せんか(昌)長まりました、中島先生一體起訴の成立といふものは新潟縣下越後の國東頸城郡三俣村字神田と申す處に沿て手前主人の田地がございますのですが此の田地は神田より甚だ地盤が高いので何分にも水利が宜しく有ません底で同村の戸長森村なる者に神田買入の事を委任致しまして種々方法を施しました處該地は村民で少々つつ分持にして居る田地ですから一人々々に買取るといふのも不都合だし若し中に苦情でも唱へる者があつては相成んから連帯に關する公債に此の神田を抵當にさせた方が宜しからうとの事で即ち神田添小川鯉維持費を當主人より貸付ました折別證にして若し本證書の契約に違背至しいふ節は相當の増償を以て神田御買取被下いふと一切苦情等申す附敷といふ即ち始希裁判にて甲第一號證に呈しました此の證書を取置ましてございますが昨年の暮第一期の返済期限に全く契約を履行しませんから主人代理として私が出張致しまして段々戸長とも熟談の上戸長役場に預つてある地券を此方へ引上げ重立た者を呼んで懇々と談じた處イヤ

モウ夫は御契約上の事であれば是非もないが實は地租の未納などもあり土地に對する負債もあるから夫を御負擔下されば別に異存はございませんと申すので是を即座に二通の證書に認めて調印をさせましたから最早異存はない精神で精細の反別を測量させました其の中で一人承諾を得させない越山卓一なる者を招いて彼の存意を尋ねた處がイヤ夫は甚だ意外の話しだ元來此の御談じは大臣の御資格で御下命になつたのか但しは一個人の御相談か戸長の職權あるかないかなどと種々の難問を起して破壊しようと思ひますから私も證據立を以て争ふうちに愚民は誠に致し方のないもの(後コリヤ)道行は何でも宜いワ控訴の趣意と證據物件をお目に懸る(昌)ハッ然るに突然調印取消の訴へを起しまして斯の如き裁判の結果に成りました證據書類は之を一覽下すつたら大概御了解に成りませう、さて今般右原告人越山卓一より控訴致す旨書面を以て通報致しましたから甚だ御面倒な儀ではございませうが先生の御鑑定は如何なものでございませうか又控訴被告の代言が頼れませうか其の邊の處で御繁忙中御足勞を願つた儀でございませう(後)民法上から論じても控訴

をしやうといふ原由はない様ぢやがバリストの御鑑定は何なもののかマア獨逸邊の立法の原理から言は土地合有は人の富家に任じてあるので法律は之が破壊を企てるものをこそ彈劾すれ所有者は飽までも保護せんではならんのかやシテ見ると司法官が私に法を制して證據以外に斷定を下す事もあるまいから事實に照しても法理の上にも何も私は宜えぢやらうと思ふがなア、一體此な裁判は何なものでござやト頻りに證據に依頼して原裁判を信用する主公が詞を遂に聴了りたる中島は唯其の首を低るのみ返辭はなきて慧眼に原被の口供兩造の證據物を審査して尙また長岡裁判所の宣告書をも仔細に見つ忽ち心中笑ひを生じ(博)水野さん此の證據物は何號證にお出しに成ました(昌)ヘイ慥か乙號證に……(博)宜しうございませう何もチト私の鑑定には及びかねますから篤と相談をして(後)コレ遠慮をさしやるな可否の判斷が付ん事はあるまい先生に鑑定の出來ん者なら日本に之を裁判する法律家は猶更有りませんぞ(一)仰仰しやられては甚だ恐縮致しますが法理を精しく説立るのも無益な話しですから事實に照して

一度對齋をして見た上孰れ確たる御返答を申しませう(昌)爾願れるなら何より難有うございます夫なら此一件書類を(博)宜い、證據物件謄本を頂戴して参りませう(後)御如才もあるまいが身分柄ゆゑ餘りパツとせんやうになア(博)エー、御座意には又びません宅の書生に對齋させて見ますから夫ぢやア何れ近日(後)病中甚だ失敬をしました(昌)何も御繁多の中を意々何も……(博)モウ大に何ぞ大で(後)夫ぢやア勝手ながら失敬ト茲に中島博智は別れを告げて螺旋形の梯子を前後二段下りつ元の溜りに來て見れば覽子は今の物語りを洩聞たるか恨みを含みて心地宜からず控へしが唯簡短の挨拶に互ひの情を手に握りて離れて以前の内玄關に待せ置たる車に乗り門外遠く出て行く後の方より聲をかけ頻りに我れを呼ぶ人あり中島あやなく車を止めて待つ間程なく此方へ来るは是なん毎朝新聞社の記者山田文治なり

(博)僕を呼たのは君か(文)當然の事サ、君今夜は宅に居るか、エ、居ない、明日の晩は(博)明晩、ア、多分……(文)君に少し話しがあるから明日の晩は何處へも往ずに待て居て呉れ給へ(博)宜しい、承知だよ

ト會を約して別れ行くを山田は見やりて苦笑ひしつ

(文)膽力のないピスマークの處へ出入るからは若しや甘く嘗たれたのぢやアあるまいか、貴女がござつてゐるから夫れとも縁談かな何たか何も變だぞト獨り吻き足も亦市ヶ谷城門の方に往きけり

第十四回 草まくら

孤食冷かにして華背逆旅久し故山雲遠くして懷舊の情轉た切なるは驛旅に在る身の常態なるべし本郷三丁日の角店なる越後屋といふ旅店の二階に四疊半の一室を借り語敵きの友もなく一人旅魂を慰めかねるは彼の越山卓一なり雪を凌ぎて上京したるは其の精神に固信する地方自治の制度の爲めに最も障碍を興ふべき土地合有の無理押を破りて權理を伸張せんとて安危を我が身に負擔しつゝ慨然として出京したるが素より訴訟は長所ならねば恩人なり且師匠なる狀師中島博智を尋ねて助けを仰がんとんと征衣も御す靴をも脱せず直ちに飯田町三丁日の中島方に赴けるに書生一人執次して主人博智は故郷なる靜岡縣に往きしと云へり然らば阿今に逢んといへど是も親父の大病を看護

ん爲めに主人俱併歸省したりと言放つに頼みも此に半絶え再び去つて本郷なる法科大学の寄宿舎を叩き齋藤孝に面晤を乞へども課程のうちに在りて謝絶し第二の望みも絶果たり斯く輕薄なる人の心に悄然として歩を旋らし旅店に歸り來りしが然ればとて此の鑑定を他の代言士に託する時は直ちに金の費る事なれども之れに充てべき費用なければ若し自ら死力を盡して控訴廷に戦はんには縱令法理には暗くとも條理の二つあるべき筈なし苟にも多少の書物を讀み且狀師の家に居て聊か訴訟法をも知れるに應ずる事のあるべきや嗚呼堂々たる一男子誰をか頼み誰をか憑まん依頼心程世の中に卑劣なるはあらざるべしと奮然とて蹶起して十分力を筆に寫し懸て控訴狀を認めつ直に自ら控訴院に出頭なしして奉呈し其の歸途に山田文治を尋ねて仔細を縷述なし宿所に歸り沙汰を待ちつ十日餘りを送りたり一朝聊か心ありて各新聞の輿論を見やと店に立出て待ち居たるに離て鈴の音遠く響きて此に來かゝる配達人あり卓一急に呼止めて

(卓)オイ、新聞屋さん改進黨新聞があるか(配)エ、改進黨新聞 お生憎様何も改進黨は非常に賣ますから悉皆賣切て仕舞ました(卓)夫ぢや

ア毎朝新聞は（毎朝、お待なさい）健かア、有ました、ヘイ、難有うございます（東四錢あるよお吊を呉な）（毎）ヘイ難有うさま夫ア一錢、毎度難有うございますト世辭を遣して歸り行くを見棄て獨り卓一は已が借り切る一室のうちに閉籠りつゝ新紙を開きて我が親愛なる山田文治が主幹なし居る新聞なりと思へば一層敬信の心を生じて社説より順次に紙面を讀み

（忠）成程、國會に於る第一問題が先生が得意の地方自治論だナ、ヒヤ、人各々自身を主宰すべき権り力あ誰か能く之れを奪ふものあらん、素より、ナニグラッドストーン氏は一千八百八十六年の失敗を挽回せん爲め再び自治案を國會に下せり、ハ、ア老政治家の不屈精神實に驚くべしだ、オヤ、自治案は一人の反對者もなく其第一讀會を通過したり、フ、ム是は先年も此通りであつたな、二次會は何なるか如何英人の守舊の心に制せられて居るとは言ながらモウ大概愛、蘭の自治を許すのが正當の理であるといふ事が了解たらう、雜報に何か面白い事はないか知らん、何だ「夫婦喧嘩にあらず」前號に下谷區萬年町十二番地の麵包商森村權一郎「前號に金一と

せるは誤聞」が女房お雪を打擲したる未引致されたる事柄を記し付しが右は事實に相違せる廉少からず昨日更に開得る所に據れば此の權一郎は新潟縣「ウムー」ト其の餘の文は默讀しつゝ顔色忽ち怒を帯び或は愁を含むが如く變動一方ならざりしが啞然として洪敷なし

（忠）是は何も不思議だ、先づ是を事實と假定めて見ると妹は實に悲愴な者だ、駭くべく憎むべきは森村だ彼れのお雪を勾引した後に調べて見ると全く月長役場の官金を竊取したのも權一郎の所業に相違ない、だから森村が腰味のうちに償還方をつけて置たといふ事だが元來甚だ性質の宜しくない奴だけれどもアアして深切に出入りをするシ夫に男ツ振がいから若しやお雪も何時の間にか……夫で期を約して亡命をしたのだらうと信じて居たが夫ちやア依然苦節を守て居たのかト獨言つ時廊下より下婢が例の粗忽聲にて

（忠）越山さん、お客人が参りやしたヨト廊下に立て呼立るに卓一急身を起して出迎へんと障子を開れば既に山田は上り來りて夫れと見るより日麗し

（文）イヤ過日は遠方まで難有う早速御依頼に

成た一件を捜索して申し上げようと思つたが何分にも社務が繁忙で意外の御疎遠相替らずの失敬だからマア許給へ（忠）何致しまして私こそ疾に尊宅を伺ふ筈でございましたが實は過日も摘要んでお話し申し上げた通り未だ控訴院から出廷の御沙汰がございませんので少しにても調べて置ないで辯論の極に窮するであらうと考へまして毎日書翰館へ參つて取調を致して居ますから夫れ存じながら御無言を申しまして済ませんでした、今日は何方へかお出に成ましたんでございですが（文）ナアに何處へ往くものか一本槍に君を尋ねたのサ（忠）夫は誠に恐縮の次第ですが何か御用で……（文）小々内密で君に聞きたい事があつて來たのだが若し差支へがあるなら何處へ往かうか、エ、隣室には誰も居ないと、夫ちやア言ても宜しいネ、チヨイと其處にあるのは社の新聞か拜見、ウム、是だ此の件は定めて讀んだらうネ（忠）エ唯今一瞬しまして實に不審を起して居る處です（文）爾だらう夫りやア道理だ、昨日は僕も少しく用事があつて番町のイーストレーキ氏の許へ行たから雜報の方は検閲を怠つたが今朝見ると悉皆前號の事實を打消して詳細に記載してあるから

早速社へ行って聞くと全く下谷警察署の刑事巡査から聞いたのだといふから事實に於て相違のあらう筈はないが何にしろ已に前號へは誤つて妻とも認め全く密通して亡命をしたものと記した位だから君を初め御兩親に於ても此の相像の區域は免れまいと考へたヨ、ウム、夫れ故斯いふ潔白な事情は早く御兩親に報道して令妹の身に一點の汚心のないことを證明しようと思つて直ちに一葉を遞送させたが森村の長男といふ奴は實に憎むべき奴だなア、エー爾ちやアないか(男)様でございませう私も平常の志操では決して夫んな狼狽な事をするやうにも思はれませんでしたは是ればかりは何も皮相から見られぬものですから大方不埒を働いて亡命をしたに相違あるまいと存じて居ました一體私は物事に干渉するといふ事が大嫌ひな性ですから固より互ひに心の合たものならば其の事を尋常に相談さへすれば不足ながらも獨立して進て行る丈の資産を分て公然夫婦にして遣らうといふ精神ですが何をいふにも先方が富家家であつて何かすると此の縁戚を寄貨として彼は干渉を試みようといふ陰惡の性質があるものですから大體に不承知でございしましたが實に

此の久しい間も簡操を守つて苛酷非道の折檻に逢つても更に其の身を讀しもしませず唯一身を全うして自由の境界に還られるのを心に待て居たといふのは妹ながら感服致しました(文)就て君に聞うと思ふのは此の新聞で見る(文)面部へ疵を付けたとか腕をぶつくだといふ事だから孰れとも權一郎は處分を受けるだらうと思つて居たが今日探訪者が歸つて來たのに聞て見ると近隣からの敬願もあり當人も私和したいといふ事で警察でも強て求刑するも本意でないといふ處から全く懇篤に説諭して放還したさうだが此に僕の心配といふのは大方其の權一郎といふ奴は陰險の性質のある奴だから幸ひにして私和して貰つたのを難有いと思はないで必ず一層お雪さんを憎むに相違ない、若し爾だといふと實にお雪さんの一身に取て憐れむべきの至りだから何も棄て置いた日には生れも付ぬ不具の身體となるに違ひなからうと思ふが幸ひ君も在京の事であるから熟議の上で其の處置を付んでは否なからうと思つて餘計なお世話だけれど一應相談に來たのサ君の精神はマア何んなものだエト常に變らぬ山田文治の貴族も深き言の葉に卓一思はず感泣して恩義を厚く懷ふにつけ一議に

及ばず首を下げ(意)別段是といふ縁故もない私どもを唯一面の識に依て夫程までに御親切にして下されるのは實に私ども一家の幸福として長く家記に止めるより外に御謝儀の申しやうもございませぬ、モウ先生の仰しやるまでもなく斯様な事實を承知致します以上は必ず不人情にも度外に放擲して置く譯ではございませぬが、何にしろ何にか處分を付けなくつては成りますまい(文)君が全く疑念を散じてお雪さんの眞情を憐れむ心なら僕も實際の存じ寄を吐露して君の賛成を得なくつては濟ない、僕は去年のエーツ、四月だ、四月の競馬の折上野の公園で君と初対面をした時から斯言ちやア誤ふやうだが當時空理に走つて兎角極端に走る人物が多いのに着々と歩を進めて地方自治にのみ熱心する君の精神が實に僕の精神に入つて十分に友愛の情を惹起したから正直な話しは彼の時まで僕は先づ蓄財をして根柢を築めなくつちやア所詮僕の思想を達し得る事は出来ないと思考して、マア幸ひにも若冠の頃から全く父母兄弟の羈絆を脱して不十分ながらも獨立独行で商業社會に交り種々な事業に首を突込だお蔭には何

か彼が一家の生活には差支へず新聞社の方も追々利益が見えて来たから閑暇の乏しい身體には遊獵も出来ないから健康を保全する爲めに馬にでも乗らうと思つて幸ひ秩父から来た人が雜種馬の三歳駒を買へと進めるので伯樂を氣取てマア夫れを相したのサ處が至極の名馬だから直に買取て縁野と名づけたのも實は地方自由の制度を希望する處から號けた譯で何か花々しい勝負をして見たいと思ふ處へ幸ひ婦人財囊の日に春川伯の都と組合に成たから是で一番彼の中央集權説を主唱する都の持主を驚かして逃なくツちやアと思ひ立たので餘程勉強して競走したが二十英尺以上の勝を得たから大變に愉快で堪なかつた、處で君に逢たから、實に此の時の感情は今に始終胸裏に附着して居る程だから畢竟漫遊の砌り君に逢て餘計なお世話をしたのは此時既に蓄財の精神を轉じて君の如き不幸の域に沈溺する人を救済しようといふ俠氣を起したので獨り君に限るといふ譯ではないが就中君の一家を憐哀むのは則ち爲にする所があるのでも何でもなく其の主義上から親しい血胤以外の縁族であるからです、夫れ故お雪さんも直ちに僕が引取て幸ひ細君が世話好だから

ら此の方の着くまで御世話を申さうといふ精神を起したが、元來權一郎とかいふ奴は餘程狡猾に當て居るに違ひないから君の委託狀があるとか何とかでなくツては容易に手渡しはしまい、夫も條理を以て押せば決して恐れる事はないけれども夫な此なで迷巡して居るちには屹と彼の娘を慮すとか又は略賣するとかといふ危險がないとも言えない、ネエ、夫れを實は協議するのサ、君何だエ、僕の考案は（忠）願ふといふのも餘り人に甘えるやうで恐縮致しますが唯今の様に大體の御履歴を何つて見れば之れに背くのも御本旨に悞る譯ですから甚だ自由ヶ間しうはございますが大ぢやア左様いふ事に一つ：（文）宜しい宜しい、今夜は少し用事があるからト言つゝ何をか思ひ出しけん急に膝をうち拍きて

て居られないのサ（忠）何して私が行た時に留主といひましたらう實に不思議な譯で：何か是にやア原由がありませう（文）サア何も變な譯だが實は君の今度の訴訟の敵手たる春川伯の處へ親しく出入る様子だから若しや些と奥みが着きやアしないか知らん（忠）へ春川伯の處へ：夫ぢやア殊に寄ると公廷の敵手が先生に成りやアしますまいか、此りやア困つた（文）何だか保證が出来難いネエ、實は彼家の令嬢が非常に戀して居るから僕の考へでは縁談でも取締りやアしないか知らんと思ふヨ（忠）アノ艶子とか仰しやる方ですか（文）左様サ、ホラ日外君が獨逸制度と英國制度の事を論じて嚴々説破た令嬢サ、であつて見ると君を突然今夜同行するのは最妙い事だけれど又宜しくない場合もあるから兎も角僕が今夜行て悉皆事情を探つた上明日は日曜だから早朝に萬年町の方へ行て歸りに君の處へ來るからマア夫まで待て居給へ（忠）何か宜しう：（文）萬事僕が引受たヨ決して心配し給ふな、エツと、オヤ／＼モ一十八時（子午線は明治二十年に改正せり看客疑ひを拘くべからず）だ、夫ぢやア孰れ明日、左様なら茲に山田は別れを告げて直ちに店より車を急が

せ飯田町へぞ軋らせける義侠の心腸 涼々たる
べし

第十五回 腔の雪消

自治政府の設立なき邦國に於る人民は常に恐懼の中に在りて自ら本末を明かにすること能はず唯政府なるものを以て國となし政府は國の爲めに成りたつた所以の道理を忘失せりと學士リーバーの金言なり定や多数の小民は官吏を目して同等の國民なるを認め得ずこれ一群の種族にして其の集合の行爲を擧げて政府と呼べるものと思ひまた人民は其の政府を建築すべき土木なりと誤り認むる者多くして是等の愚民に圍繞まれて別に頭角を顯はしたる彼の越山卓一も俊秀の才當如の氣を自ら培ひ養ひて今この大事を負担するとも一步を譲るものならねども法は全く不精なりや裁判官は獨立を公然保ち居るや否やを精しく推究すること能はず集權政府の下に立つ自由に乏しき身の果敢なきは權理の消長縮伸に嗚か恐懼の念を抱き益々中島博智を慕ふ念慮は一層の重量を茲に増加したるが斯く愛敬する其人の心は漸く反對の鍼路に進めるかの如くまた一臂とも憑みつゝある齋藤孝は何故にや面晤をするさへ厭へるに卓一

頻りに嗟嘆に堪へず只管山田文治をのみ力として居たりけるに圖らず文治が義膽を以て先づ博智に面會を得一年が程足を容れざる應接室に座を占めたる卓一は未だ心中に種々の問題輻輳して口を開くに及ばざるを夙に大どと察しけん磊落紳士は語を發して

(文)中島さん、君に今日のお土産といふのは即ち此の人物だが君は此の蓬頭垢面肉落ち骨顯はれたる處を見て何な感覺を起したか、
定めて愛敬の情に活潑の精神を奪ひ去られた憔悴枯槁の態を見ては此んな不潔な人物と席を同じうして談しをするのは不愉快を感じるだらう、何方かといやア窺窺婉婉たる令嬢と玉榻を同じうして語る方が愉快だらう、
エ、何だエ、併し能く物を考へて見給へ、元は同等同權の國民だらうぢやアないか、夫が今日に至つて貴公子や令嬢に對すると恰で反對の感觸を與へるといふのは決して誰の悪いでもない自分達が馬鹿だから此んな結果を招いたのだとマア一概言切て了ふ譯のものぢやアなからうと思ふヨ 畢竟農民といふ者を馬鹿にさせたといふのは誰の罪だネエ君言新しく論ずる程の事でもないが大概日本には遊民が澤山あつて公卿諸侯武士は勿論商人とか

工匠とかといふ特別保護者が十分の六可を占めて居て總に十分の四強位の農夫が是等の厄介者を引受け食しても遣れば商賣もさせて遣り政府を立させて保護を受させて遣たといふのは先づ農力を疲勞させた一大原因であらう、夫から此方に平等税説が行はれて地所に割當たはいふが依然農民は氣の休る席がなく物成といつた時分よりは税率こそ下つて居ようが出し前に行たら種々の原因で依然五分々々、何かすると餘計になるといふ一件だ、今こそ爾でもないがお互ひに此の農民を疲弊させて幾分づつか身代を肥したのサネ、其の遺産の爲めに教育も幾分か進んで居るのだが、此の反對點は始終農民に附着つて居て全く今日不平均の現象を呈したのに相違はない、だから都人士の綺麗なものは農民が窮して居る商標で決して跨るに足りない譯サ、併し君の精神では僕の説を容れなないだらう、何だエ何と思ふネ君は(博)失敬な事をいふぢやアないか、君は吾輩を官權臭氣が付たと思ふンだネ(文)當然サ、何せ君杯ぞに話したツて贅だタアと思つたけれど越山君が頻りに君を慕つて居るから今日は同道して來たのサ、オイ越山君夫人に隅ツ子にゐなくツてもいふや、

此方へ寄り給へ（博）怪しからん事をいふ君は
何でも變だヨ（文）僕よりやア君の方が餘ッ程
變だ第一君は何いふ精神だか知らないが過日
越山の來た時に何故留主を使つて逢なかつた
のだエ、エ、諷も餘り素々しいぢやないか親
が病氣で妹君と一緒に看病に行つたッ、マア是
から組閣しよう（博）頼だ豫審にかゝつたもの
だ吾輩は驚つて夫な事は言ないねエ、ムウ、
今まで憚りながら人に留主なんぞを使つた事
はないネエ（文）だツて現に越山が來た時夫れ
故空しく歸つたらうちやアないか（博）些とも
何も覺えない、卓一さん左様かエ
ト初めて語針の越山が方に向ふに卓一は悦び言
ん方もなく此にて我が意も彼方に通じ彼方の深
意を探らんと

（卓）モウお尋ねまでもございません何處を措
ましても出京次第先生をお尋ね申さないと
うに未だ精神が腐敗しは致しません早速御
尋申しましたが……（博）何だとエ、君實際
來たに違ひないか（卓）事情を盡しません
と私の精神も御了解に成ますまいが先生の
御恩澤を一日片時でも忘却しては人間の徳義
に悖るといふ感情は常に胸裏に附着して居り
ますから正直のお話しは口を減しても必ず

筆紙と郵便切手を供へて置まして毎月一回つ
つは常不斷御起居を伺つた程の事情ですから
モウ出京致しますと直きに此方へ伺ひまし
たが唯今山川先生の仰しやる通りで實は今般
の訴訟の成行も氣遣だし甚だ落膽致しまし
た（博）實に奇怪だ、吾輩の許へは唯の一度
も書來の達した事はない、吾輩も妹も常に君
の事を案じるから折々手紙を出したのでも大
概君から通信の達さない事は知れさうなもの
ぢやないか（卓）何と仰しやいます、時々お手
紙を……イ、ニ手前輩へは歸村のち東京か
らと言ては更に郵便の來た事は御座いません
唯毎朝新聞を山川先生から御惠送になるのが
達しるばかりで御座います（博）吾輩の書信も
届ないツて山川君何だエ、實に不思議な仔細
ぢやアないか（文）左様サネエ、書狀往復の
自由は甚だ大切なもので元來郵便局を設け
て政府が往復の媒介をするといふ趣意は唯速
達の便利を圖るばかりぢやアない其の書狀を
滞りなく先方へ届けるまでの間之れを保
護して決して通信の自由を書けないやうにし
て違る譯だから政府を潔白なものとして人民
も之れに依頼するのだらう、シテ見ると居ん
といふのは實に訝しい譯で若し何か事情があ

つて竊かに私狀を開封するとか又は押収する
といふ事があつた日にやア政府は人の心事秘
密を探偵するもので丁度先年新當座で演た文
明東瀛史の時代を笑ふ處が私書を計いて罪を
構造する鳥居の政略と毫とも違つた處はあ
りやアしない、英國などには何か此の自由を
保護するに足るだけの慣例法があるだらう
（博）夫りやアない事はないが別段憲法上の正
文はないのサ、是といふのも英國では人民の
信用を貶るやうな官吏がなかつたから羅馬
には親不孝者がなかつたから羅馬の古代律に
は親殺しの刑罰がなかつたと一般の事サ、若
し查理第一世の時代に千八百五十年代の佛
蘭西の様な事があつたなら必ず「ベチシヨン、
オフ、ライト」六人民の權を明かにする書に
公然と通信の自由の條項を掲げたであらうヨ、
併し彼の英國に居住する他國の國事犯人の書
狀を開封しろと言て總理大臣が命令をした時
に國會が激しい論議をしたので總理大臣は
忽ち之れに答へて「格外の事情ある時に臨ん
では書狀を検査することも行政の習俗に
ないではないが以後は必ず此の習俗を廢すで
あらう」と公言したのが即ち今日の法律と爲
り來つて居るのサ、米國などは最も此の彈効

法が厳しく立て居るが日本では野邊總監の時分から開封の權が與へてありはしなかつたか知らん、縱令權限があらうと言は是は取除の場合で平時に此權を使用する筈はないから此の一事に就ても吾輩が淺薄でないといふ事の證明に立たらう、何が孰れ仔細があつて越山君と吾輩とを離開するものが内外にあるに違ひないが山田君、君の考案は何なものだネ(文人間の自治を妨害するたア奇怪な奴だ、宜しい君の精神は判つたが春川伯の代言を承諾したか(博識がそんな知れ切て申理の立ない訴訟の被告代言に成るものかヨ、全體向うが法外な仕方だものを(多)大ぢやア大丈夫だネ、越山君何うだエ(思唯今の御一言で誠に安心致しました

此の談判を漏聞きてや但しは虚心に來りしか阿今は美茶を入れ替んと銀瓶携さへ出來る隔の一間に先切來たる一個の書生が慌忙馳來つ阿今の前へ身を置いて

(書)お嬢さん、僕が参りませう、エー、貴女がツカ、彼な座敷へ出ちやア安ッばく成まさアネ、僕にお委せなさい(今)だッて知らない方ぢやアなし行たッて宜いぢやアございませんか、何か妾が出ちやア悪い

事でも御在ますノ(書)悪い、エー、何アに悪いといふ事は有まされけれど儼然たる若婦人が書生風情のお給仕に、ネエソラ品格が落まさア、お腹なさい(惡い事は言ません(今)オホ、何も御軍族方のお姫様か何かぢやアなし夫なに見識ぶらなくッたッて宜いぢやア御在ませんか、知らない方なら何ですけれど山田さんなり越山さんなり些ともお逢申したッて不都合のない方ですだらうぢやア、御ざいませんか、却て御挨拶に出ない方が失禮でございませう(書)宜しい、實は僕が出たいからですサ、宜うございませう(今)オヤ、女の腐つたやうに可笑しい事ネエ、御遠慮なしにお出なさいナ

ト阿今が虚心の應答へに件んの書生は面を赧めて意中の不平を漏すに術なく怫然として立ち去しには心の着くべきやうなければ阿今は其のまゝ一室に入り最懇慫に會釋して在り合ふ煎茶を入れ替つ更に主客に相應め

(今)山田さん昨晩は誠に御勿々さま今日は何方へか御散歩にでも入らッしやいますか、越山さん誠に良久く貴方にも御機嫌宜しう、能く御出京に成りました(意)何も先年は存外の御厚配を、エ、追々暖氣に向ひました此方

様にも御健祥で今日はまた突然に出まして相替りませず御厄介さ(今)眞個に御無事で結構でございませう、彼ツ切り御便りがないもんですから何成つたかッてネエ兄と常住御噂を申して居たんですヨ(さ)お今さん昨夜貴女に語しをした事ネエ(今)ハア彼の下谷のですか(多)ウム今朝行つたがネ困つた事にやア轉居先が知れないヨ(今)オヤ爾うでございませう(博)お今さん越山君は久し振のお客様だ何か御馳走をしないかエ、越山君今日はマア緩り遊んで行ても宜からう未だ此の訴訟の事に就ては種々と話しがあるが御覽の通り關係の依頼者や鑑定人が彼の通り待てるから十二時までには應接をしなくッては成らない、些との間奥で遊んで居て呉給へ、未だ君は見ないだらうが妙な庭が出來たヨマア行て見給へ、山田君、君は未だいゝだらうネ(文)ア、宜いとも今日は君が手が隙たら三人で龜戸の蔭でも見て時間が早かつたら三圍前の清水東谷の處へ行て狸の見物が得意の牛身寫眞でも寫さうと思つて居るサ(博)至極可からう東谷の寫眞なら歐米人に見せても恥しくないから吾輩も幸ひ澤山寫して英國や米國の

朋友に送つて遣うヨ、大ぢやア待て居て呉給へ(多其の代り午餐は食倒すヨ(今)山田さんの食倒すくも久しいものでございますヨ、越山さんマア此方へ来て御覽なさいナ(卓)へイ難有うございます

ト此に至つて中島は訴訟人に應接の番號札を取出すを後に見なして三人は奥の仕居に來しが山田は固より懇親の間柄とて遠慮もなく主人の書齋にうち通つて近來船齋ましたりと覺しき洋書を繕き居る茶室の縁に卓一は新に設けし庭の風致を見るにも故山の想はれて等しく生を人類に稟たる身なるに賢不肖其の差ありとはいふものの斯くも境を殊にせるにや同じく兄に就く人も阿今の如く幸福を得て天性とはいへ智育もあり德育もある其の上歐米風の體育に其の健全を保てるにや髮髻かに肉厚紅顔色を加へたる夫には引替へ妹お雪が數奇のうちに沈溺して貧乏の淤泥を脱し得ず卑屈の岸の高うして快樂の陸に上る能はず自ら我が身を渡せるは正に兄なる我自らが才器の鈍きに依るならんか將積年の累弊の今猶脱し得ざるにやと坐に感慨胸悶を來往させる其の中にも亦一種の分子より組立てられたる思想ありて憂鬱交々身に餘る多岐の心緒を知るや否お今は庭の前栽に盛りを誇る白

木蓮の花を手折て此方へ來り枝を撓つゝ腰うち掛け

(今)越山さん 貴君は齋藤さんにお會なさいましたか(卓)イ、ニ實は數度大學校へ尋ねて参りましたが卒業試験前だとかと一言て一度も面會致しませんです(卓)爾でございませう妄し

は貴君の精神を能く存じて居りますから辯解こそ致しましたが決して疑念を懷きは致しません貴君は齋藤さんに大變不徳義人だと思はれてお在なさいませ(卓)ヘ、何いふ譯で(今)貴君は齋藤さんが忘れてお出なすつた紙袋とかを何なすつたんでございますヨ(卓)ア、その紙袋ですな那りやア此方から上野の停車場へ参る途を志々森川の方へ行て慥かに同席の人に遞與して置ました其の人は齋藤と同意の朋友で至つて彼と懇意ではあるし殊に私も富士見軒で一酌した事が有りますから疑念なく遞與して來たんですが大が何か致しましたか(今)左様だらうと思ひましたヨ、實はネ去年の事でしたが鐵道馬車の中で此んな事が有りましたのヨ○ト書生が護間の三虎を信じて齋藤の心持全く變じ再び中洲遊園にて邂逅したる其折には確信したる疑ひに捺印したる事實を説き(今)でございますから

妾は何なに悔しうございませう(卓)夫で悉皆判りました、實に貴女程能く私の心術を御存じの方は有ますまい憚りながら私も貴女の御親切は固より總ての御志想を能く存じて居る精神でございます何故といふに貴女は私の身體に絶ず附着してお出なすつて私の心では貴女に毎日毎夜お目に懸つて居りますからです、是を御覽下さいまし

ト肌膚を示して沈着せる心の裡に親密なる愛慕の念のあることを心を定めて打出せば合意は誠に不思議なものにて花顔忽ち眞紅を染め臉重うして視線斜に靜默の中幾層の艶語を心に畫きけん之れを知るは兩人のみと思ひ設けず無聲にして蚤くも月下氷翁を全く感動せしめたりけり

第十六回 旱の白雨

木擦の壁を唯一重隣家の境を隔れど鼠は常に喰破りて交通自在の洞道あり背合せの裏隣家は棟の半を分ちつゝ密語も自在に聞得べし路次の通路は四尺にして對門と雖も一家に同じく上等長家といへる方には九尺に二間を戸として竈を構へ流しあれども鉦金などと言へるものな

尺四方の四疊半を土間にも使用ば座敷に用ひて竈の類を見ることなく唯些かなる火鉢のあるのみ下等といへるに至つては三疊敷に一家九人の家屬を集めて住ふあり或ひは二月をうち貰て三戸の之れに同居するあり炊烟とは上らねども夕暮よりは家毎に炊造の烟賑はひて半宵月の影を埋むる恰も英のマンチエスターカリバープールを望むが如し彼れは日夜の製作に蒸氣の烟の絶ざるにて是は蚊帳を垂るゝ鏡なく睡を安くせんが爲めに煙す烟の絶ざるなり烟は等しく烟にして彼の黒烟は流動體たる此の濃烟は固形體なる差別もあらで同一の氣蒸體なる煙なれども利益を起すと貧窶を示すと榮枯得喪如何ぞや斯の慘憺なる貧國を何處の境と尋ねるに前回一たび描き出せし下谷區萬年町より一等の上位を占めたる最貧郷同區山崎町の裏洞なりけり時猶ほ炎暑といふにはあらねど六月中旬の事なれば一雨ごとに暑を増加し雨衣の薄きを願ふ時候も同じ緯度ながら此の貧郷は格別にして汚熱矮屋の裡より發し蒸氣塵埃の上より騰り大氣の流通閉塞するより熱度を擴ふに所なく陰鬱として暑を造れば單衣を纏ふ者も罕にて男は犢鼻褌唯一つに赤くして脂染たる肌を露はして軒頭に立ち女は麻の葉の下帯にて腰より

下は掩へども膨よかなる乳房を垂れて粗造の皮膚を取る事なく上樞に匍匐をれり兒は全體赤體裸にて男女ともに打混じ頭の虱を捻りつゝ遊戲す偶々肩に穴の開て縞か形かを分難き單衣を纏ふ者あれば是れ此の社會の富豪家なり人間界の中央にも禽獸昆蟲に劣りたる生活をして餘生を貪る斯の貧郷には用あるまじと鑑定するゝ一の紳士紺塗の車を二輛並べて先づ一輛は乗たる人を其の儘表に駐めさせ一人此へ入り来るに一種名狀すべからざる臭氣の鼻孔に闖入するにや香氣を含めしハンカチーフを鼻に押宛兩三軒歩みを進めて立留まり

(文) チョイと物を尋ねたいが此の長家に先頃萬年町から移轉て來たものはいなかネ (男) オイ細君ア萬年町から移轉て來た者が此の長家にあつたツケノ (女) 爾サネエ、萬年町とは御親類合だが：オ一有るよ／＼ホラ那の上等の眞中頃に (男) ウム越の雪の、婦者か、ヘイ此の五六軒先の向うッ側で尋ねて御覽なせえやし儘か權一郎とか何とか言ましたツケ (文) ア、森村權一郎といふ者だソレ／＼夫に違ひないが女房といふなア内に居るか (男) 何だか私どもにヤア詳しい事ア解りやせんが萬年町に居た時分其の娘々めが間夫をし

たとやで打擲つたのが當り處でも惡かつたといふものか毆痕を起してモウコレ三月越に成りやすが未だ不貞腐れて寐て居やアがるか面を見た事も有りやせんものサ (文) 諄く物を聞く様だが今時分行ても夫婦ながら内に居るだらうかネ (男) 左様サ、越の雪やアモウ歸つたらうか (文) 未だ見かけねえやうだツたネエ、歸つた處が隣家で屹と例のを遣てるに違えねえヨ (男) 内會かア、なアに旦那山の神は慥かに居りやすからマア行て御覽なせえ (文) 爾か

是は何も難有うト見る物毎に珍しく奇怪にもあり慘忍にもあり一眼球子に映ずる事物の一種不思議の感觸を與へざることあらざれば斯の紳士の常として最も仔細に觀察しつゝ纏て今しも教へられたる權一郎が住家に至りて内の容子を窺ひ見るに一間四尺の板の間に沓脱に代る落間あり二尺三尺の流臺ありて一ツ竈を飾り付けたる破け煤けし障子の間より住居の模様を見透すに尸字形を顛倒せる奇怪に堪へざる座敷ありて一人側に臥したる者あり一個は長家の女房なるべし枕上に居て何事かを頻りに喋々々する言葉のうちに阿雪といふ文字の耳に入りたれば今は疑ふ方あらず直ちに進んで詞をかけ

(文)御免よ、此方は徳か森村さんの御宅だネ、ハイ御免ヨ〜(女)へいらッしやいまし森村は此方でございますが何方様から…(文)私は市ヶ谷の山田文治といふ者だがお雪さんは居なさるかエ(女)へい何御用で(雪)御はさん宜しうございますヨ餘りひどいけれど何ぞ此方へお通し申して下さいナ(文)オ、お雪さんイヤお珍しう、何モウ加減の悪いに出なクツても宜しう、夫ぢやナ上つてもいいムのか眞平御免(女)貴君お靴を此方へ(文)成程地大が澤山あるナ

ト山田は不潔極りなき陋屋をしも厭へる色なく袂といふ名のみなる損料蒲團の側らに自ら座を占め(文)イヤモウ夫で必らず構はぬが宜しいさて先年は誠に失敬をしました如何です、御鹽梅は、實はナ私も疾くに彼の一件を聞込だから早速に萬年町の方へ行て見たがモウ御移轉に成た後で差配人に就て轉居先を聞合して見たけれど何も判然とした處が分らないので甚だ當惑をして居たが昨日漸く探訪者が此處といふ事を聞出て來て呉れたから今日は社務を仕舞と直にお尋ね申したのサ、なアに取る事は些ともない詳しい事情は悉皆知つてゐるヨ、

ウム、飛だ難儀をなすつたネエ、併し一心の堅固なものには常に上帝が守護して居ると耶蘇坊主もいふから必らず幾分の恵みがあるに違ひない、何でも氣を落しちやア否ませんぞ(雪)左様に御存じさまで入ッしやいましては何も申し上る處は御さいます是といふのも約束事の災難だと思ひまして妾の身の處は諦めも致しますけれども御存じ様の通り父は彼の通り年を老ては居ますシ母は永々の大病で嘸かし妾しの斯成ましたのに力を落しましてございませう若しもの事が有りはせぬかと存じましても郵便一本端書一枚出す事は出来ませんし誠に夫れが案じられて心配で成ません兄は彼の通りな氣象でございますから定めし妾の不身持でもあつたやうに思つて怒ります通りの譯で彼の事がございましてからは猶更世間に知れぬやうと此んな處へ移轉まして人様には些とも逢しませず療治は固より其の日々の食事だつても満足には宛行ません位で近隣家の内儀さんにも漸と昨今御心易く成つたのでございます(文)ア、さうかエ、マア泣なさんな〜ヨ一夫なに歎いちやア身體の爲に宜しくないから(女)モシ旦那

エ、お雪さんは眞個に憫然でございますヨ、是がネエ貴君夫婦だといふなら腐れ縁だと思つて又諦めやうも有ますけれど勾引された上に人にも會さなけりやア表へも出さずに現在自分が御處分でも受る處をネエ貴君、此の女が優しいお蔭に人一人罪に落すでもないと思つてもサ言たい事も控へめにして歎願をして遣たからこそ世の中にも居られるンぢやア有ませんか、ネエ旦那、其恩は棚へ上げて置てマア何といふ奴でせう大抵だつて恩は着るといふのに眞個に〜仕方がねえ畜生野郎だヨ、妾がお雪さんなら罌丸へでも何でも喰ひ着て、サツサと痔を明ツちまふのに餘りお雪さんが優しいもんだから、妾やアモウ〜商切クツて〜成りやアしないヨ、考へても自然てえり、南瓜野郎、南瓜野郎、絲瓜野郎、河童野郎、死ばり損なひの殺漬し畜生、男盜賊野郎、眞個にサ彼な奴は犬の糞でツン俯倒て乞食馬車にでも曳れやアがると米の直が安くなつて世の中が穩かになるヨ一、オヤマ旦那御免なさいヨ、餘り腹が立もんですから眞個にサ、オヤ〜お釜の番を廻すのを悉皆忘れツちまつたヨ、薪までが彼の野郎の肩を持て悪く人を馬鹿にしやアがる、イケ好ねえ煙り

方だヨ、旦那マア御免なさいまし (文) サアサア遠慮なしに、チヨイと内儀さん少しだが鼻紙でも買な (女) 何ですネ旦那此な事をなすつちやアオヤ~~~~ (旦那) 是りやア二十銭のダラですヨマア何せう此んなに頂いちやア済ませんネエ、お雪ちゃん何しよう (雪) 夫な心使ひをかけましちやア、爾でございますか、お内儀さんア、仰しやるもんですから頂いてお置なさいナ (女) 妾やア眞個に喫驚したヨ旦那済ません誠に有り…… (女) お雪さん、森村は未だ歸らないかネ、歸らんけりやア宜い實は今日お前の嫂さんを件て迎に來たのだ (雪) 嫂さんと仰しやいますのは (文) 斯う唐突に言ては解るまいが實の處は越山君も幸ひ東京へ來て居るからお前の身の上に云々いふ事があつたと委細に僕から話をして兄さんの精神も悉皆氷解したといふものサ (雪) エ旦那の兄が此方へアノ參つて (文) ウム居るよ、底で森村に懸合にやア卓一さんが來ては不都合の事もあるだらうと思つたから總て委任狀を僕が受取て迎ひに來た一件だが併し一人ちやア不安心に思はれてもと思つて兄さんが精神で結婚して居る中島傳智の妹お今といふ則ち向來お前の爲の嫂となるべき人を連れ

て來ました (雪) 左様でございますかト抄々しくは應答も得せず唯置れたる面を垂れ瀟然として千行の涙に聲も出かねるは誠に欣喜の胸に溢れし情の切なるものなるべし登下表の潤板に音たてさせて來る人あり文治は背らの小窓より首さし伸てうち點頭ば (今) 御免下さい、山田さんモウ、お話しは済ましたかト詞をかけて入り來るは嬋妍とする淑女なるゆゑ阿雪は大いに鼻翹て涙に腫る重臉を恥かはしげに押包む襦袢の衣のいと厚き針目を漏れて紅涙は瘦たる膝に漉なるべし阿今は當時の才女なり少き辯にも愛嬌多く思ひはかりに敏ければ阿雪を兎に角慰さめて我が本心の誠實を彼方へ發送せんものと故ら我よりうち解つ (今) 貴女にはお初にお目にかゝりましたがお噂は豫々御兄いさんに伺つて居りましたヨ此度はまた不慮な御難儀をなさいますツてねエ、眞個に人事とは思はれませんが (女) お雪さん、是が今話をした中島のお今さんだヨ (雪) ア、左様でございますか誠に不潔處でお恥かしうございます、毎度兄が御厄介に成りますさうでございまして、兩親も貴女の處の御深切を始終お噂申して居りますが宜い折

からお目に懸りました (女) イヤ面倒な御挨拶だ夫此するうち日が暮ると困るからお今さん貴女は逸くお雪さんに結束をさせてお呉れ、エ、ツと内儀さん~~~~ (女) 何か御用で (文) 外の事でもないが今話をした通りの次第だからお雪さんは私達二人が連れて行くヨ併しまた黙口で連て行てはお長屋の衆の迷惑にならうからお前が後に残つて居て森村が歸た時に詳しう話しをして貰ひたい夫も無證據ぢやア困るだらうから此へ私の名刺を證據に留めて置くが若し權一郎が歸つて來て諍々言たら私の處へ來るやうにさう言てお呉れ宜しいかエ (女) ヘイ~~~~ 畏まりました此の問答の終る頃一方にては中島お今が携へ來たりし白飛斑の單衣を取出してお雪に衣服を改めさせ猶我が平素の結び料なる南京縞子に縮を腹合せし帯をも與へ吾が髪櫛に水つて眠亂れ髪を後から綺麗に櫛梳遣しつ卒とて二個が誘ふに阿雪は夢か幻かを自ら判つ暇なくまた今更に感涙に噤咽より外詮方もなく前夜を促され憂に棲ける家ながら恨みに假款し涙の痕を残し惜氣に顧盼し視る目も霞む鐘の音は幡隨院の十九時如上野淺草聞けくも東西かけて撞終る時こそ忍ぶに便りある誰か彼空を幸ひに朽

て蚊を吐く漏板を三間ばかり歩み行く例時破落戸が集合所の奥より夫れと認めた権一郎は曾てより歸りに委細の談判を殘らず傍聴したれども憤怒を胸に疊みつゝ諍ふ擬勢は正道の寡勢に全く蹂躪せられて結局如何成行くやらん口惜き事よと思ふのみ亦詮儀もあらざれば集合所へと身腰を据え切めての事の腹慰せに口を極めて罵りつ彼れ等に當座の恥辱を與へ再び勘考したる上如何かなしてお雪を奪ひ彼方を窘しめ遣んものをと小人癡漢の常として寔に淺慮なる妬心を生じ往き過るをぞ待ち居たるゆゑ多數を藉りて亂暴なる惡聲を出し口々に種々の侮辱を加へしのみか權一郎は身を起して有合ふ鹽氣取るより早く大手に掴み阿今にまでかゝれよかしとうち撒つゝ一同濁たる聲を合せて喧とばかりに嘲笑したり然れども山田は言ふに及ばず阿今も斯る人間世界の以外に等しき境界へ一たび足を容れしより禽獸にだも劣りたる野蠻の土人が巢窟よと思へば讒譽にも褒貶にも更に心を措ざれば今此の憎むべき憤るべき嘲笑罵詈に遭たれども一笑に附し聊かも怒る色なく往過るに賣たる喧嘩の客を失ひ目算全く齟齬したる森村よりは吾ゆゑに紳士淑女を辱しめたる無禮を心に取思ふ阿雪が胸は如何なりけん言出べき機會も

なければ涙を吞で後に従ひ木戸の表に待居たる車に乗て漸くに虎口を脱れ狼足を免かれ得たる再生の阿雪は如何なる面をして彼等と共に立去るや表に到て今一度恥辱を與へ呉んずものをと權一郎は執念も後に續いて表に出れば逸くも車のかげだも見えず何地に向うて走り去りしと苦心の資本も爰に盡し權一郎が容貌風俗訝しとや思ひけん目成話たる一人の生徒獨り頻りに點頭て

(孝成程何うも見た事がある人だと思つたヨ、森村君、森村君、君は越後の森村權一郎君だネエ、何サ喫驚し給ふな僕は柏崎の齋藤だヨ、お珍しう君何時出京したエ、例の訴訟事件でか、エ、君(權)イヨ一齋藤の若旦那か、實に良久何も悉皆見忘れたヨ、私か、私は少し仔細があつて昨年(孝)エ、昨年から出京してるのか成程始審の裁判が執にならうとも控訴院の終審を受ける所存で、是は爾もあらうヨ而して此節越山とは對審したかエ、被控訴者は春川大臣だけれど君達も孰れ證據人として出廷するだらう、越山は何な辯論をするエ、君マアいゝから遊びに来給へ(權)控訴控訴といふが君何いふ譯だエ(孝)惚け給ふな些と僕も聞て置たいからいやエ一緒に來給

へヨ一久し振だサ

第十七回 雲間の月

むら肝の心てふものは凡て感覺を支配すべき萬能の政府にして百端千緒を統轄する中央點なれば麻の木直にてあらんには斯ばかり清く樂しきはあらざめんど曇り夜の惑へる節出來たらんには朝露の我が身を過さん術もなくて常に晴にし天に遭はず濁れる濁に乾を絶ちて止めん胸もいかり纏くるしき限り泣渡るべし況てかほ花の戀に棄れ迷ひては賢不肖無差別にて饑渴に迫る動物の死を知らずして飽を貪るに異ならず我が邦現時の女流には教育の進歩著るしく時めける大臣が愛嬌とて折々は已ごとなきわたりにも咫尺し奉る名徳高き令嬢なるに如何して斯くは迷ひ出けん春川俊胤伯爵の淑女艶子は一たび英國駐中島博智を慕ひてより夢幻の境にも露然たる其の容貌の眼界を去らず麗朗たる其音聲の聽官中に固着して常住坐臥にも去ることあらねば無數の心緒意を鋭うして皆悉く此の點に急進し萬能政府の國會は此の問題を討議するのみ苟にも之れに反對する意見を提出する者あらば忽ち滿堂激動して事の善惡當否を論ぜず説の正邪適非を問はず最大多數の勢力にて身

體意外に排拆し餘孽を遣さざらんとするなり然
りけれども此の熱心なる急遽に過て十分なる秩
序を履むに違あらねば破壊手段の間に乗じて
此の目的を悞つものあり愛慕の念もかた絲の
より着き難きに焦れつゝ半は怨みに懷ひ増し何
とて斯は頑固なるや斯まで人に物思はする君が
心の恨めしと曾間嫉妬を起せしも却て今は憎
惡と變じ最後の熱度は愈よ騰りて他より之れを
視る時は恰も狂するものゝ如く中島といひ博智
といふ人あらば條焉に毗逆に柳眉立て白面濃
厚の朱を湛ぎ富嶽形の雪の額に青き血脈を現し
て炎に均しき息を吐き綠髮動きて陣動かす修
羅妄執に忿りを含んで妻の斯まで念へるをなど
難面は打過るぞ然る浮薄なる人とし知らば何と
て幾層の思ひを碎かん憎き男に會もせばともに
死すまで此の怒りを遣さず徒に過ぎんやと心中
沸騰するが如く煩ひ勝に在りければ俊胤伯は然
までにあらねど夫人節子は恩愛の情に棄も得置
かずして芝浦に在る別邸に往き妻時がほど保養
させたる其の上にて何とか心を慰むる便宜を
更に求めんものゝと自ら髑子を伴ひて芝浦へ
は移住みぬ一週間が程を過たる一土曜日の夕
刻より俊胤伯も晝を避けて涼を件の別荘に納
らるゝ報知のありけるが政治上の紛雜は伯が水

光月色の眺望を掩ふ雲となりてや未だ車輪の
音を通ぜず今宵は満月なるを以て宵より水天勢
麗たる細ヶ浦の風光を斯の高樓にて望まんもの
をと夫人は髑子を室より伴ひ聊か古びし建築な
がら西洋閣の樓に上りて限なき月を愛れども髑
子が日は雲ありて清光無二の水月も眼界中に
いらざるなるべし

(節要、其の兩眼鏡でチヨイと御覽那處に
大層明りの見えるのは根津から轉つた洲崎の
廓たらう高い處に只た一つ灯の見えるのは
大八幡の五層樓か知らん涼網をかけて月を見
ながら嘸葉昌なる事だらうネエ、品川も中々
景氣がいゝヨ、オヤ、その汽車は大變に列
車が多いが、ア、成程名古屋の上り列車だネ
眞個に何も彼も便利に成て今の人は僥倖だヨ
髑些とも僥倖な事は有りませんワ、妻やア
眞個に此んな不自出で腹の立つ世の中はなか
らうと思ひますヨ(ヒオホ、ハ、また此
の娘の一徹が久しいものだヨ是が昔しであつ
て御覽此の母さんなんぞが伯爵夫人だとか
と夢にでも言れやアしない娼妓衆がお妾に成
た話しはあるけれど義妓が御奥へ上つた事は
昔話しにもあるまい、夫はマア難有い事には
立派に夫人と言れて参内の出来るやうな世の

中に成たのは實に自由自在な時代だらうぢや
アないか、夫でないとお前依然左棲を取て四
十島田でヘイ今晚はと苦しい勤めをして居な
くぢやア否ないヨ、是はマアお前だけへの話
しだけれども(髑夫りやア貴母は兩でせうけ
れど妾しやア此の世の中が大變に氣に入りま
せんノ、ハア、何故だツて阿母さまに斯申しち
やア惡うございすけれど薄々御存じだから
恥も何も放擲してお話し申しますが中島さんネ
エ、眞個に誰か憎いつて那の人位憎らしいイ
と思ふ人は有りませんヨ御父様に仰しやツち
やア大變ですからモウ：(ヒオヤ、ハ、此の
娘はいやだよ外のものぢやア有るまいし母さ
んに言たツていゝぢやアないか、母さんだツ
て以前は種々な事をして來たらうぢやアない
か年をしたツて酸甘いは知つてらアネ、ヨ
今のを言て御覽會に疊んでる事を話すのが
一番の樂だヨ(髑だツてネ阿母様、實は中島
さんとネ、マア訝しな話しですけど西洋の
ネエ、ホラアノ、ネ彼方の風俗をお話し申
しましとネ、マア種々と那れはいゝのは何
の言てるうち自由結婚のお話しが出ました
のサ、モウ驚ませう何だか訝しいから
了得に處女の氣象とて縱令以前は如何にもせよ

今は嚴然一貴族の夫人と稱するゝ母に向つて淫猥卑劣の物語を爲し能はずして面を覆ひ語尾を霞むる艶子が何ぞ夫人節子は推し遣り態と自らうち解て子を教ふるの道をさへ踏違へるとも知さるか恥る色なく側に寄り

(節)アラ何だネエお前夫な事言ちやア何だけれど妾なんぞも随分高島屋に岡惚をして屁もしツかけられなかつた事もあつたし一度なんざアお相撲と昔噺家とを情夫にして大變な葛藤が出来たのヨ夫な事はツかしして居たんだけれど勘して身分が極つて見ると昔しの事は何でもないからお前なんざア浮薄といふぢやアなし母さんの氣ぢやア何とも思やアしないワ(豊)夫りやア母様は御商賣で成つたんですから何とも思召しは致しますまいがマア考へて見て下されまし有にも令嬢とか何とか言れるものが外聞も思はないで押付がましう交際を求めて自由結婚の主義に基づき何しようの斯しやうのと口約束でしたのぢやア有ませんか是が先の人が何も彼も知らない人なら諦め方も有ませうけれど何から何まで御存じの大した紳士ぢやア有りませんか此人なら生涯を任しても宜いと見込を着たのは萬更妾の目遊びでもなからうと思ひますヨ

(節)爾だともく眞個にお前が怜悧だから好い處へ日が注つたのサ(豊)斯申せば中島さんの方では夫りやア依然癡情の區域は脱れな眞實自由結婚を願ふものなら何故遠く兩親の許しを受ないのだ縱令ば夫を受たにしろ外國では寺院へ行て結婚の帳簿に姓名を記して貰ふまでは離別は其人々の自由にあつて離婚裁判の管轄を受ける限りでないといふやいませうが夫は未だ日本に例のない事で今の分では到底宗教の勢力が其處まで及ばないだらうと思ひますからモウ口約束の成立が丁度帳簿に名を止られたやうなもので御在ませう、爾して見ますと妾しやア何しても中島さんの所置振が男らしくないと思ひます(節)眞個に其通りお前のいふ事に一つも理窟に合ない事はないヨ、ア、第一ネエ此の春御前(俊)鳳を指す例の地金と知るべし)が喧しい事を仰しやつた時に母さんの氣ぢやア男振はよし働きはあるでお前のお婢さんにやア極似合だと思つたからマア種々と執爲して夫なら今度の訴訟を那の男に頼んで見よう若し以前の様に已へ反對する結核がなくツて眞實艶を愛する情も見え春川家の爲には随分骨を折て見ようといふ成績とかが見えたら艶の望み通り

にして遣す然もなくツては所詮父子が敵味方に成て争ふことの免かれぬ中だから決して許すことは出来ないといふしやつたから妾も何なにか堪しかつたらう(豊)母様には種々なお世話に成りましたけれど人の了簡が爾でないといふものは何も致し方のないものですヨ、妾は今度の訴訟のお敵手の越山卓一と申す者に昨年の春季競馬の時公園で逢ましたが無なに生意氣な奴でせう大體なら何あつても此方の代言をして那んな奴はミシ〜と駁撃て下さるのが當然なのに夫をマア私は此の訴訟の代言を受ける事は出来ません何故と仰しやれば申しませうが元來始審の判決が其の當を失したもので到底申理の立べきものでない故でございます寧ろ訴訟をなさるよりは正當に示談を御達なさる方が御利益でございませうと夫りやア法律には勝れて精しい方だらうけれど色氣も想氣もない返答をして却て越山の肩を持つてお出なさるのは餘り中島さんでもあるまいと思ひますワ、未練のやうぢやア御在ますけれども何あつても此の憎いと思ふ心を直接つて言て仕舞ないうちは忘れる事は出来やアしません眞個に體よく欺されたかと思ふと夫は〜口惜ツて〜然も徳も入

なく成て仕舞ますヨ(節) 妾も夫は禁して居るのサ是が昔日の身分なら彼處のうちへ我鳴込んで思ふさま叩き下して面の皮をヒン剥て造るンだけれど、オヤ／＼餘りお饒舌をして居る中お月様に悉皆雲が懸つたヨ、アレチヨイと御覽馬車の音がするぢやアないか此と御父様に違ひないヨサア下へ行てお出向ひをしませう

ト節子は遽かに衣紋を繕ひ猶鬱然と心中に焰の消る邊なき艶子の手を把り誘ひて今樓閣を下る折轍の音の諳きてお入と呼はる先觸の馬丁の聲も俱に一輛の馬車蹄を止れば二輛の人車も轍を止め夫人淑女の出迎ふ間もなく春川伯は日本服に最輕々しく打扮て日耳曼帽子を冠りし儘悠然としてうち通る後に續いて警部補一人巡查二人の護衛の外に今一人の見知らぬ男も此に漸く首を上げ詰所の方に退きたり春川伯は袴を脱して近來新に營なみたる日本形の便室へ古體の火屋に風を遊つる玻璃燈幾多轉じさせ打寛ぎて坐を構へ先づ葡萄酒に渴きを醫して

(後) 艶、誰か居らんか今一緒に來た男を是へ呼べー(艶)アノ誰か參つて居るのでございませう(後)來て居る／＼過刻即を出る處へ參つたから之れへ同道して來たのぢや、越後から

森村剛藏の長男權一郎ぢふ者が來て居るのぢや(艶)夫なら直と之れへ通しましても宜しうございませう(後)大じないはやく呼べート父が指令に淑女艶子は徐かに次の一室に至り冊女に旨を傳へて席を設くる間もなく權一郎は何時のほど左右衣服を新調したるか白地の帷子に細麻の水淺黄の袴を襲ねつゝ蓋平次平の袴を着し黒絹の羽織に威儀を正して小腰をかぐめ入り來たり末座に平伏したるのみ頭を擽ぐる氣色もなく威嚴に咫尺し心中に恐懼したる乎但しはまた尊敬の意を飽まで表し阿訥の資本を費して愛護の値を騰貴せんとや未だ輒く内情の如何を判斷し難けれども俊胤伯は詞を和ら

げ(後)權一郎、近う來い遠路の處を嘸勞れたであらうが一刻も逸く聞たいのは彼方の内情ぢや貴様の父も中々人心を收攬する事は得意ぢやから好結果を得たぢやらうナ(權)恐れ入まして御在ます實は私も東京、エー當春より新潟表へ商用に參つて居りまして詳かに事情は存じませんでございましてがツイ先頃歸村致しまして承まはりますれば御上の御所望に應じませず身分柄をも顧慮ずして卓一が訴訟を起しましたと申すこととございまして

誠に村内も穩かで御在ませんから父も種々心痛を致して居ります儀でございます就ましては控訴の景況が如何相成ましたか夫れも親しく御伺ひ申し上げ何も御役には立ますまいが訟廷の御用も達さうし且は御參考までに卓一の人となり申し上て置やうと即ち私に申しまして出京致しました儀にございませう(後)ア、左様か夫は重々大儀であつた時に村民の模様は何かや控訴に勝たず異議なく地所を渡さうな決心が見えるかな(權)ヘイ一體北越は貧民の多き處でござりまして動ともすれば多人數集合して苦情はまを立立ますれど何をいふにも氣力に乏しいものでございませう(後)底一撥を起すなどといふ事は御在ませず殊に三俣村などは數年來父が就職して居ります故別段に世の熱に浮かれた事も御在ませんでした處アノ越山が歸郷致しましてから先年中の自由黨主義を持て居まして自分の家が貧困な處から表は穩利に見せかけながら常に社會は平等なものであるから貧富を平均するのが正理だとか純正なる社會に在りて均一の幸福を享有せんには宜しく現社會を破壊して新社會を作るべしなどと詭激の論を唱へましては何かすると社會黨な

どを煽起しようといふ精神を頻りに働かして居りますので愚夫愚婦は皆自分達の勝手な事ばかりを聞ものですから一向卓一に心を傾けて居ます處へ今度の一件でございます元來同人は御當地の代言人中島博智の處へ食客を致して居て法律の片ツ隅を聞かづて居るものですから村民の衆望を集めるのは此に在り機失ふべからずとでも存じましたか例の貧富平均論を擔出して體よく愚民を欺き遂に控訴まで致した儀でございますから村民は只管越山に託したら最早大丈天なもの信じて居りますので父も是れには實に當惑して居ります、卓一は唯今も申し上げます通り輕躁過激の徒でございますから品行上には甚太しい事がございまして現在同人が無二の親友でございます柏崎の齋藤孝と申しまする大學の生徒には幾度となく恩誼を被つて居りながら、剩さへ其者の金匱を持洩致せし位の者ですから此度の訴訟も心底條理を認て必勝を期した譯ではなく全く御上の御威勢に抵抗して一時虚名を博さうといふ精神に相違ございせん(後)ハ、ア夫人人物カナ日本の人民には兎角其の種屬が多いので上下の權衡が保てなくツて困るぢやテ、イヤ大方夫人人物ぢやらう

マア喜んで貰はう控訴院の終結でも今日全く私が方の勝利ぢや併し即日上告届けをしたぢふからモウ一裁判せにやならんか、コン中島は奇怪な奴ぢやのウ、申理が立んから廢ると言居つて今日判決になると今度は上告代言を引受たげな己の先見は違ふまいが何ぢや驚いたか(豊)ア控訴は御勝利に成ましたか、エ、中島さんが越山の……へエ爾でございますか(後)樫一郎、貴様の内へも直に水野から電報をかけたから剛藏も大方承知しつらう(樫)ハ、ア夫は何より御恐惶にございます御執行は直となさいますか(後)到底上告しても贅ぢやから急いで執行するにも及ぶまい神田はモウ私のものぢやサト物に動ぜぬ春川伯も歡喜に色の動き初め月の嫦娥を友として夜を杯盤に明さんと席を轉ずる父母の懷ひに反して淑女艶子は彼の中島が斯まで反對するに憎惡加はり今は恨みを散するに手段も盡て決闘を挑まんものゝと決心せる戀慕の闇の銃砲に口火を添ふる森村が竊かに推して激烈なる煽動をしも試みけるとぞ

第十八回 底の玉藻

佛蘭西形の石塔に鐵柱の門を設け玄關口は和

風なれども門内一樹の老松を基とし二岐に分れる途ありて其の一岐は西洋館の二層樓に迫ふべし廬車室の配置宜しく些細なれども馬驚あり件待所ありて來客の常に繁きを知るに足りな家の結構裝飾とも虚美空装を極めしならねど百事型を置るが如く結束整然として缺點なく魏々宏壯と言はんよりは寧ろ清爽といふ方なるべく洒掃の周到せる一片の落葉だも見えざるは主人が潔癖の注意なるべし總ての構置華美ならねども亦是れ紳士が邸宅として恥ることなく見受られたり此の邸宅は那邊にして如何なる人の住居なる乎こゝなん市ヶ谷佐内町の坂より峯に臨みたる山田文治が住宅なりける一家の者の居間に充たる日本室の便室より廊下を隔し西洋風の裝飾室に閉籠りて紛繁化粧を凝す處女あり身には白紗を纏繞し西洋服を美々しく纏ひ頭は最も愛を含めて瑠璃を戴く前髪に波をうたせて額に垂れ三に紐たる束髪髪の毛を散して前後に亂し護膜にて製せる薔薇の花を横より前に向て挿したる紅顏艶嬌といふにはあらねど娉婷の性なきにしもあらず西洋化粧は不鍛鍊にや頗に衣紋を改めて各種の飾りに意を籠る室の扉を突然と開きて此に來かゝりながら非常に駭き慌てけん聞しもなきず出往しが再び何を

か案じ出しけん歸り來りて會釋を施し

(孝エ、唯今は何も誠に失敬例時ながらの粗忽です。何んか何かマア悪からず、また今日は御招待に預りまして難有うございます、エ、モシ御新造相替らずに實に恐縮ですが唯今御支關から案内をしようと思ひやつたのをなア宜しい存じて居ると言て直さま飛込んだのは應接所だと思ひの外御化粧室へ踏込んだのでは是は如何も失敬をしたと思つた故か悉皆見當を忘れて仕舞ました。がネエ御新造應接所は何方でしたツけ、斯勿々粗々し始めちやア何處へ行つても途惑ひばかり致しますから失敬ながら鳥渡御案内を願ひます。何も誠に済みませんが(孝)オヤ貴君は柏崎の齋藤さんでは御座ませんか(孝)左様……オヤ、今まで御君だとはつかり思つて居たがエー君はドドどなでしたツけネ(孝)アノ御見忘れでございますか。妾は越山卓一の妹ゆきでございます。ますヨ何も誠に良久(孝)エ、お雪さん、成程々々左様々々爾仰しやりやア覺がある如何も是は何も是は、實に見反申しました、何も否ませんヨ始終性急々々して居るもんですから大の粗ミツかしやが直りませんで、眞個に思も着ない處で御面會申しました、何し

て此方へ、何時此方へ、何もマア能く御出京に成りました(孝)何も前々は度々御厚情に預りまして誠に難有うございます。お話申せば長い事でございりますが實は妾も昨年の暮妙な事で東京へ参りました處此方の旦那様と中島のお姫さんに種々お世話に成りまして去る六月の中旬に御當家へ引取れ御新造様も、娘かなんどの様に言てお優しくして下さい。それから大はく大安心でございます。先達でも御新造様の仰しやるには此の八月一日には改進黨の第七改稱節に旦那も妾も招待を受けて居るが女だつても交際を廣くしなくつては否ないから妾の名代に行つて御覽と仰しやつて此の様な美しい洋服と腕輪まで悉皆拵へて頂きまして議會の場所へも初めて出て見ます。シ城日明治女學校へ通學をさせて頂きますのも皆んな此方様の御蔭でございます(孝)ア、爾でしたか。僕もマア素願通り先日全科卒業試験を受けて漸く卒業しましたが實は當夏も歸省したいとは思つたけれど試験前で大變に氣忙しなかつたから歸省を見合はしたの。とんと國の事情も知らんであつたが一體お前さんの出京は卓一さんの事に就てといふ譯かネ。(孝)イ、エ誠ににお恥かしいお話しですけれど

も森村の倅に拐引されました(孝)エ、何だツて權一郎に拐引された夫りやア何も怪しからぬ、イヤ實に残念だ、ハ、ア爾かエ、悉皆那奴に一杯散られたかエ、忌々しい飛でもない事をしたなア(孝)貴君、權一郎にお逢てございますか(孝)逢た處か立派に一杯喰されしました、何して遣らう實に何も、どう考へても馬鹿々々しく愚弄されたもんだ(孝)貴君、何か那の男に(孝)何か處ちやアない恐れ入りました。第サ、ド、何も餘程僕は馬鹿だ(孝)何いふ事を致したのございませう(孝)何の斯の有りやアしません餘り馬鹿氣サ加減が修らないのでお話しにも成らない一件サ。直なる人心餘程喜怒哀の感情甚だしきものゝあらねば齋藤は滿腔怒りに閉塞せられて他に顧みる暇もなく唯點を裁判すべき條理を探りて仰らより案じて頻りに詰問する阿雪に答ふる詞さへ口頭よりのみ發し居たり。時しも主人山田文治は客に面接せんが爲め今此の室の廊下を歩むに阿雪が親しく男に對して懇話の聲の漏れしかば心竊かに訝疑て歩みを止め所爲るやう儒教を以て德育に制劃されたる昔へすら關隙を截り牆壁を踰え密會野合の醜聲は社會の上を包藏したるに今は男女同席して

互ひに親しく交らふを最も珍重せる時なれば
或ひは淫奔多情の男女は徳義を破り禮節を渝り
て智徳の未だ涵育乏しく爲めに通義を汚貨とし
て社交を潰すものなしとせず阿雪の如きも一年
足らず見るも難恨臥家に在り男女膝を交へつゝ
心の欲せざるばかりに契りに籠てありける者ゆ
ゑ一朝自由の天地に出て心に欲する男に會ひ
なば下流の女子が醜を學びて恥辱を忘るゝこと
なしとも唯一概には定め難し果して然るや否ざ
るやは今此の二人が問答を聞ば直ちに知り得べ
しと心に語ねて心に裁し扉に耳を欲て居たるが
櫛に心に訝疑しは幸ひにして徒勞と化り敵客
は豫て清廉にて淡泊無類の齋藤なりしに知臺の
餘りに敏捷なりしを獨り肚にて失笑し戸外に在
りて齋藤を呼立たれば例の如く大きに周章した
る體にて阿雪に禮をも施さず卒然として出來り
しを文治は頻りに微笑しつ自ら先に東道をして
風入の好き應接所へ伴ひ入れつゝ座を分ち親し
き中の禮儀も淡く

(文)イヤ誠にお暑い所を悪くお呼立申して甚
だ失敬でした別段御招待申すと云ふほどの御
馳走もないんだけれど君もマア滞ほりなく卒
業したから一つは夫れを祝ひ一つは又少々内
談もあつたから夕景からの風を先づ響應心

で實は鳥渡兼書を上げた譯で、なアに別に
合客といふ程の人もないのサ外に二人來る人
がある筈だが是も皆君の知己ばかりで少しも
遠慮な人は來ないヨ、ア、(孝)夫りやア何も
恐縮しました疾うから實は先生をお訪ね申
さうと思つて居ましたが思つたり仕たりは出
來ないと原則で不本意ながら意外の御無沙汰
何うかマア悪からず(文)夫なに改まつちやア
暑くつて堪るまい僕は性來の磊落であるのに
夏は實に恐れる方だからモウ此の通り君もマ
ア其の上着でも脱給へ君、君は今、化粧室で
一處女と何だか頻りにスピーキングして居た
様だツたが宜しく求婚の下組ぢやアないか
夫んなら爾で秘密手段は廢し給へ公然と言へ
ば随分僕も盡力しないものでもないヨ(孝)馬
鹿な事を言ふ人だ此りやア何うも實に恐れ入
つた先生は餘程邪推深い人だ、那りやア君僕
の朋友の令妹だ(文)朋友の妹だつて必らず
女房に出來ないといふものぢやアあるまい、
夫りやア何でもないが君が既に那の女と親密
の語を交へる以上は彼の兄と君との間は
最早和解したらうネ(孝)何故(文)爾ぢやアな
いか那れ程現在の妹に親密な話をする位だ
から越山君と君との間も定めて和解したらう

と想像されるヨ(孝)夫りやア否ない越山は君
恩不知だものを、僕は卓一に面會すること
を好まんなから今日まで決して面接しないネ、第
一僕の處へ來ようといふのがモウ爾して瞞
着しようといふ精神だから僕は誓つて那の人
物に逢ふのは謝絶する氣です(文)夫ぢやア何
か君、君は立派な法學士でありながら片言を
以て訴へを定めようといふ精神だね、エ、然
もなけりやア何も其人に逢て果して心術が腐
敗してるか但しは却て是が潔白であつて告訴
人が何か爲にする所があつて誣告したのであ
るかを判定しようともせず唯自分の信用して
る人が前後同じく斯々言つたから全く越山は
恩不知だ徳義上の罪人だ法律の罪人だそんな
者には接近ない方がいゝと任意の口供も取ら
ずに微弱な證據物件を憑んで直ちに判決を
下さすのは甚だしい苛刻の裁判だらうぢやアな
いか、君は聞ば學位を取ると直に田舎へ歸つ
て代言士になり十分に地方人民の權利を保護
して自治權を興へようといふ目的だといふ事
だが夫んならば猶更の事那れ程地方自治に熱心
して集權の弊害を怒り東京に居れば随分何處
へ向けても取しくない腕を持って居ながら自分
が卒先して地方の平均を得ようといふ精進で

困難にも驚かず田舎へ引込んで居る越山君と結合を堅くして置かないのは萬事につけて不利益だらうと考へるヨ、殊に越山の公明正大なることは僕が何處までも保證するから實は君と越山との間を調停しようと思つて今日君を招いたのサ、マア能く熟考して見給へ此の判決は何しても君が精神にある擬律の錯誤に相違ないから

ト篤實といふ二字の他に聊か混淆するものなく齒に衣着せぬ山田文治が熱心の意を面に表はし力を極めて勸解するに同より孝も曾てより山田が清廉潔白にて殊に義侠の心に富み文壇上の老将たり輿論の泉源たるに足る志士なることを信する上に我が目的なる自治論の同感なるより十分に信用したる人なるゆゑ内心少しく動き初めたる色を早くも山田は見取り起て戸口の處に到り

(文)越山君々々、少しく用事があるから來て呉給へ(孝)先生人が悪いな越山君が來て居るのかエ(冬)構ふものか却て君の精神が分つて互ひに腔底を叩くのに便利ぢやアないか僕は好んで仲裁人の勞を取るのだから決して雙方の不利益に成る事はしやアしないヨ(孝)先生、夫へ參りましても宜しうございますか

(文)オ、越山君、サア是へ掛給へ(孝)御免下さいまし、イヤ齋藤君其後はかけ違つて御目に懸りませんでしたが先づ君にも御壯健で何より(孝)ハイ、君もマア例時健康で……

(文)何となく言語にまで爾確執があつちやア困るなア、仕方がない僕が一應齋藤君の疑惑を解うヨ、齋藤君、君が越山君を道德のない人だと信じたのは彼の夾囊の所在が不分明になつたのと越山君が歸郷以來葉書一通送らなかつたのと二點にあるだらう就中夾囊の一件が根本となつて手紙のないのが則ち君の心に向つて越山君が盗用したに違ひないといふ確信を與へたのだらうが併し此を能く考察すべしサ、ネエ君、一體越山君の人となりは君も既に了知して居るだらう然るに君が其の精神を熟知して居るにも拘はらず一人の離開策に乗じて之れを確信したといふのは餘り輕薄な話説ぢやアあるまいか、元來書信の事は僕も實に不思議に思つて居たが全く三侯驛郵便局に疑ひかゝつたので内實是れを搜索して見ると案の定森村剛藏の手に悉皆落て仕舞たのサ此の事に就ちやア異日公然たる處置を施す積りだが夫れよりか此の大疑問の原則たる夾囊の事件を仔細に吟味して見ると其の

罪の第一はお氣の毒だが齋藤君、君に推さなかつちやア、成ないネエ、何故と言ひ給へ君の性來が如何粗忽だといへ夫れを置忘れさへしなければ畢竟此な疑問も起りやアしないのだらう併し斯言ちまつては餘り酷に涉るから第二の罪犯を首として糾問して見るに越山君の罪ではなく全く君が無二の信友離開者其の人の罪で現在其の人物は君が信用して居たにも拘はらず法科大學を放逐せられて中島君の處へ書生に住込んだが此處でも不正の所爲があつて過日遂に放逐サ(孝)齋藤さん、君に向つて僕から辯解するのも可笑な譯ですが僕は全く彼の先生に屈けたに違ひは有ません彼の先生は何故か僕を恨んでると見え現に君と僕とを離開したにも飽足らず僕を中島先生に會せるのを妬んで先生も阿今さんも静岡へ入つしやつたと言て一時交通の道を斷たのでも大概其の心術は分りませう僕は御承知の通り貧窮はして居るが大變自己の名誉といふものを重んじて居るから天地に誓つて德義を破るやうな事はしない精神です俯仰天地に愧ず瀟灑洗ふが如しと云ふ行爲を保つて居る積りですから決して自ら惡名を買ふことは致しません退いて考へて見ると全く

彼の先生が放蕩であつた履歴に就て見れば若しや一時の融通に私借したのではあるまいかと思はれるが求めて人の非を計くでもないから此の點は宜しく君の判斷に任せませうト擧めし眉を少しく開きて微笑を帶つゝ演述する吐音朗々瀾みなければ齋藤も亦再應再四の辯解といひ殊に其の證據の至つては微弱なりしと告知者が身の方正ならぬと阿今が再度の辯護とを彼此思ひ比ぶるに斯く人身の譏譽に係れる一大事件を輕信せし我が精神のうたてくして白く艶ある顔色の俄かに赤く成ゆきて額に汗を冷汗をハンカチーフに拭ひも敢ず腫を膝に注ぎしまゝ

(孝)何も自分ながら僕には愛想が盡つちまふ、了解したヨ、分つたヨ、悉皆滿腔の疑問が氷解しました、其の罪僕にあり／＼決して人を疑ひもしなければ又恨みもしない到底僕の精神が惑つたからの事だと始めて此に悔悟したヨ、就ては今悔悟をしなくツチャア成らない事があるマア聞て呉給へ實は森村権一郎に會た節君の事から訴訟の成立を語つたのサ、處が彼奴のいふにヤア私も其の事で至急春川伯に面謁を願ひたいと思つて來たのだが不案内の田舎漢は仕様のないもので東京へ着た

晩にポン引に欺かれて此の通りの體裁に成たと、哀れッばい談話をするから僕も氣の毒だと思つて少々金を貸て遣たが先刻お雪さんに逢て聞て見りやア全く偽りださうです、是も畢竟君と相結託すべき身が吳越の思ひをして居た失策で今更非常に後悔して居るのサ(文其いつア悪い事をしたなア併しマア宜いワ時に爾和解さへすれば僕は甚だ満足だから何にもないが仲直りに一杯遺給へ)(孝夫は何も種々御慮を(孝)エ、ッ先生過日お話しあつた同志同遊會は愈々準備が整つたかエ(文)オ、爾だ丁度いゝや、其節は君歐洲流でお雪さんを同伴して行給はんか越山君も阿今さんを同伴する積りに成てるから(孝)エ、何だか極りが悪いネエ(文)アに構ふものか

第十九回 こぼれ秋

君子の交り水の如く其の淡きこと斯の如し人あり若しも竊見せんには果して何と評すべきか

喝采の聲忍ヶ岡の杜の木を葉を飛すが如く、拍手の音不忍の池の汀を決すに似て精養軒の庭園に響き渡るは會てより各新聞紙に廣告ありし公同同遊會に於て今しも紳士が適切な演説を

なし了りたる最後の拍手喝采なるべし時十月の下旬にして秋色全く山野を彩り金風未だ猛烈ならねば落葉箱に朽んとせず紅葉しても黄ばみたる儘翠に交りて興を送りぬ孤雲獨鳥斷腸を促せど紅葉廢れず清静を呈せり東瀛に菊あり南苑に芙蓉あり西岸北丘錦を繚る千種の花は色鮮にして萼若厚く深き所に候蟲の聲蕭瑟たり眺望に富む精養軒の堂裡前栽限なきまでに參會したる紳士淑女は今演説の果たるに一齊國歌を朗誦して各自に席を離れつゝ知るも知らぬも刺を通じ握手を施し懇懇に知懇を求めてありける此一團の紳士淑女は何等の點より斯速に集合したりと尋るに各自の最も渴望する地方自治といへる心の口入人たりしに過ず會主と覺しき二三の紳士自己の夫人と俱に晚餐に意を用ふる如く仕童に命じて園中に多くの卓を排置せしめ花を飾り菓子盛る各種の酒を瓶に湛へて血を適宜の處に置き此の多勢なる會衆を一先づ卓の前に起しめ美汁の皿と食匙とを一人毎に渡せしめ「ナフキン」の裡に麴包を包みて小刀と肉刺とを取揃へ盡と其に以前の如く一人一人に配布なきに似て鹽梅せる美汁を配るに手順整ひ注意盡して最も客を感動せしむ次には巨大の器に盛たるビール、テーキにキャベツ

捲、フライ魚に鳥のコロッケ及びサラダに充
 るが爲め牛肉、ロースと、亞米利加チサとを堆か
 きまで盛上る盤を適宜に排置し終れば此の時
 會員一同に羹汁を食し終りし折とて直ちに好
 める食物を己れが皿に取るゝに此際非常の
 混雜あるは總て普通の立食に免かれ難き所な
 れど會衆孰れも殷勤にて各々夫人淑女の爲に
 先づ食物を取入れしかば整然として混雜せず
 菓子菓物をポツケツトに収めて孰れも座を撰み
 酒食の間に談笑しつゝ日の傾くをも知らざり
 しは最も愉快の盛饌なりし山田文治と中島とは
 今日會主の一人なるゆゑ直に伴ひ難ければ齋
 藤孝と越山とは阿今と阿雪を誘ひ適宜に取たる
 皿を携へ山の半を下り往きて池に臨める四阿に
 人のなきこそ幸ひなれとて四人齊しく此に會し
 つ羨ましきまで陳じく

(考)越山君、君の今のスピーチは非常に能く
 出来たヨ中島君の評には國會の演説として
 聞くべき價值がある英國の新議員が救旨
 に奉答する時の演説なんぞア到底是れ程の價
 値はないと言て居たが實に力があつて穩當で
 殊に品格の正しかつたのにヤア敬服した「此
 の有力なる中央政府の都下に土着する者百
 萬有奇」とは決して之れが繁華を表するに足る

丈けの人口とは申されません面積の廣大な
 る四方里に達せるは世界果して幾ヶ所か有り
 ませう實に世界第三に位する都府ではありま
 せんか試みに一方里五十萬人を以て適度とす
 れば此の東京には二百萬の人口を持たなくて
 は成ますまい然るに僅々百萬有奇恥も貧民
 無産業者を除けば纔に四十萬口に過ぎるに諸
 君果して如何なる原因の依て来る所と想像せ
 られますか」と疑問を設けて置いて直に都會
 殊に中央政府は一國の冷熱を知るの寒暖計で
 ある如何温度を裝飾して上騰せしめませう
 とも元々時候の冷かなるものなれば須臾にし
 て水銀は本位に復し其の寒狀を示すや當然な
 り諸君は佛帝拿破崙がボナパルト家の威福を
 永續せんが爲に全國良民の血を以て巴里全
 都を染たる事を記憶せられませう拿破崙の日
 的たる學者紳士の地方に在るを思ひ何か喧し
 き小理窟を言ふものを田舎に置ないやうにし
 て中央政府に集めて仕舞は最早我が一世の事
 業は成就するであらうと思ひ民力を勞らし
 て此の大土木を興したもので有ますが巴里全
 都の裝飾は全く佛國疲弊の商標と化し去り
 しを如何せん我が賢明なる内閣大臣は民情を
 採るに銳意熱心なる方々でありますれば我が

輩は必ず中央政府の人口繁殖せず商業の萎
 靡衰退せるを見て地方自治の今日に忽諾なら
 ぬことを察せられるであらうと信じて居りま
 す然れば名譽あり知識あり資力ある紳士の
 幽谷を出で喬木に遷ることをのみ計られず宜
 しく都會に於て得たる知識を蠢愚隣むべき
 吾々の父母の州に齎らして親愛なる故人を進
 め中央政府と其の權衡を均うして國本を培養
 するに盡力せられたであらうならば彼の寒暖
 計も眞正の温度を進めて日本帝國の富強なる
 商標を掲ぐるに至りませう越山は南枝に菓
 をくひ胡馬は北風に嘶く鳥獸ですら瞬時も
 故郷を懷ふの情は歇みませんに焉ぞ鳥獸に恥
 るなき人の多きや」と説進んで行時は思は
 らずヒヤ／＼と叫んだヨ、如何も實に何とも言
 へない愉快であつたア、愉快々々々々

ト我が精神に適合せるまゝ頻りに之れを贅賞す
 る齋藤孝が友愛なる言語を側へに聽居たる阿今
 は意中の良人が其の貧困にも拘はらず卓華の
 見更に渝らず斯く名譽ある集合に斯く價值ある
 演説をなしたる事の喜ばしく足らぬながら我が
 得たる知識を叩いて此の人に貞操節義を盡さん
 と誓へる心は一層より又一層を進めたり阿雪も
 兄が艱難にも掛けず擁ます自治主義を貫徹す

るに嬉しくて之れを稱へし齋藤の詞に黄金の色を研たる思ひをなせば賛成者の常職の才の懐しく慈愛の厚き此の人に心を籠て事へなば兄の伎倆も益々顯れ父母も心を安んずべしと其の目的は異れども敬愛の意の厚きこと同一線に注ぐなるべし卓一はまた齋藤が贊賞の語の甚だしきに阿今の笑ひを招かんかと取むくつけき顔色に笑ひを含めて圓なる鋭き眼を半閉ぢ

(惠)久しく公會の演説をしなかつたから實は一生懸命に述べたけれど席上の規律が儼然として居たので何も悉皆場臆れがして吞れツちまつたからモウ何を言たんだか眼も昏めば精神も錯亂して順序も論點も支離滅裂に成たけれど所謂驕虎の勢ひで中から下る譯にも往ず何やら斯やら乗着てしまつたのサ、君も何か速りやア宜つたに(孝)僕か、僕は裁判上の自治と罪囚の自由を論じようと思つたが何かすると成法講義に涉る嫌ひがあつたから廢ツちまつたが何して君の演説のやうに論理を正しくして實例を統計學から引出して來て自治は獨立の基である事交通の自由所有の權利に論及して自治は天理であるといふ段まで仔細に論辯する事は中々出來やアしないヨ、中島君が瑞西國の實況を説て其の人民が自己の

地方あることを知て瑞西國あることを知らな
い様に成ても餘り辭し過て困るといふ議論は
一寸頂門の一鍼で面白かつたが瑞西國の政
體が斯も美事であつて最爾たる山間の一小國
でありながら歐洲平和の中心となつた原因を
も少し詳しく論じて貰ひたかつたネエ、右も
左之れが懸賞演説であつたなら君は第一の
賞金を得るに違ひないヨア、爾ですネエ阿
今さん(今)何も譯りませんけれど何だか大層
皆さんが感じ入つてお出に成ました様でした
ヨ(惠)兄の演説よりやア齋藤さんのお褒めさ
り方が餘程大出來の様でございしますワ(孝)此
りやアい驚いたお雪さんもモウ隅へは置ませ
んナ(惠)イ、エ眞個ですヨ正直のお説しは
ネ今日の演説はモウ外日だから考へて居たン
でございしますアノ一齋藤さん貴君が兄と始め
て御面會に成ました時ネエ、日が蔭つてから
妾が兄と一緒に御庭を散歩致しましたらう、
那の時情々番町の方を見て居まして向うに見
える三階造は何だと申しますから那れが春川
さんの御邸だと申しましたのよヨ、底で何か
また考へて居りますから妾の了簡では控訴
院の裁判も敗訴しやらに成ましたのでお邸を
見ても腹が立んだらうと存じましたらネ全く

爾ちやアございませんで今日に成て見ると皆
な演説の下組でございしました(今)爾でござい
ませう何して(孝)成程々々實に妙だ
此の噂にて携へたる酒も概ね盡たる頃山の上
より中島博智頭に白毛の假髪を頂きフロック
コートを正しく着せし上には錦の「ガテン」(羅
馬古代の法衣にして法官、狀師等の正式に着す
る物)を纏ひ左りの胸には龍勅の法學院にて受
領せる名譽の輝く金牌を掲げ徳望翻き形装なが
らに手に一瓶のシャンパン酒を持ち皿に溢るゝ
七面鳥のガランデ焼を小脇に抱へて儼然とせる
容貌に笑ひを含めて下り來つ此の四阿の天然臺
に酒肉に置いて空榻に憑り
(博)諸君は大層いゝ處を發見したな吾輩もお
仲間入をさせて貰はう其の代りシャンパンと
ガランデを上納しよう(孝)今日は會主で定
をしお骨が折れよう(孝)貴婦人が交る宴會は
何しても洋行をなすつた方でない失敬な事
が有て否ますまい(博)併し英國の様に敬意を
表さなくつても宜から別段氣骨も折ないのサ
(孝)英國では夫なに女の勢ひが強うございま
すか(博)女尊男卑といふのは米國の風だけれ
ど英國では女の徳を高くしようといふ精神で
中等以上の婦人は公園の散歩とか已を得ない

用向とかでなくツては餘り外出をしない事に成て居て市中を素見て歩いたり茶屋小屋へ遣入たりする者は殆どないと言つていゝ位な氣風サ夫かと言て歐洲一般に此の風俗があるかと言は佛蘭西の婦人は夕方公園へ往くのを目録に加へて居る位だシ白耳義のブリュセーム府邊では珈琲舗といつて其質酒も賣れば料理もする舗へ婦人連で押込て硝破戸の裏から往來を見ながら愧る景色もなく酒食してゐるのを見かけたが龍動に居る目で見ると餘程野卑に見えたから大方是は下等の婦人だらうと思つて開て見たら是が上流婦人の風習ださうだ、マア何方かと言は英國の風を學んだ方が宜ささうだネエ、オ、餘計な事を飽舌て居て肝腎な事を忘れて居た諸君聞て呉給へ吾輩は淑女から決闘狀を附られたヨ(考)何ですとエ淑女から決闘狀を附けたツて(考)オヤマア夫な強い女が日本にもございますのネエ(今)お兄イさん氣遣ひな事はございせんか(傳)なアに大丈夫だから決して案じないがい(思)先生、其の婦人は何でございます佛蘭西臭氣のある女でなけりやア夫な狂氣じみた事は言ますまい(今)大概モウ其の人は了解て居りますヨ艶子さんでございませう(考)エ

エ那の何時だツけエー、ア、中洲の遊園で面會した春川の淫奔娘ですか那の反ツ返りぢやア随分決闘位な事は言出し難まいヨ(思)中々輕々しく論じ去る問題では有りません艶子とかいふ處女には恥か一度面會した事がございしましたが洋行をしただけに中々活潑な氣象があつて餘程獨逸政略に熱心なやうに思はれました(今)何にしる内閣大臣の御娘さんですから政治上の事も能く種々と御存じでございしますが實の處をお話し申しますと斯いふ譯でございしますヨ、平素は何でも物事は手の届くだけ干渉して十分に世話をするものがないと總て放恣に流れ易く折角の事業も秋序が整はなide皆な廢絶て仕舞ものだから干渉政略でなければ文明も進まないし國を富ますことも出来ねば軍備を擴張して國威を輝かす事なんぞは猶更出來るものぢやアないと思しやつてでしたが何いふ譯だか御普請が落成つた時後招待を受まして兄と一緒に上つた節には男女の間に立入て親が干渉するのは恐く夫婦の天縁を害ねて子孫にまで其の卑屈精神が遺傳するものだから何でも自由結婚でなくツては人種の改良も六かしい妾は先じて自由結婚の模範になる積りだと仰しやいまして訝う妾の

氣を取るやうな風が見えました處全く兄に氣があつて(傳)およしヨ後で解ることだアネ(考)オツと言論の自由を破るまい、ナ、成ほど夫れから(今)そんなに申しますけれどもネ、兄も其實彼の方のお美しいのに瞞着せられて一時は精神に計して居たンでございしますヨ、其後も兄が參らんからと言て宅へお尋ね下さいました節竊とヒュゴーの戀詩を遣して入しつたものですから手段が面白くございませんで兄に遠廻しに意見をしましたヨ、ですけれども内心の愛情が十分盛んなものですから妾が爲を思つて言た事も悪く人の精神を干渉するとか何とか言て大層腹を立て居ましたが側で支へるものがある程敢爲の勇氣を増すものと見えまして常に艶子さんの事が心に絶えせんけれども急かしいので先様満足と與へる事が出来ませず自分も氣を散じることがないやうに見受けましたが訴訟の鑑定を頼まれた時に彼の方の仰しやるには今日の御鑑定一つで天縁が定まるのですから何か其のお積りとの事を伺ひまして兄も實は先様の引力に程餘引寄せられて居たに違ひ有ません(傳)餘計な事を言なくツても宜しい、モウ僕が自白すらア、夫りやア正直な處は



(墨田本原)

知識も進んで居り新道徳に育られて居るから生涯の苦樂を煩つても苦しくあるまいと信じて居たのサ、然るに今の一語で到底勝訴の目的も就ず殊には越山君を敵手にするのは甚だ好ましくもなし第一若し僕が代言に成て勝て見ると取も直さず集権家の砲彈となつて分権家の本營を破壊するやうなものだから固より僕の好んで爲さる所サ、夫ゆゑ斷然たる答書を送つたから艶子の目的は全く相違して

如何も念慮に堪へないのが發して此の慘劇を演じようといふまでに及んだのだらう何も其の外に怨みを受ける覺はない(卓)私故に夫な事が有ましては誠に當惑致しますが(孝)夫りやア入らざる心配だから廢給へ先生、先生は何する積りかヂスレーリに於るオーロンネルを氣取る精神かエ(博)なアに應不應の答へはしなくつても又臨機之處置があるサ如此談話に日も昏れて月なき空に星辰の光は小珠を散すに似て東寂山頭白露滿ち小西湖邊萬蟲鳴く時刻を計りて來りけん肥馬に鞭ち輕車を驅りて袴腰まで走させつ此處より車を下る男女の風俗如何と觀察するに婦人は黒く折立たるボンネットを頭に戴き栗色綴子に横ヒダを茂く取りたる背割の服着て黒地に藍を綴交たる衿飾りを簡略に結び留針ととも用ゐぬは光を避る爲なるべし然れども面の白くして天の生せる麗質のみは夜目にも覆ふこと能はず男も美男の相に見ゆれど服粧いたく劣りしは淑女が同伴にあらずして全く從者と見受られたり(麗)昏くつて能くは分らないが向うの方から大分歸る人があるやうだから能く氣をつけて吳なヨ(種)大丈夫でございます中島の風俗は晝間のうちに悉皆見て置ましたから人違ひ

なんざア決して致しません併し過日から申し上ます通り最早此場に迫んで未練なぞをお出しなすつちやア否ませんぞ(麗)宜しいヨ妾に違約した計かりか御父様へ抵抗人だものを一生懸命だアネ(種)度々申し上ましたから御存じでもございませうが實に彼の男は社會を惑亂する人物ですから茲で威力を示し損なふと何な事に成るかも知れません宜しうございますか(麗)靜かにしてお出、「ガラン」を掛けて來たのが爾だらう(種)ヘイア、那でございます

ト騒ぎ示す間もなく心に思ふよしありてか狀師中島博智は妹阿今を伴ひて唯二人のみ一歩後れつ車にとりて乗ずして稻山内を出外るゝ折前途を遮る男女二人(種)少馬御控へ下さいまし(麗)艶子でございます御約束の通り決闘の御用意を願ひますと言ふ詞さへ畢らぬに曳固めたる拳銃の引金落て轟然と一發放ちし彈丸は腕の戦ふに高く反れ空しく松樹の小枝を折らせて唯徒らに怨みなき宿鶉の眠りを駭かしたり

第二十回

還樂城

鹿鳴を以て館に號く既に樽俎を設けて遊飲歡

食の場たるを知るべし千里の萬客を一室に會して款みを通じ交りを結ぶは文明世界の一美事にして擴張すべき事業なれば此の會堂の設けにして擴張すべき事業なれば此の會堂の設けあるは日本社交の風采を示すに亦必要のものといふべし園外千歩紅青を織り牆内千歩紫黃を繞る圍鹿白鳥人を友とし燕雀鵲鳴を交ふ巍然たる樓閣白亜光りを放ち遠隔たる樹亭巖壁翠深し殊に頃日は名譽ある貴婦人令嬢の會衆を募りて共立病院養育院福田會育院等無告の窮民を救済すべき諸院へ義捐せしが爲めに化粧を減じて原材を賸ひ修家育兒の餘暇を偷みて玉腕を勞し纖手を瘦しめ製作したる物品を露がん爲に開きたる婦人慈善會の開會中とて日章の國旗軟風に翻めき綠葉彩花匂ひ芳しく婢娟たる婦人窈窕たる淑女青襟を誇り錦裳を襲て觀を圖はし綺を競ひ儼然犯すべからざる風致のうちに笑ひを賣り媚を衍ひ紳士を待つ休憩所より賣店に入り降つて茶店の設けあり富有の紳士は此に至りて價を論ぜず金を散して仁惠慈愛を幫くるを榮譽と爲せるは京西とも其の情渝ることあらすや務めて慈善會に車を趨れば鹿鳴館の繁昌は形容すべき詞もあらず富貴國色を發して萬蝶戀に聚まる香風十里に芬々として貨を一館の裡に抛つ有指男子の群に加

はり狀師中島博智は妹阿今の會員となり茶店を設けて人を待より一回多少の金錢を棄んと約束したりければ歸郷の日限切迫せる學士齋藤孝を伴ひ歩みを爰に運びたり

(博) 齋藤さん君も先づ目的を達して法學士になつたからモウ言ふ處はないが君の性質が至つて輕卒だから何かすると事を過つ事がないとも言れないが外の事と違つて代言士といふ者は自分の一舉一動が人の權利義務に大關係を及ぼすものだから能く謹んで性來の粗忽者を改良しなくつては否ないヨ夫れに田舎へ行つたら餘程君の身體が人民との關係を厚うするから第一信用を害さないやうに能く着實に沈靜して溫厚に事を取らんと困ることが出來するぜ是れは僕が第一に君への餞別だ(孝) イヤ何も難有に先生の御厚意は何か空しくしない積りで何事も十分に落着いて事を取る精神だが何か此の後も忌憚なく御忠告を願ひます、夫れは爾うと彼の激烈なる諍闘の結果は何うなつたネ(博) 那れか實に馬鹿な話しサ人の毀譽に涉ることだから大きな聲では言ないことだが秘密主義は妙に甘い關係を持つたものでマア開始へ彼がスプリングリヴァー(春川の英語)の娘でなけりやア必ず

謀殺未遂になつたに相違あるまいが教唆者も共に無事息災サ、元來合意を得ない諍闘を挑んだといふものは一つは彼の處女が遺憾から起つたのだけれど一には又上告事件にも大關係があつて森村權一郎といふ奴が父の代理者だと偽つて亞細亞的比馬克(是も春川を指す)に阿諛んだ折から彼女が僕の越山を助ける事を聞て恨み日頃に百倍して居るのを奸智に長た丈に逸くも推測して頻りと煽動したのだとサ、馬鹿な話しちやアないか僕が越山の代言となりさへしなけりやア此の上告も必らず勝と見込だ處が爾いふ次第だから彼の一發の彈丸には種々無量の意味が含蓄して居たのが空しく反て歸する所を知らずとは先方の恨みも其の歸する所を知らずだらうヨ、併し署での申し立には斃子は發狂した譯で森村は全く看護を怠つた不注意から斯いふ次第に及んだといふ事に出來上り表面は先づ是で落着いたといふものサ(孝) 奇怪々々實に奇怪だ、夫ちやア固より彼女の戀慕も全く廢絶して君は意中の繩束を脱却したといふものだね、エ、爾だらう、時に彼女も此の會衆の一人であるから今日は此へ出店して居るだらう、ナニ、亞細亞的比馬克も來て居るとエ、

其奴ア訝しい、夫は爾と今日は馳か宣告がある筈ぢやアないか何したエ大審院は（傳越山）を出頭させて置たから宣告次第に此の茶店まで来る約束で入場券も遣て置たから今に否やは知れるだらう（考）何だナ甘く行たか知らん眞個に此んな事が例になると地方といふものは恰で日本の愛蘭國に成ちまふが非戯ぢやアない惡い例程行はれ易いものはないから若し間違つた日にやア愈々集權の資本を拵へて遣るやうなものだ（傳）なアに大丈夫だよ被上告者にもつと混入た辯論があるかと思つたら實に薄弱極る論點を後生大事に保護してゐるのだから十分に破り盡して置たのサ、だから僕はモウ必勝を期して居るのだ、君決して樂になくつても宜しい

ないか突然考へ込んで頻りに溜息ばかり叩て居るから僕にやア判然譯が分らない、エ、何したんだ爾言たまへ（考）別段是といふ厭もないんだけど妙な事はフツと神經に感じたのサ相變らずで珍しい事もないけれど此の慈善會の性質から鹿鳴館の繁昌な處を見るにつけて思ひ出すのは越山君の精神サ、那れ程分權主義を固執して動かない人だから若し此の盛況を見せたならば果して何様な感覺を起すだらう、私の心に之れを問うて見れば越山君の精神には非常の感動を興へるだらうと思量するネエ中央集權の首府とは言ながら不景氣不景氣といふ中から斯して先づ慈善會などを企てる人があつて千金の客を待つはいゝが若も之れが眞正に不景氣で人心が沈淪してゐる時であつたならば僕は必ず此の慈愛なる企ても畫餅に屬するだらうと考へる、固より地方の景氣が直つて殖産興業も熾んになり一體が潤澤になつた暁明に東京の繁昌するのは至當の話のだが、今は着給へ、地方では豊年だらうが滿作だらうが夫な事にやア頓着なく一體に萎靡枯凋して居て往處として飢餓凍餒の聲を聞さるはないのに此の影響が爰ぞといつて嚴しく東京に及ぼして來ないのには

（傳）齋藤さん君は何を夫なに考へて居るんだ（考）ナニ何でもありません（傳）訝しいぢやア

何か原因がなくつては濟まい、歸する所が國民の最大多數即ち地方人民が夙に星を戴いて出で夜に月を踏で歸り雨雪を冒して風旱を凌いで、席更に温かならず煙笠綠蓑乾くに違あらぬといふ艱難辛苦を以て最少數なる東京を肥すからであるだらうと考へる三千六百萬の人民が力を協せて三十六分の一なる府下一百萬の同胞を養育して遣るから全く東京の盛衰が地方と相伴はない原因に相違ない、マア物を積つて見給へ、年々一たび東京へ輸入する歳入は平均七千五百萬圓では是が皆な平等に租税を納める者としても一人頭に一圓七十二錢餘だから首府の者は遂に百七十二萬圓しか負擔しないだらう、然るに其の金の重なるものが何かといふに内國稅六千四百八十八萬圓の内四千三百二十萬圓といふものは地租ぢやアないか面積から言つた日にやア東京は誠に狭い處だからマア雜と積もつて可分の、以下に倣して居るに違ひないが其の代りに他の國稅を納めるものが多いから是は平均を得て居るものとして其の七千五百萬圓の内直接に割戻して貰ふ地方廳の定額金が警視廳北海道を加へて六百八十五萬圓だから實際中央政府へ納めるのは六千八百十

五萬圓即ち百分の九餘りを取つて後とを中央政費へ納めるといふ形ちサネエ、斯いつた處が僕は政府が多いといふのぢやアないヨ集權政府だに依つて此の金を使用する場所は多く東京だもんだからいきほひ夫丈けの潤滑を得る道理だらう、若しも之れが自治政成であつたならば其地方々々へ散じて同じ金を集めるにしても人氣も違へば譯も違つて直接に此の經濟から生ずる利益を享るといつたものだき底で僕は越山君がまた第二の感奮を起すだらうと考へるのは外でもないが東京は成程繁華だ、繁華には違ひないけれども其割に事業が興ない、事業が起らないから商賈の活機がない、是は抑も何いふ譯だらうといふに唯六千八百十五萬圓の幾分かが繁華を助けて呉るので實際政費が少くつて政府でも十分手を廣げて呉る事が出来ないから地方に至つては殖産興業の道が立ないに依て東京へ送り込で事業を振起させる原資が乏しいのである、併しながら何でも六千八百十五萬圓の中心だけに學生達の事業家だのといふ至つて平均を得るに大切な業を賣たり知識を沽たりする者が悉く集まつて仕舞地方には無能無力の者はばかり残るから猶更權衡を失して來

なので貧民ですら首府の者は病院を建て貰つたり育兒院だの養育院だのといふ者があつて其の資本を輔けるが爲には婦人が斯やつて慈善會を開くのだがさて是が妙なもので貴顯紳士が此へ集まつて居るから一體の不景氣にも拘らず此會へ金を棄る人もあるンだらう、マアサ是は至極い事だが此の貴婦人の目に若し地方といふ二字があつたなら何か男子を獎勵する法がありはしまいか、到底處が一にも東京二にも東京々々々々で東京以外に日本なしといふ一般の人氣を些と地方といふ廣大な金穴に轉じて貰ひたいものサネエ、實に越山が過日演た演説を聴て忽ち此の感情を惹起して來たのです(博君のやうに爾理窟はツかり言ちやア困るヨ、マア兎も角も賣店へ行て美人の顔でも見て不心を和け給へ)(考)ハ、ハ、ハ、何も理窟ツぼくて困るぢやア(博)ウム行て見よう

此に始めて兩人は足を轉じて館内に入り先づ號を遣て賣店を見るに數年前には大いに増りて婦人の動作熟練なし嬌態あれども卑猥ならず婦徳の進歩を示せしかば博君は先づ已を得ぬ知人の許にて四五點の品を贖ふに齋藤のみは貴族の夫人の物品を買ふを厭ひて故らに服裝質素の

夫人を探み金を棄るも最をかし時に多くの夫人に聞まれ此方に薔薇を進むれば彼方に毛絲の靴下を進め右に牡丹の柵を出せば左に小兒の頭巾を擡げ金囊口を閉るに暇なく手に其の品を受ける暇なく莞爾としたる容貌中に當惑の色顯はれたるを兩人誰かと之れを觀れば伯爵春川俊胤なり中島故と知らざる如く齋藤孝を促して足に速度を加へつゝ此の一區域を去て各賣店を縦覽なし最後に金を抱たんと望みを懸て來りける茶店に下り來りけり兄の姿を見るよりも阿今は椅子を離れ出で最と慇懃に會釋を施し

(今)お兄さん大層お早うございました、オヤ齋藤さん入ツしやいまし珈琲を上りますか御茶に致しませうか西洋菓子でもカステラでも外の御客様と違ひますから何なりとお好きなものを御望み遊せ其の代り御茶代は澤山戴きますから(考)如何も何も實に何も是りやア何も……(今)何でもございますサネエ何も盡しぢやア譯りませんヨ(考)恐れ入た固より何も(博)マアいゝからし掛給へ(考)感心々々お茶の出しツ振から御菓子の出し方儀式で行く茶店の姉さんだから御茶代の高いのも無理はない唯モウ何も無闇と恐れ入た、エーツとお今さんミスブリングリヴァーは何處の茶店

で……ト例の調子で尋ねるに阿今は艶子の先刻より此方を頻りに睨り居る故聞えやせんとい心を配り目を以て注意を促せど無聲の詞は齋藤の心裏の鼓膜を動かさざる手益々詰問の急なるに阿今も今は堪り得ず玉手を持て齋藤の視線を彼方に導けば艶子も今まで一心に恨みを籠て中島の唯一點に注射せる瞳を轉じて齋藤に遷せし時とて雙方とも一時に顔を反對の點に正しく音もせず腦裏に無量の意味を蓄へ知らざるものゝ如く爲したる形狀郊外秋盡き一陣の金風芒野を蹂躪して分倒したる越きあり春川伯は辛くして其の身を脱れ得たりしか登下始めて茶店に來り艶子が設けの椅子に凭りて髭の邊りを搔撫つゝ

(後)今日は酷い目に逢うた誰も彼も己を見たと無理に品物を持て來て押付居るから一つ買始めるとサア大變ぢや往先々々でも通さんから到頭平等に權利を與へて來たちやテ實は一纏めにして夫人の處と其方の處へ置うと思つたが爾中央へ集て仕舞ふ事は出來んものかい(艶)夫たりやマア御残念でございましたらう妾も今日は腹が立てゝ仕やうがないンで御在ますヨ、アレ御覽遊せ外の茶店へはそんなに御客がございますけれども妾の處

へは少しも參る人は御在ませんから外様の御助手ばかり致して居ますワ(後)構ふ事はない強迫して賣付るがよい、夫はさうと未だ權一郎は來んか儘かちやあるが判決書を見んうちに氣が休まらぬテ

此の間答を聞取て孝は何か喜悅の色を徐に面に表はしたるが判決といふ一言に阿今は越山卓一が今日を最後の落着の如何爲るかと案じ出し最も聲を低くして

(今)お兄いさん大審院の模様はお分りに成ましたか(博)實は此へ來る筈だから少々休息をして待合して居るのサ(今)何か都合よく參れば宜ございしますがネエ(考)地方の權理を殺ぐべき惡例を出すか細民の土地所有權理を正當に保護するかの境だから豈夫朴撰な裁判をしやアしない〇と言つゝ俄に高聲にて(考)來た來た、オイ君此だゝ、オイ越山君此所だよ此所だよ來たゝゝ

ト雀躍なすに衆人は何事なるかと目を屬す中にも艶子と春川伯とは心漸く動き初め彼方の舉動に注意する處へ越山が挨拶さへも爲さざるに逸くも孝はポケットの判決狀を取出して眼鏡を手早く掛る間に博智も亦剛に來り

(博)ドレゝ「上告原告曰ク正當ニ賣買ノ契

約ヲ爲サルニ先チ戸長ニ於テ地券ノ書替ヲナシ且其ノ地所ニ向ツテ側量標ヲ施シタルハ不當ノ所置ニシテ之レヲ稱シテ賣買ノ實アルモノト云フベカラズ原裁判及ビ控訴院ハ鉦川保在費トシテ原告ノ起シタル村債ノ別證ニ字神田ヲ抵當トス云々ノ明文アル以上ハ賣買ト云フヨリ寧ろ流質地ト云フベキモノナリ被告其地券書替ヲ促シ且測量標ヲ施コシタルハ決シテ不當ノ所爲ニ非ズト判定シタルハ錯誤モ亦タ甚ダシト云フ可シ抑モ該地所タル一村聯合ノ共有地ニアラズ各其地主ヲ異ニスルヲ以テ共同鉦川ノ類ト同一視スベキ者ニ非ズ況ンヤ別證ニ捺印セザルハ委任ナキ惣代兩三名ニノ神田所有主一同ノ果シテ之ヲ承認セルヤ否ヤヲ識別スル能ハザル者ニ於テヤヤ是即チ上告ヲ爲シ原裁判ノ全部ヲ破毀シ更ニ適正ノ判定アラシコトヲ希望スル要點ナリ(考)ヒヤヒヤ、被告の言柄は(博)鉦川貸金ノ性質タル單ニ鉦川保續ノ爲ノモノニ非ズ同川ノ一岸低ノ時ニ神田ニ灌漑スルノ愛アルヲ以テ堤防ヲ修築ノ一方ニ灌漑ヲ防ギ澤ヲ多クノ一方ニ漁業ニ便ナラシム名ハ鉦川保存ニアリト雖モ實ハ神田ト相聯關スルモノナリ故ニ別證ヲ徴シ本證ニ相應セシメタ



(源補本原)

ルニ付原告ニ於テ流賃地ノ譲與ヲ拒ノ權理
ナシ且神田ハ公共ノ含有ニ非ズト雖ドモ元
來一村ノ方ヲ協セテ之ヲ開キタル田地ニシテ
當初ハ實ニ平等均一ニ之ヲ割有シタルモ貧
富差ヲ生ズルト共ニ其ノ廣狹ヲ來シテ遂ニ
今日ノ狀態ニ及ベルモノナレバ事實上全ク
公同タルヲ鯉川ト一般ナリ左レバ原裁判ハ至
當ト云ラベシ(考)チヨイと(判決)之處を
僕に讀し給ヘ、ナニ〇〇〇〇(默讀)凡ソ契約

ナルモノハ其契約者雙方合意ニ成立シニ非レ
バ無効ナルベキハ固ヨリ動スベカラザルノ法
理ナリ然ルニ本件整理ヲ遂ル所上告者ニ於
テ被上告者ト約セシ所ノ主旨タル只鯉川保
存費返償ノ目的ヲ確實ナラシメン爲ノミト信
ジ差入タル傍證ハ全ク其意ニ反シタル神田
ノ地ヲ讓渡スヤ否ヤノ疑問ヲ惹起スベキ意
味ヲ含有シタルノ文字アリトハ后日ニ於テ之
ヲ知リタルモノニシテ事實ノ順序證據ノ照
應ニ於テ傍證ト事實トヲ相違セルヲ判然タリ
凡ソ證書ハ事實ヲ寫シ出スベキモノニシテ
事實ニ勝リ能ハザルモノトス既ニ本件ニ於テ
極メテ必要トスル所ノ神田御實取云々ノ傍
證ハ契約者ノ一方タル上告者ノ意思ニアラ
ザル文字及ビ事實ニ反セシ意味ヲ記載セシモ
ノトセバ其訓印ハ錯誤ニ由テ爲シタルモノト
決定スベキハ勿論ナリ然ルニ原控訴院ニ於テ
此事實ヲ誤認セシハ不法ノ裁判ナルヲ以テ原
裁判ノ全部ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ直チニ終
審ノ判決ヲ爲ス左ノ如シ宜しいか謹聽し
給ヘ、エヘン「前條ニ辯明セシ理由ニ依リ上
告者ニ於テ請求スル如ク上告人共ノ該證ニ
爲セシ訓印ハ被上告者ニ於テ速ニ取消スベ
シ但シ訴訟入費ハ始終審及ビ上告入費共被

上告者ノ負擔タルベシ」(忠誠)中島先生
の御蔭で十分に権理を恢復致しまして此な
愉快な事は有ません(尊先づ是で宜かつた
(考)宜かつたともく我黨の爲に祝すべしだ
(今)越山さん御安心でございませう、ネエ
山田さんやお雪さんも何なにか御悦びなさい
ませう(考)自治権萬歳々々々々々
と彼方は俊胤艶子の二人が色なきまでに口惜く
手も職かるゝ情態に反して頻りに喜悅を發し常
には笑顔を見せし事なき卓一が唯滿面に笑を含
んで眞實に阿今の手を取り握手したるは再び得
難き快樂なるべし

附言本稿幸ひにして江湖の喝采を受けた
り未だ訂正を得ずと雖も例に依て博雅諸
君の批評を請ふ幸ひに一言を送り給へ

南翠外史敬具

新東京

歲月流るゝが如く、物換り星移りて幾春秋を
経たりけん、日本帝國の中央首府たる東京の
模様一變して品川の海は淺深を疎り、さしも
聞えたる遠淺は千尋の深き灣となりて、如何
なる巨艦大舶も幾百といふ限りを知らず皆な
海岸より斗出せる棧橋に碇泊して、貨物を橋
上に卸す時は、棧橋會社の汽車來りて直ち
に市場へ之を送り、洲崎十萬坪の遊廓より
品川驛に至るまでは新月形をなせる海岸なれ
ども、隅田川の大江は其の央を貫通して自然
に南北の區畫を作せり、大小無數の運河の位
地は恰かも櫛の齒の如く灣に對つて疎通した
れば、此の新築地は五市場よりも堅牢なる砲
臺と鞏固なる倉庫より組立てられたるものゝ
如し、其の昔し海岸たりし鐵砲洲、築地、芝
金杉に至るまでは、隅田川の大流、江をなし
て倫敦のテームス河に於ける巴里のセーヌ河
に於ける伯林のスプリー河に於けると一般に
て、便利風光二つながら首都の偉觀を供へ
たり、市區の改正も成就したれば、道路の排

置整然として家屋も漸やく改良に就き長方
形に屹立するあり、圓錐形に突聳するあり、
石造は土藏と接し、煉瓦は鐵柱と對して舊形
の木造は場末の町に至らざれば今は見受くる
こと能はず、去れば數年以前までは四里四方
と稱へしも今は六里の餘に亘りて製造所の煙
筒より立昇る黒煙りは都門の冷熱を量るべき
寒暖計となり來りて、麻布、赤坂、四谷、牛
込、小石川の部分に到れば火は變じて水とな
り、熱鬧は化して閑雅となりつゝ、更に別天地
の想ひあらしむ、殊に淺草の北端なる山谷近
傍に至りては宏壯なる家屋としては製革會社
の大建築と其他二三の歐米人に清國人の商
店あるのみ、是とても尙ほ壯麗の數に入るべ
きものにあらねば餘は皆舊形の木造を少しく
改築したるもののみなり、去て橋場今戸に至
れば在しよりも都雅にして陶邃の趣き最も
深く建列ねたる別業のみ櫛を排べ、門を連ね
て道路の清潔無類なるべし、斯く紅熱を避け
たる地なれば、中央市區には關係薄き商人、
職工の住む者多く、山谷吉野町の街道筋に
は食用品を除くの外店を開きし家も罕なり、

(「新粧之佳人」の冒頭の一段)